間　山

―間山遺跡緊急発掘調査報告書―

II

1992・3

中野市教育委員会

序

間山遺跡は、十二川と裾無川によって形成された日野扇状地内にあり、縄文時代から中世にかけての大複合遺跡であります。

さて平成3年度から団体営土地改良事業間山地区農道改良工事が総延長1,050ｍにわたって行われることになり、この間山遺跡地内は3年度、4年度の施工計画となりました。

このため、3年度施工区内において、工事着手前に緊急発掘調査を実施し記録保存をはかったものであります。

予想したとおり、縄文時代から平安期にわたる住居址が27軒、古道等の遺構をはじめ多量の土器、石器類が出土し、この地における当時の生活様式並びに土器の組成を知るうえで大変貴重な資料集積をはかることができました。

なお、平成4年度も引き続き発掘調査を行うため、本報告書は概報として簡略にまとめたものであります。

長期にわたり調査を担当いただいた調査団の先生方はじめ、協力いただいた作業員、地元間山区内の皆様方に心から感謝と御礼を申しあげます。

平成４年３月

中野市教育委員会

教育長　嶋　田　春　三

例　言

1　本書は中野市間山地区の団体営土地整備事業用地内（総延長1,050ｍ、幅員5ｍ）のうち、平成3年（1991）6月11日より7月9日までと、中間を他の発掘調査のため中断し、10月1日より12月15日まで現地調査を行った。整理作業は12月20日から2月20までおこなった。平成3年度分の緊急発掘調査の報告書である。

2　本調査は中野市教育委員会が主体となって行った。その組織は次のとおりである。

調査団長	中野市文化財保護審議会会長・日本考古学協会員	金井汲次
調査主任	日本考古学協会員	檀原長則
調 査 員	長野県考古学会員	池田実男
事 務 局	中野市教育委員会教育長	嶋田春三
〃	〃　教育次長	佐藤嘉市
〃	〃　社会教育課長	小野沢捷
〃	〃　歴史民俗資料館管理係長	池田　剛
〃	〃　学芸員	徳竹雅之

3　現地調査には間山区をはじめ、建設委員会の役員、作業員のご協力があった事を感謝します。

4　本書の遺物の実測・執筆は檀原長則・徳竹雅之がおこなった。

5　本報告書作成のための土器の復元作業、実測図整理、トレース作業は池田実男・湯本栄一・山崎のり子・樋口義政・金井英男・檀原みち江・池田きよ子・古田茂・高橋ただし・宮本公次・樋口政勝が行いました。

6　写真撮影は檀原長則が行いました。

7　古墳時代以降の遺構・遺物と、総合した土器・石器の研究成果は、次年度の報告書に掲載する予定です。

8　出土遺物・遺構の実測図等は、中野市歴史民俗資料館に保管しています。

目　次

序

例言

第Ⅰ章　発掘調査の経過 ---- 1

第１節　発掘調査に至る経過 ---- 1

第２節　調査団の編成 ---- 1

第Ⅱ章　調査地周辺の環境 ---- 3

第１節　遺跡の立地と歴史的環境 ---- 3

第２節　層序 ---- 8

第３節　研究史概説 ---- 10

第Ⅲ章　調査の成果 ---- 15

第１節　縄文時代の遺物について ---- 15

第２節　弥生時代の遺構と遺物 ---- 18

17号住居址 ---- 18

24号　〃 ---- 21

6号　〃 ---- 25

10号　〃 ---- 32

22号　〃 ---- 34

1・4号　〃 ---- 39

2・3号　〃 ---- 45

8・11号　〃 ---- 47

12号　〃 ---- 51

18号　〃 ---- 53

19号　〃 ---- 57

21号　〃 ---- 61

23号　〃 ---- 63

25号　〃 ---- 64

26号　〃 ---- 69

あとがき ---- 71

挿図目次

1 中野市市内の主な弥生遺跡 ---------- 4
2 間山遺跡位置図 ---------- 6
3 間山遺跡調査全体図 ---------- 13
4 8号住上層出土の磯諸C式土器 ------- 15
5 縄文前期末土器拓影図 ---------- 16
6 縄文中期・弥生後期・土師土器拓影図-- 17
7 17号住遺構実測図 ---------- 19
8 17号住柱穴・土坑実測図 ---------- 20
9 17号住出土土器実測図 ---------- 21
10 24号住遺物検出図 ---------- 22
11 24号住柱穴・炉址実測図 ---------- 22
12 24号住遺構実測図 ---------- 23
13 24号住出土土器実測図(1) ---------- 24
14 〃 (2) ---------- 24
15 6号住遺物検出図 ---------- 25
16 6号住遺構実測図 ---------- 26
17 6号住柱穴・地床炉実測図 ---------- 27
18 6号住出土石器実測図 ---------- 27
19 6号住出土壷実測図 ---------- 29
20 6号住出土土器実測図(1) ---------- 30
21 〃 (2) ---------- 31
22 10号住遺構実測図 ---------- 33
23 10号住柱穴実測図 ---------- 33
24 22号住遺物検出図 ---------- 34
25 22号住遺構実測図 ---------- 35
26 22号住柱穴実測図 ---------- 36
27 22号住出土土器実測図(1) ---------- 37
28 〃 (2) ---------- 38
29 1・4号住遺物検出図 ---------- 39
30 1・4号住遺構実測図 ---------- 40
31 1・4号住柱穴実測図(1) ---------- 41
32 〃 (2) 地床炉実測図-- 42
33 4号住出土土器実測図(1) ---------- 43
34 〃 (2) ---------- 43
35 4号住覆土出土石器実測図 ---------- 44
36 1号住出土土器実測図 ---------- 44
37 2・3号住遺構実測図 ---------- 45
38 2・3号住柱穴実測図 ---------- 46
39 3号住床面出土石鏃実測図 ---------- 46
40 2号住出土凹石実測図 ---------- 46
41 8号住遺物検出図 ---------- 47
42 8・11号住遺構実測図 ---------- 48
43 石鏃実測図 ---------- 48
44 8号住柱穴実測図 ---------- 48
45 8号住上層出土土器実測図 ---------- 49
46 12号住出土土器実測図 ---------- 51
47 12号住遺構実測図 ---------- 52
48 12号住柱穴実測図 ---------- 52
49 18号住遺構実測図 ---------- 53
50 18号住柱穴実測図 ---------- 54
51 12号住出土土器実測図(1) ---------- 54
52 〃 (2) ---------- 55
53 19号住出土敲打石器実測図 ---------- 57
54 19号住遺物検出図 ---------- 57
55 19号住遺構実測図 ---------- 58
56 19号住柱穴実測図 ---------- 59
57 19号住遺物実測図 ---------- 60
58 21号住出土土器実測図 ---------- 61
59 21号住遺構実測図 ---------- 62
60 21号住柱穴実測図 ---------- 62
61 23号住遺構実測図 ---------- 63
62 23号住柱穴実測図 ---------- 63
63 25号住遺構実測図 ---------- 65
64 25号住柱穴実測図 ---------- 65
65 25号住出土土器実測図 ---------- 66
66 26号住遺物検出図 ---------- 67
67 26号住遺構実測図 ---------- 68
68 26号住柱穴実測図 ---------- 69
69 26号住出土土器実測図 ---------- 70

写 真 目 次 （文中は「写真」の文字を略し↑で示した）

1 東北から見た間山遺跡 ---------- 3
2 北から見た調査地 ---------- 7
3 6号住東断面 ---------- 9
4 7号住東断面 ---------- 9
5 20号住東断面 ---------- 9
6 15号住東断面 ---------- 9
7 遺跡から中野平を見る ----------11
8 7号住から南方を見る ----------12
9 起点、10号住から7号住を見る --------12
10 25号住から北を見る ----------12
11 北から見た17号住の遺物 ----------21
12 北から見た24号住 ----------23
13 吉田式の壷出土 ----------24
14 6号住床面の土器 ----------28
15 同 アメリカ式石鏃の出土 ---------28
16 同 壷などの出土 ----------28
17 同 甕出土 ----------29
18 同 注口土器の出土 ----------29
19 西から見た6号住 ----------29
20 西から見た10号住と中世の道、8・11号住、土取り跡、溝 ----------32
21 東から見た10号住 ----------32
22 22号住床面の壷 ----------35
23 同 白色粘土と台付甕 ----------35
24 北から見た22号住の遺物 ----------36
25 北から見た22号住 ----------38
26 北から見た1・4号住 ----------42
27 北から見た1・4号住の遺物 ---------42
28 北から見た4号住の地床炉 ----------43
29 1号住出土の壷A1 ----------43
30 東から見た2・3号住 ----------46
31 北から見た 同 ----------46
32 北から見た8号住の遺物 ----------47
33 南から見た8号住 ----------49
34 8号住上層の台付甕 ----------50
35 同 壷と高坏 ----------50
36 8号住の確認 ----------50
37 同 上層の諸磯式土器 ----------50
38 同 床面の甕と台付甕 ----------50
39 北から見た12号住の遺物 ----------51
40 北から見た12号住 ----------51
41 東から見た18号住 ----------56
42 南西隅の出土土器 ----------56
43 北から見た18号住 ----------56
44 19号住の高坏出土 ----------58
45 北から見た19号住の遺物 ----------59
46 北から見た19号住 ----------60
47 19号住東壁の壷出土 ----------60
48 西から見た21号住の遺物 ----------61
49 西から見た21号住 ----------61
50 北から見た23号住 ----------64
51 北から見た25号住の遺物 ----------64
52 25号住出土の高坏 ----------66
53 25号住東外側出土土器 ----------66
54 北から見た26号住の遺物 ----------67
55 北から見た26号住 ----------68
56 広口壷の出土 ----------70
57 西から見た地床炉 ----------70
58 南側付近の土器出土 ----------70

第Ⅰ章　発掘調査の経過

第1節　発掘調査に至る経過

昭和52年から実施された、団体営土地改良整備事業は、間山地区において農業経営の安定のため重要な役割をはたしてきた。その中で本地域は、現在まで農道・排水路等の基盤が未整備で、農業経営の合理化および安定をはかるうえで本事業の実施は、地区住民の念願であった。

今回、その関連事業として道路拡幅および改良工事が間山遺跡の範囲内において実施されることとなりました。

県教委文化課指導主事、事業主体である中野市農政課担当者、地元学識者、市教委担当者の同席のもと、現地協議を実施した。

その結果、発掘調査を実施して記録保存をはかることとなった。

平成3年4月15日付で補助事業の内定通知を受け、調査団の編成を行うとともに、必要な手続きを完了した。

また、関係地主ほか関係者に発掘作業への協力を要請した。

第2節　調査団の編成

調査責任者	嶋田　春三	中野市教育委員会教育長
調査団長	金井　汲次	日本考古学協会員、中野市文化財審議委員会会長
調査主任	檀原　長則	〃　、中野市歴史民俗資料館専門委員
調査員	池田　実男	長野県考古学会員
	的場　夏子	奈良大学
事務局	小野沢　捷	社会教育課長
	池田　剛	同　歴史民俗資料館管理係長
	徳竹　雅之	同　学芸員
参加者	湯本栄一、樋口義政、檀原みち江、古田茂、樋口政勝、池田正子、池田きよ子、金井幸子、宮本公次、秋山恒巳、小林資成、石井邦明、内藤年男、古川重春、古川光夫、池田恒好、町田　哲、佐藤芳太郎、山崎のり子、土屋守子佐藤とみ子、小林保子、海野米次、関取久江、羽片利太郎、藤沢富男、土屋志郎、滝沢伊佐吉、古川今朝治、矢野儀一、関取茂善、小林竹重、黒岩健三海野佐介、佐藤俊雄、小林充男、鈴木則成、小林純雄、小林次男、宮嶋克己	

矢野武明、牧野正雄、牧野袈裟治、土屋一男、酒井一、阿部武一、海野忠文
関取あや子、古川佳一、矢野謙一郎、市川さだ子、土屋さつき、牧野てい、
中山喜重、海野まさ子、矢野きよみ、小林五雄、土屋忠成、古川しず江、牧
野文江、小林市兵衛、土屋貞子、小野沢京二、小野沢智子

（順不同、敬称略）

第II章　調査地周辺の環境

第１節　遺跡の立地と歴史的環境

上信国境に位置する志賀高原より連なる山脈は、笠岳（2075.8m）を経てピラミット形の三沢山（1504.6m）に連なり、その姿は中野平の東方に認めることができる。

この西方に三角錐状の峰が認められるこの峰を地元では、剣ケ峰または、雲井岳（1179m）と呼んでいる。

これから報告する間山遺跡を囲む、山並みの最高峰であって、北に向かう支脈は山ノ内町と中野市の境界をなし、箱山（695m）に至って終わっている。西にのびる支脈は間山遺跡の西を扼して新野地籍の金鎧山古墳のある尾根の裾が中野平に没入している。

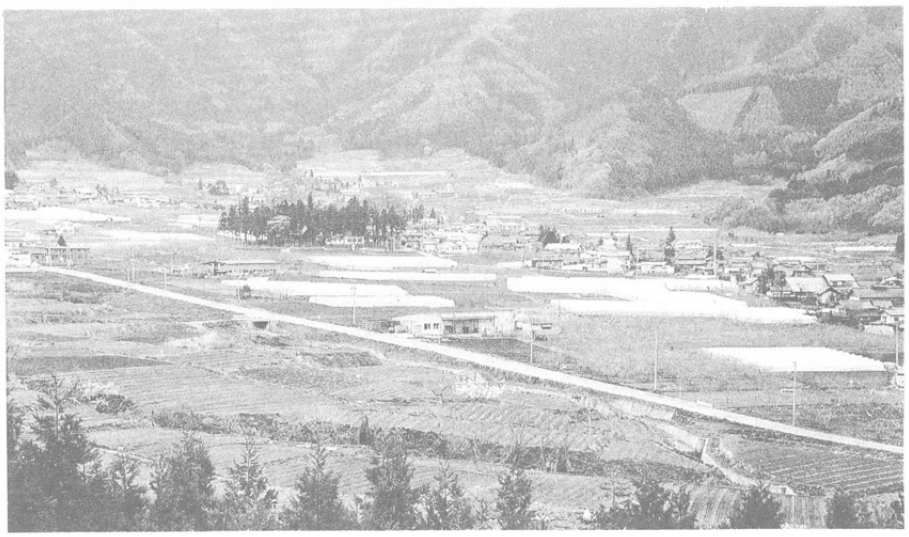
南の支脈は、雁田山を構成し須坂・小布施の扇状地に没入している。

間山地籍の山は、一部の安山岩地域を除いて、おおむね玢岩で構成されている。これらの玢岩は熱水作用をうけて風化し、豊かな土壌を作り、山は杉の美林に覆われている。

この山あいの東西約１kmの緩傾斜面に間山集落があり、その中央に間山遺跡が所在する。こうして北方のみ中野平に開け、7度から13度の傾斜で、小扇状地をなしている。

この中に東方の中野市史跡、健応寺跡付近から流下する十二川と、さらに奥の剣ケ峰の麓（道観山）を源流とする裾無瀬川が、遺跡の東と西端に流れている。

調査地付近は、礫がみられるが黒色の土壌が１m以上厚く堆積し、肥沃の土地と言われている。



↑　東北から見た間山遺跡（森は間山豊富神社）

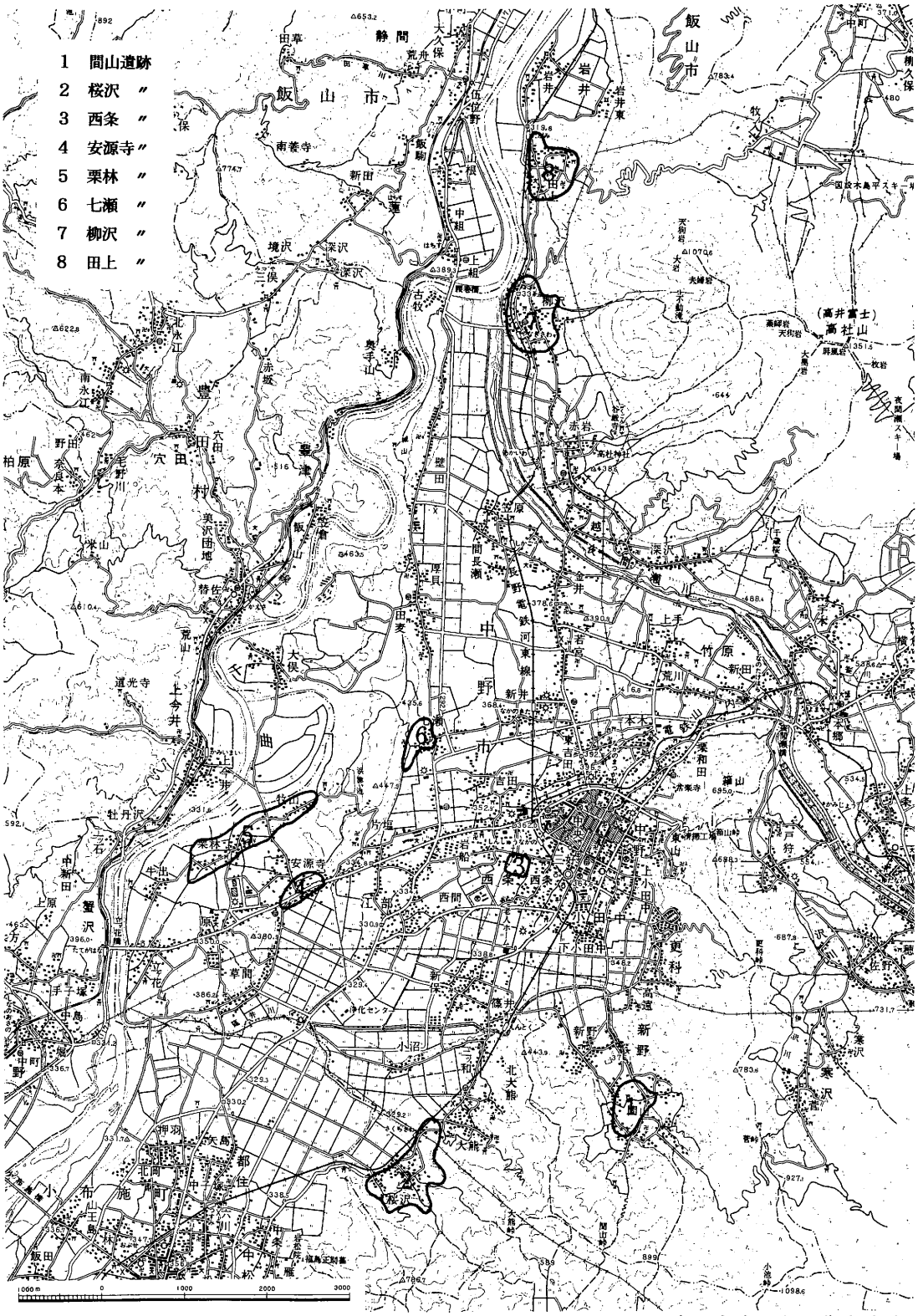


図1　中野市内の主な弥生遺跡

ここには従前には、ホップ（ビールの原料）が栽培され、現在はリンゴ・アスパラが広く栽培されている。

今回調査した遺跡の範囲は、中野市大字新野溜池上、同間山石動(いするぎした)下、同森下、同津島にわたり、調査地点はこれらの字境線の両側に分かれている。

つぎに間山の歴史について概観すると、東の山腹に所在する健応寺跡は、昭和57年（1982）までに、3次の発掘調査が市教委によっておこなわれ、7,000㎡に及ぶ遺構の一部の主要部分を選択して発掘した。

この結果、平安末～鎌倉時代に溯る形式の3号堂址、鎌倉中期以降存在可能な2号堂址、室町時代と推定される1号堂址などが検出され、この1号堂址は、現在の善光寺本堂の伽藍建築と同じ様式で、北信地方に類例のみられるものである。

ここからは、銅製阿弥陀如来像・銅製観音菩薩座像・銅製神像片などが発掘されている。

このような結果から中世には、大規模な修験道の寺院が栄えていたことがうかがえる。

元徳元年（1329）の『諏訪大宮（上社）造営目録』には奥郡のうち「外垣五間　前山」とあり、地勢上から前山と呼ばれ、真山から現在の間山と表記されたとみられる。

南北朝の頃、諏訪氏の一族が真山に住んで、在所名を称え足利尊氏から、

奥州凶徒対治の事、忠節を致すべきの状如件。

観応3年（1352）4月10日

諏訪左近蔵人殿　　（花押）（足利尊氏）

の軍忠催促状が与えられている。

間山から山の反対側は高山村駒場で、鎌倉時代から高梨氏の根拠地の一つで、真山氏が奥州に去ってからは、同じ尊氏党の高梨経頼が、この地を領有するところとなり、政盛の代には一時、間山に館を構えたとの伝えがあり、のち中野小館に移ったとされている。

永正7年(1510) 越後守護上杉房能の敗死に憤慨して、越後に攻め込んだ関東管領上杉顕定に守護代長尾為景と同盟する高梨政盛は、魚沼郡六日町長森原において、敗れて関東に退去する顕定の首級をあげ、長森原の石動神社に凱旋をあげ、間山の館にかえる石動の構えとなり、と江戸時代の記録（白井文書）に書かれている。

天文21年高梨政頼は上洛に際して「上条・上木島・前山」の3ヶ村に御留守中の夫役を負担させている。

間山の石動社の西方の山上には、小曽崖城跡があって、中国陶磁が出土し注目されている。

また、南面中央の山から派出して、独立状をなす山には真山城があって、山ノ内・健応寺・上高井方面との要路に位置している。

間山峠西の尾根の分かれには、古相の山城址があり、沼の入城として「中野市遺跡地名表」に登載している。

ここより小曽崖城に通ずる中間の尾根上にも砦址があり、遺跡の北の更科との境界の山上に

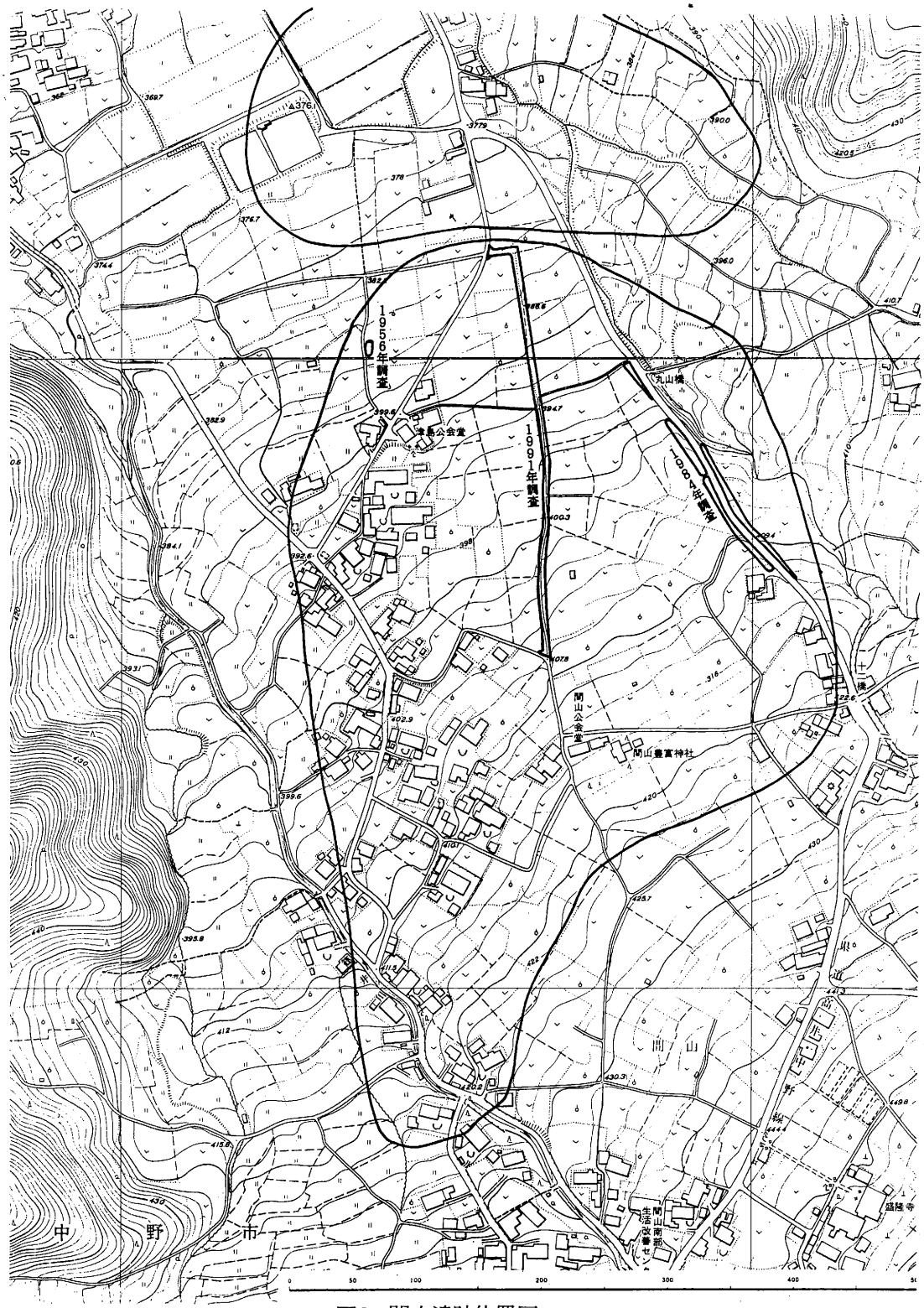

1956年調査
1991年調査
九山橋
津島公会堂
間山公会堂
間山豊富神社
間山南部生活改善センター
中野市
間山
盛隆寺

図2　間山遺跡位置図

も砦址があり、これらの砦址は、つなぎの城の役目をもっていたとみられ、間山集落を囲んでいる。

近世の間山の開発は、甲州浪人の帰農した人々が主になって進められ、慶長7年(1602) 森忠政検地（右近竿）722石1斗8升、慶長8年松平忠輝領、元和2年（1616）旗本近藤氏領、元和5年（1681）福島正則領、寛永元年（1624）幕府領、天和元年（1681）尾張支藩松平義行領、延宝3年（1675）幕府検地790石8斗3升、宝永元年（1704）同852石7斗5升以降同じとなっている。

宝暦7年(1757) 健応寺跡北方の山腹が崩れ落ち、家屋11軒死者7人、田畑8町歩が埋没する被害があり、屋敷替えを行っている。

文政5年(1822) の「村差出明細帳」によれば、村高872石2斗9升1合、家数161軒、社家1軒、寺3ヶ所、堂3ヶ所、男381人、女357人などとなっており、明治初期まで、ほぼ増減なしで推移している。

↑ 2　北から見た調査地

第2節　層　序

間山地籍の地質は大部分玢岩によって構成され、平成2年（1990）遺跡から東南の地点で、温泉ボーリングに成功して中野市では、この温泉を核として公園の整備を進めている。このようにこの地方では、温泉が玢岩から湧出する例が多い。そしてこの玢岩は熱水作用をうけて、風化がすすんでおり、間山の地質を構成している。

このような土砂が川の作用によって運ばれ、小扇状地をつくっている。遺跡はこの中にあり、石礫もあるが黒土が厚く堆積している。

道路用地は北に緩く傾斜し、さらに東側が高かったことで、主な住居址の東壁断面を観察すると、7号住居址中央東壁では、床面から地表まで145cmで、1層黄褐色土（耕作土）約10cm、2層暗黄褐色土約20cm、3層淡黒色土50cm、4層暗黒色土(床埋没土）約30cm、5層淡黒色土（黄色土点在）20～50cm、6層暗黒色土約15cm、以下地山黄色土層となっている。

この3層上面が、中世の時代に該当し4層上面が古墳時代、5層以下が弥生時代以前と推定される。

6号住では、上層から黄褐色土(耕作土）13cm、暗黄褐色土16cm、淡黒色土40cmには、多量に石礫をふくんでおり、その間に古墳時代の土器が存在した。その下には弥生後期の土器があり、この石礫層は6号住が埋没した上にあり、人為的に成された可能性がある。

この下は黒色土に黄色土が混在して、40cmの深さで床面に達する。この混在した土は6号住の南側確認面から床面までは約75cmである。これは住居構築の掘削土が混入して埋没したものとみられる。

21号住では上層から黄褐色土（耕作土）20cm、暗黄褐色土23cm、黒色土38cmでこの下に礫がみられ、黒色土38cmは竪穴を埋めていた。

25住では上層から黄褐色土（耕作土）12～15cm、黄褐色土12cm、淡黒褐色土20cmで、下層の黒色土34cmの間に礫層が介在し、淡黒色土（黄色土混在）45cmは住居址の埋没で、ここの地山の黄色土には、礫が多く含まれている。

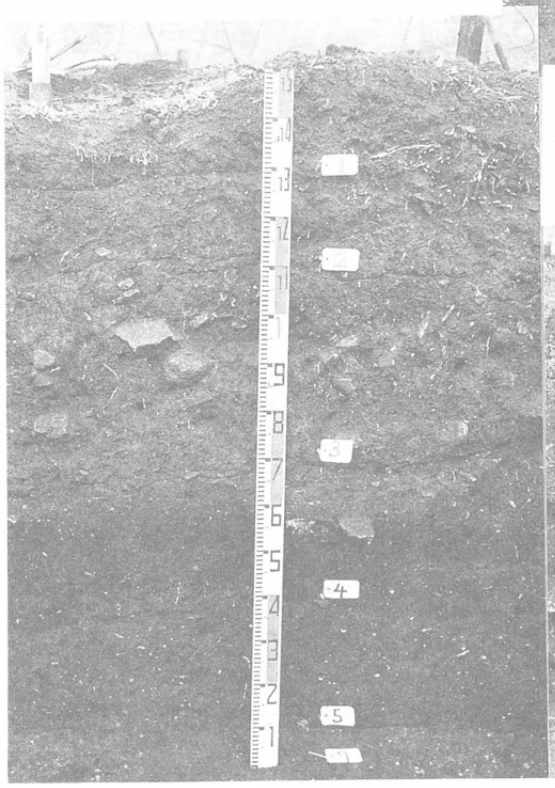
以上が主な地点の土層観察であり、弥生時代にも黒色土がかなり堆積していたと思われるが、住居址の確認面から上に平均して、90cmの土が現在までに堆積していることになる。

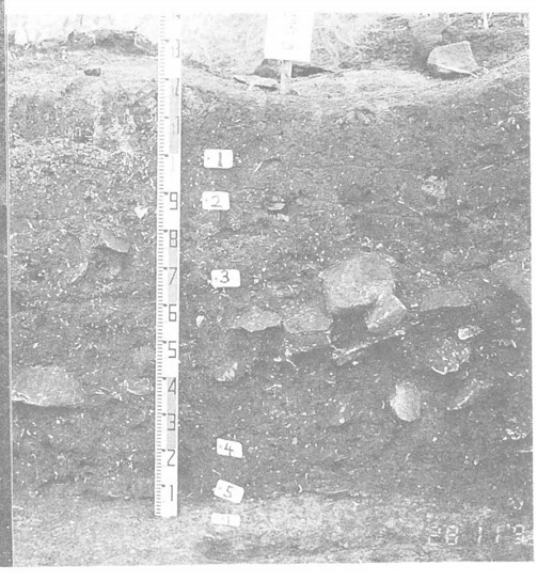
この間には耕作面とみられる層位があり、この面の特定と広がりが、中世以前の村の姿を知ることになろう。

↓3　6号住東断面

↑4　7号住東断面

↓6　15号住東断面





↑5　20号住東断面

第3節　研究史概説

間山の今回調査した周辺は、以前から土器・石器の発見で知られていた。ここの故人、鈴木祇薫氏が採集された遺物をこの地方の考古学の先達、神田五六氏が注目された、昭和7年(1932に記録が始まる。

その後、桑畑の深耕、ホップ栽培の棚の吊線の掘削などによって、土・石器が発見されてきた。昭和14年（1939）の下高井郡教育会の郷土調査部で作った「下高井郡先史時代遺物発見地名並所蔵者表」によれば日野村2とあり、間山津島遺跡が挙げられている。

大戦後、原始・古代史にタブーの多かった時代を脱し、実証的学問の考古学が脚光をあび、昭和21・22年(1946・7）中国大陸で考古学調査に従事されていた、小野勝年先生が日野小学校に勤務され、この間山に住まわれた。

先生は、学校勤務のかたわら下高井地方の考古学調査に奔走され、奈良国立博物館に移られた後も調査を続けられ、これらは、昭和28年（1953）《長野県埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ『下高井』の「下高井地方の考古学的調査」》の論文となって結実した。

ここには縄文遺跡の項に日野村間山津島遺跡として「遺跡は扇状地のほぼ中央部にあたる豊富神社と権現社が中心で、遺物は学校付近からもときどき発見され、」と記され、遺物では石鏃・石錐・石匙・大小の打製・磨製の石斧・石皿・石臼・磨石・敲石・環石と、土器では羽状縄文や竹管文の類がある。金石併用期の項では、遺物として磨製蛤刃石斧・石槌・凹石・石臼・紡錘車・管状土錘・土玉などで、石包丁の発見を聞かない。土器では甕・壷・甑・高杯などであると記されている。

昭和27年（1952）3月末、現間山木材会社の南側の畑（所有者原沢藤助氏）で、弥生式の甕2個が口辺を合わせて、粘土で固め、平石が周りに積まれた中に納めてあった。このことから甕棺の類ではないかと推定されている。

昭和32年（1957）11月、同原沢氏の畑から銅鏃が発見され、神田氏の報告がある。

この当時、神田氏は箱清水式に伴うものとして断じておられるが、その後の研究で、古墳時代に属することが判明している。

昭和31年（1956）刊行の『信濃考古綜覧』の遺跡地名表には、中野市日野地区間山（津島または石動道下）、「出土遺物、縄文式関係－有尾式・南大原式・石鏃・打製石斧・磨製石斧・石匙・石錐・敲石・擦石・石皿・凹石・環石・石棒。弥生式関係－箱清水式・甕・壷・高坏・甑・紡錘車・管状土錘・土製玉・太形蛤刃石斧・磨製石鏃・環状石斧・凹石・石槌。土師器－後期糸切皿」と記されている。

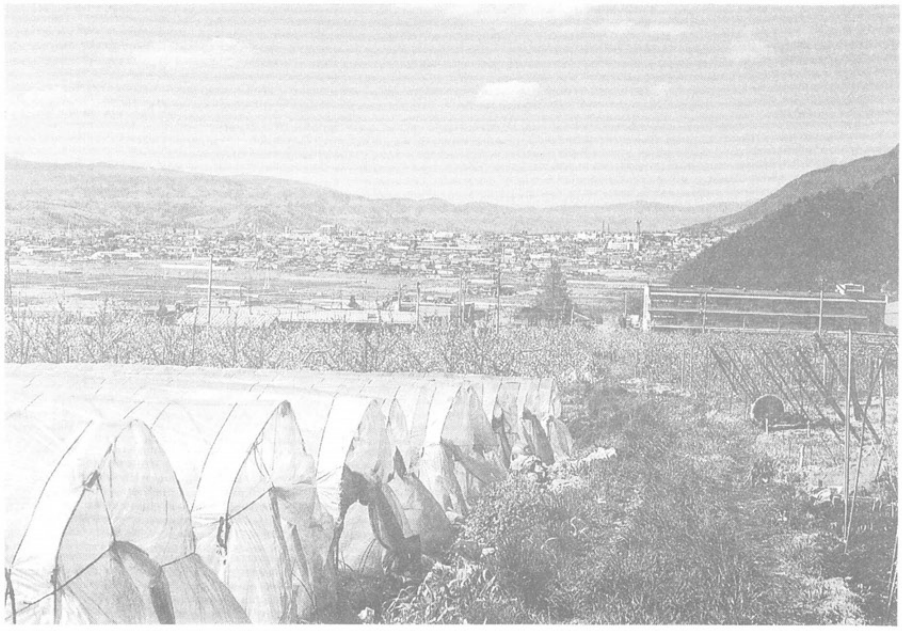
前に述べた銅鏃発見後、飯山南高校に在職されていた、桐原健氏はこの遺跡の重要性の認識から、昭和33年（1958）10月当該地の調査を企画され、鈴木祇薫氏の斡旋により隣接する石動下の土屋利平氏の畑を同学の人達の応援を得て発掘調査することになった。（今回調査したA

3・10号住の西南の畑)この結果7.2×5.2mの範囲に石組かまど？などの遺構があり、土師器皿5点、灰釉陶器皿3点、同高台付　破片、同水瓶底部破片1点、木炭片、須恵器・管状土錘4点、鉄製手斧1点など出土し、灰釉陶器から平安中期頃の所産とされている。

昭和58年(1983) 8月、県道須坂～中野線の拡幅改良工事に先立って、緊急発掘調査が、字森下・十二の地籍で、中野市教委が主体となって、調査が行われた。

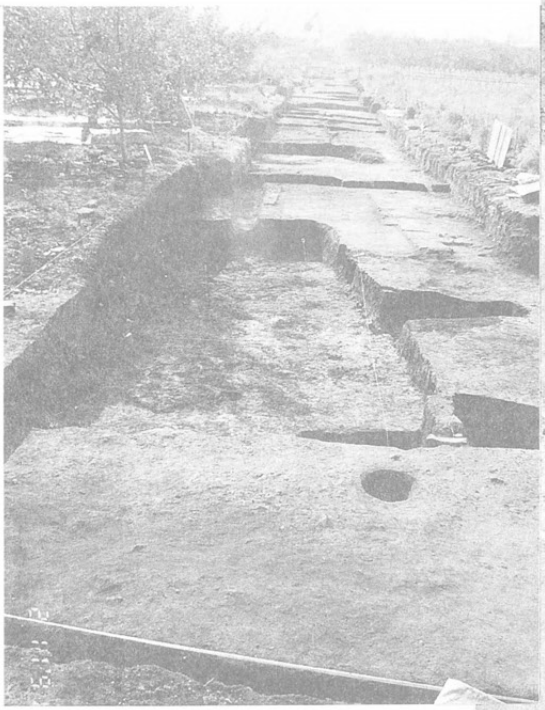
この調査で、縄文前期関山式の土器片、磨製石斧1・打製石斧1・石鏃2・凹石2。弥生後期箱清水式の住居址1、集石址2と、遺物では高坏・壷・甕・鉢・甑・蓋・打製石斧、古墳時代の集石址2、五領式併行土器。奈良時代住居址1、真間式平行の坏・高台付坏・高坏・壷・甕。平安時代住居址1、国分式併行の坏・高台付坏・足高高台付坏・灰釉片・須恵片・刀子1・鉄器片1。室町時代、聖宋元宝1・石臼片2。内耳土器片などが出土した。

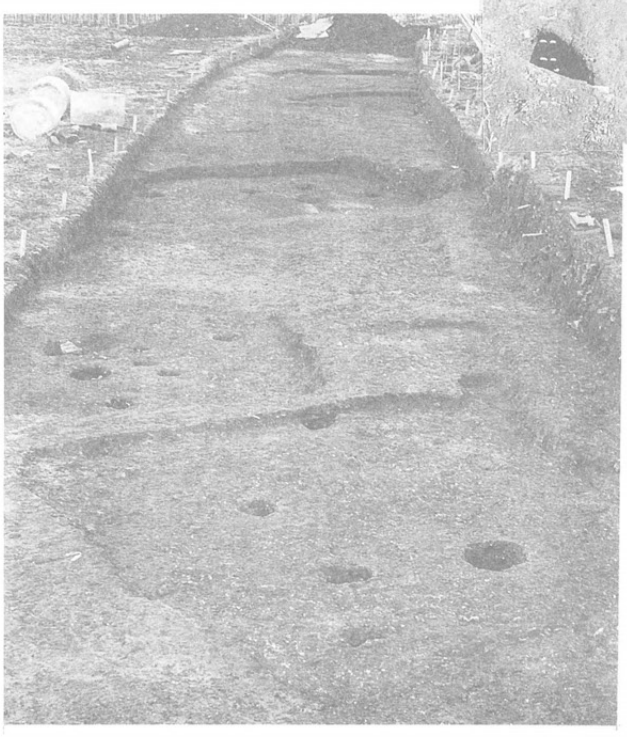
以上がこれまでの間山遺跡の研究史の概略で、市内で注目される遺跡の一つで、学術的な発掘は今回で3回目である。



↑ 7　遺跡から中野平を見る

↓8　7号住から南方を見る





↑ 9　起点、10号住から7号住見る

中央は中世の道

← 10　25号住から北を見る

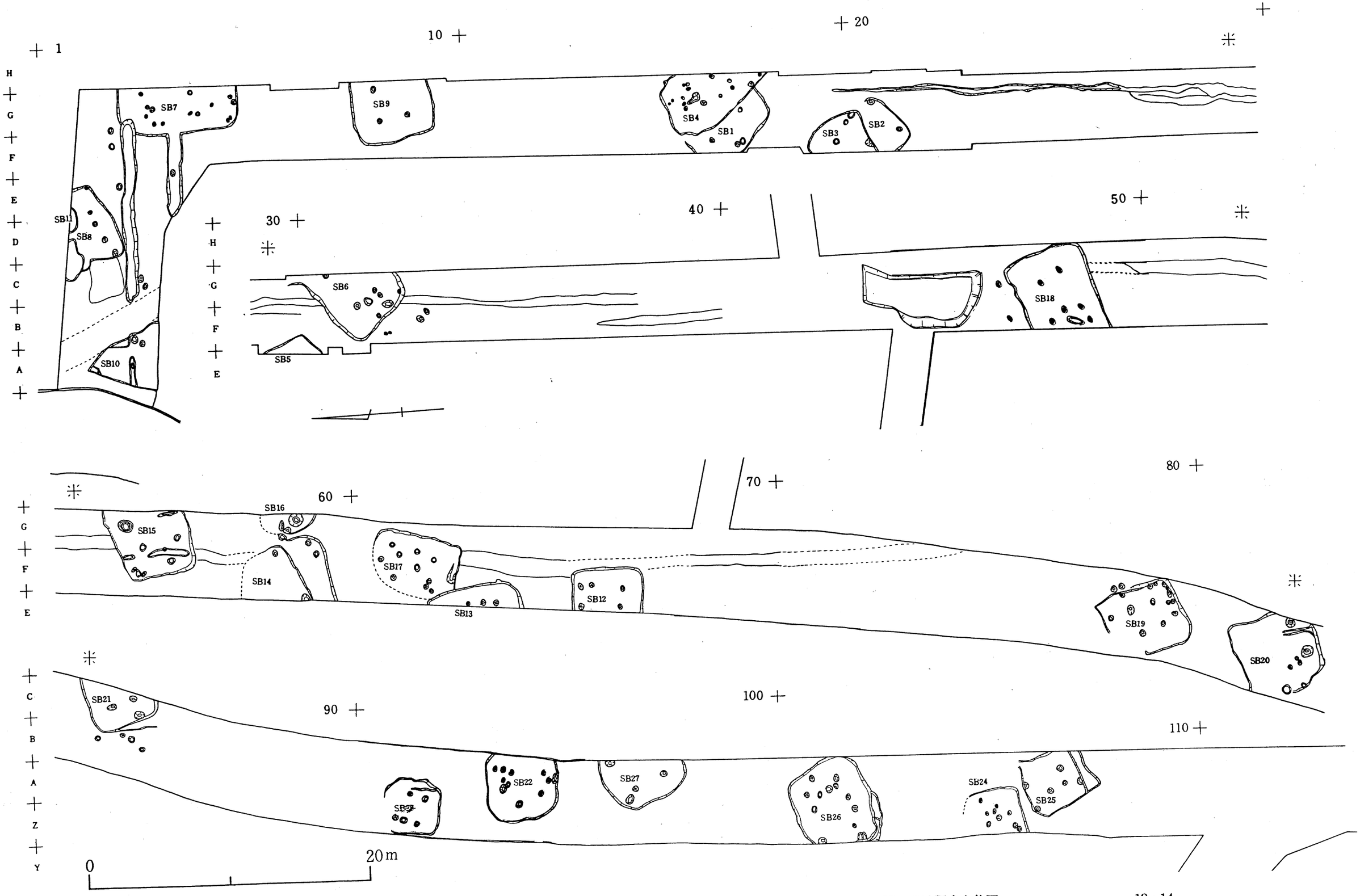


図 3　間山遺跡調査全体図

第Ⅲ章　調査の成果

第１節　縄文時代の遺物について

今回の調査で検出された、縄文時代の遺物は起点からＧＦ35までの下段のグリットから検出され、層位的には2・3号住の南側で、地山土上に中期土器が見られたほかは、弥生土器の上層に、位置するものが多く当該期の石器も9号住上層から石皿・磨石・敲打石が検出されている。

これらは流れこみによるものと考えられ、付近に遺構の存在と、傾斜地のため移動したものとみられる。

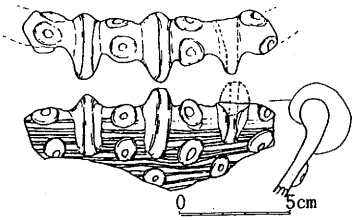


図4　8号住上層出土の諸磯Ｃ式併行土器

縄文時代の土器は前期末の諸磯Ｂ式併行土器からみられ、木葉文の口縁の内折した浅鉢の破片、(図5－25) 細い平行沈線文の土器（図5－8）浅鉢の口縁部で、縄文地文に木葉文に類する文様を沈線で描いた土器（図5－23）、肋骨文の土器（図5－28）などが、Ｂ式段階の土器と思われる。

Ｃ式の土器は、集合条線の土器（図5－21）口縁に貝殻状貼付の土器（図4）浮隆文の土器（図5－13)や、図示してないが、集合条線の上に結節状浮隆文の土器などが、前期末葉の土器で、これらのＢ・Ｃ式の土器に羽状縄文の土器が平行し、中部山地北よりの地域色を表している。

中期の土器は、北陸系のＢ字状文の土器、(図6－36) 縄文地文上に波状の隆帯のみられる土器（図6－33）などに太い縄文の土器（図6－34）など、中期前葉の土器と思われる。

従来から知られた間山遺跡の縄文時代の編年は、つぎのとおりである。

時期	ほぼ該当する編年	文献その他
Ⅰ期　前期	関山式	中野市教委「間山」1984
Ⅱ期　〃	諸磯Ｂ式	1991年調査
Ⅲ期　〃	〃　Ｃ式	〃
Ⅳ期　中期	徳前Ｃ式・新崎１式	〃

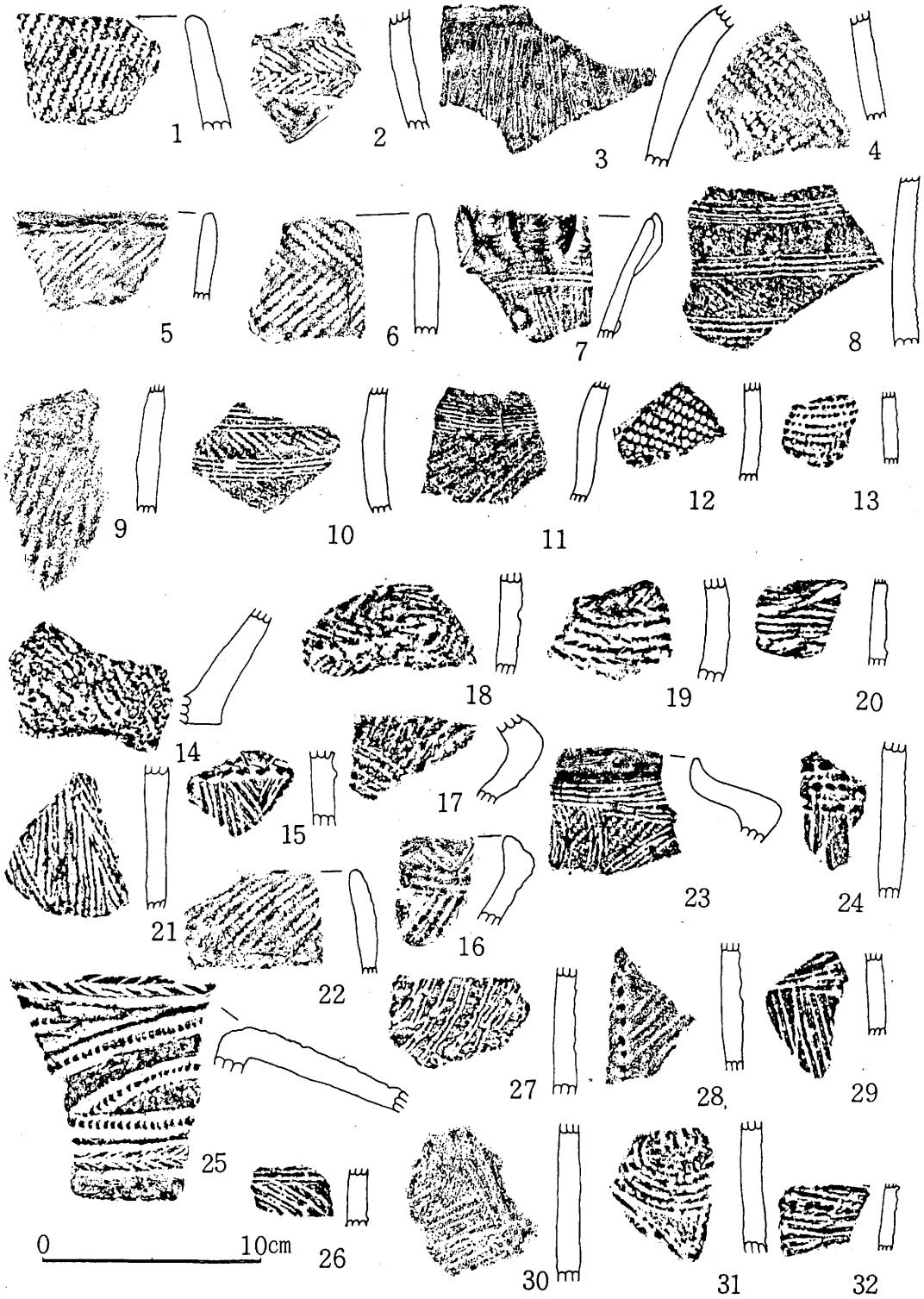


図5　縄文前期末出土器拓影図

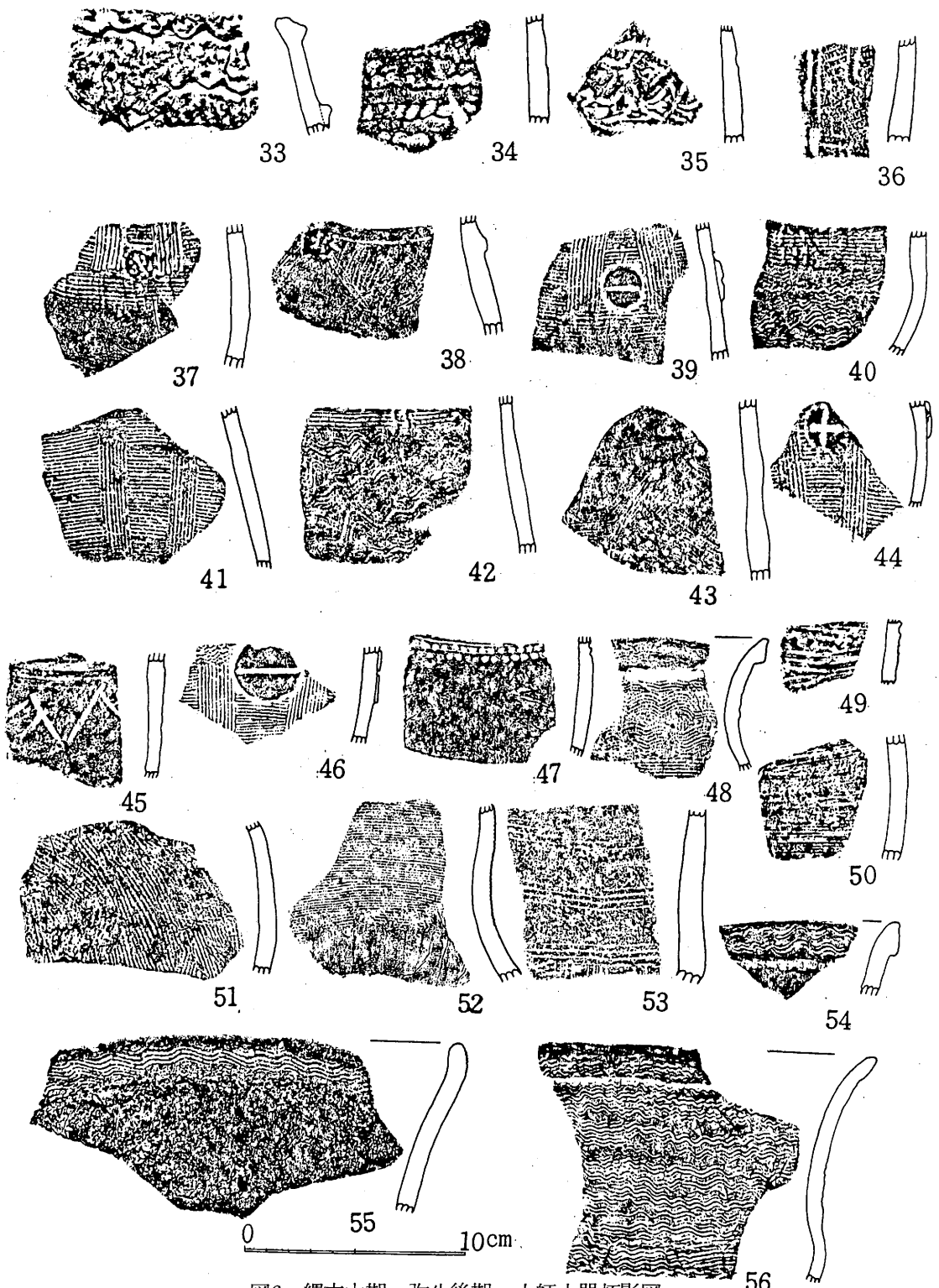


図6　縄文中期・弥生後期・土師土器拓影図

第２節　弥生時代の遺構と遺物

今回の調査で、部分的な検出を含めて、27住居址が発見され、そのうち弥生時代の住居址は次の通りであった。

時期	該当する編年	住居址	検出面積割合
Ⅰ期	弥生前期末	無	
Ⅱ期	〃 中期前葉	〃	
Ⅲ期	〃 後葉	〃	
Ⅳ期	〃 後期前葉 吉田式新	17号	4／5　13号住と一部複合
	〃	24号	1／2
Ⅴ期	〃 後葉 箱清水式古	6号	1／2
	〃	10号	1／3
	〃	22号	9／10
Ⅵ期	〃 新	1号	1号住と4号住が複合
	〃	2号	2号住と3号住が複合
	〃	3号	
	〃	4号	
	〃	8号	3／5
	〃	11号	1／10　8号住と複合
	〃	12号	1／2
	〃	18号	4／5
	〃	19号	ほぼ完掘
	〃	21号	1／2
	〃	23号	3／5
	〃	25号	4／5
	〃	26号	4／5

（注）　住居址番号は検出順です。

17号住居址　（吉田式期）

この住居址の中央上に中世の道が横断し、西方は一部13号住に切られている。土器の出土は少なく図示の壷下半部（図9）は、吉田式の特徴を示している。

傾斜のため、北側の壁は不明であるが、一辺が6ｍの方形の住居址で、焼土が2ヶ所と柱穴が10ヶ所あり、ＱＰ3・ＱＰ4・ＱＰ10・ＱＰ7が主柱穴と見られる。

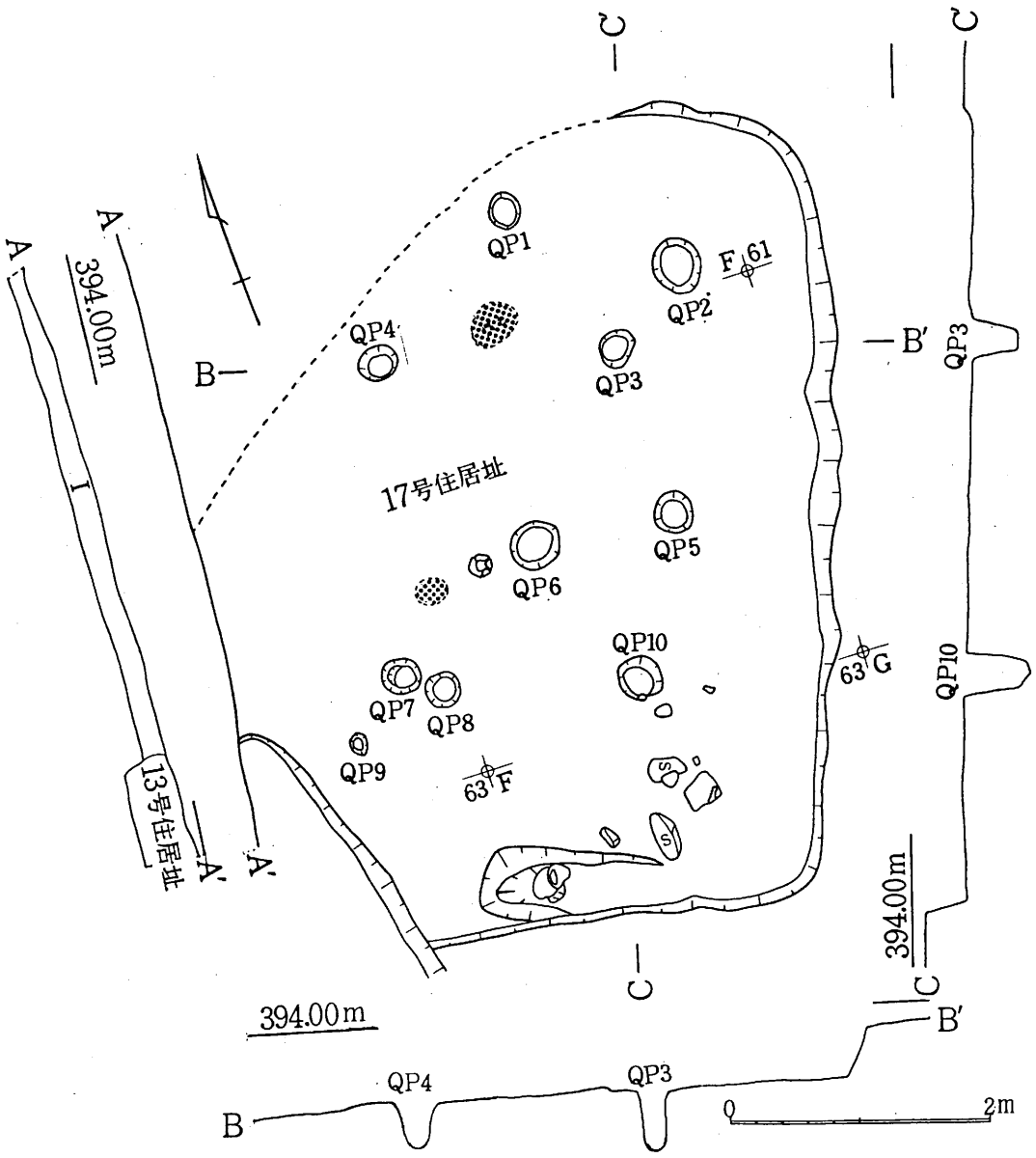


図7　17号住遺構実測図

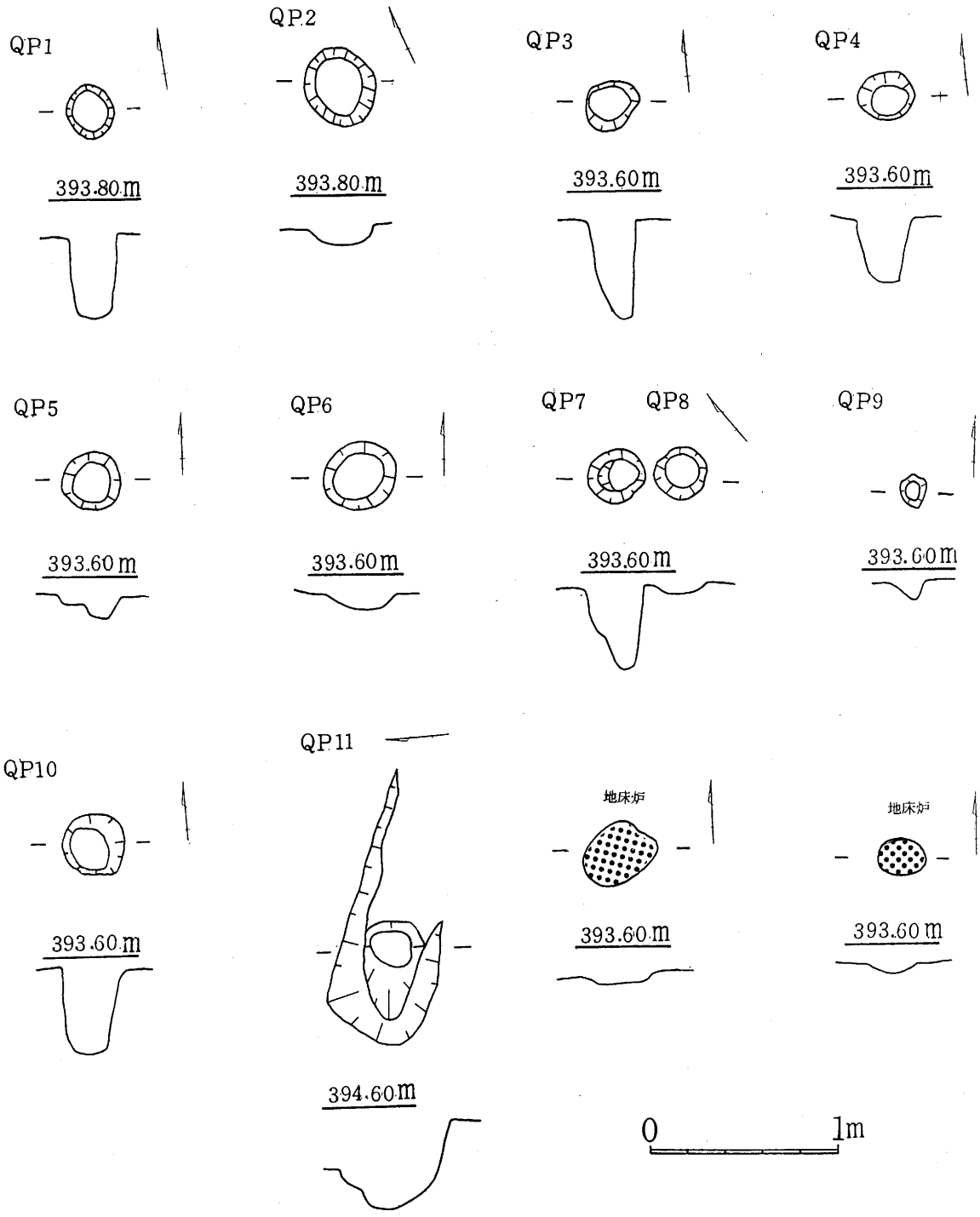


図8　17号住柱穴・土坑実測図

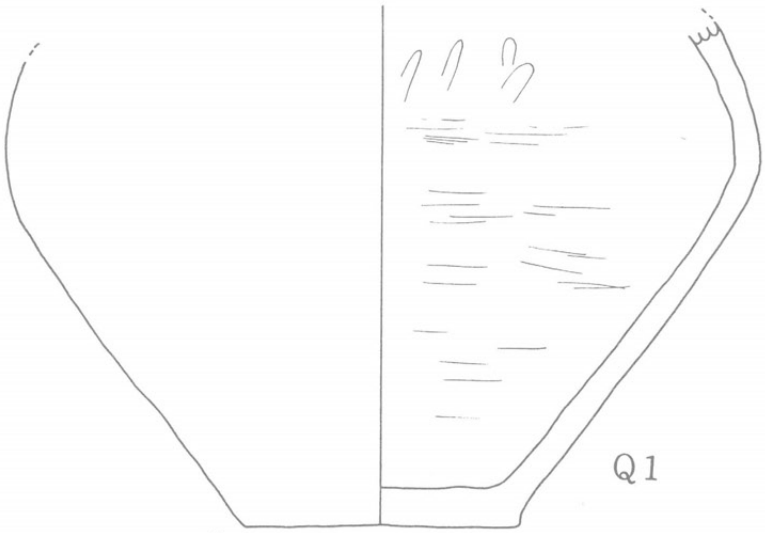


図9　17号住出土土器実測図

↓ 11　北から見た17号
住居址の遺物
右上は13号住居址
中央上は中世の道

24号住居址　（吉田式期）

方形の一辺約4mの住居址で、西側には未調査地を半分残している。この住居址も傾斜のため、北側の竪穴の壁は判然としない。それは堀りこみが少なかったことにもよっている。縦長の炉辺石が、北より中央にあり、東側は焼け土部分、西側は柱穴があった。検出した柱穴からは小屋組の構造の復元は困難である。

ここから出土した土器で、図示した甕X1は上層出土で、壷X3　X4と口縁が平らな小形鉢は、この住居に伴うものと思われる。

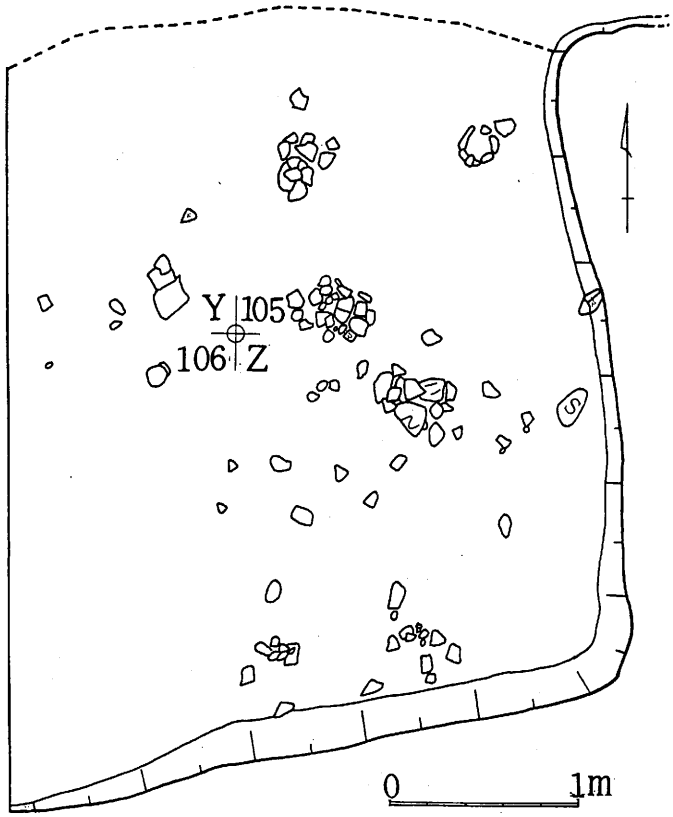


図10　24号住遺物検出図

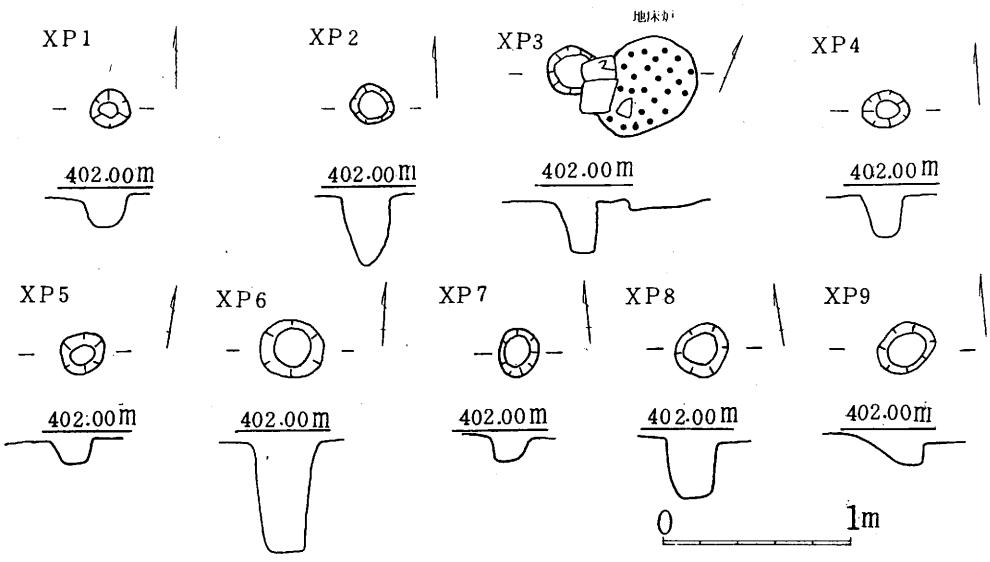
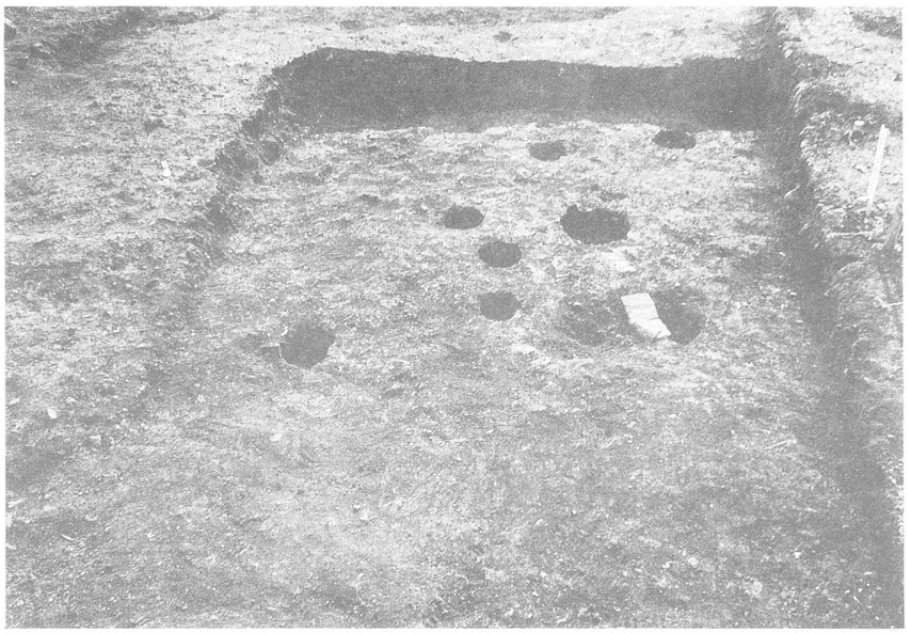


図11　24号住柱穴・炉址実測図



↑ 12　北から見た24号住

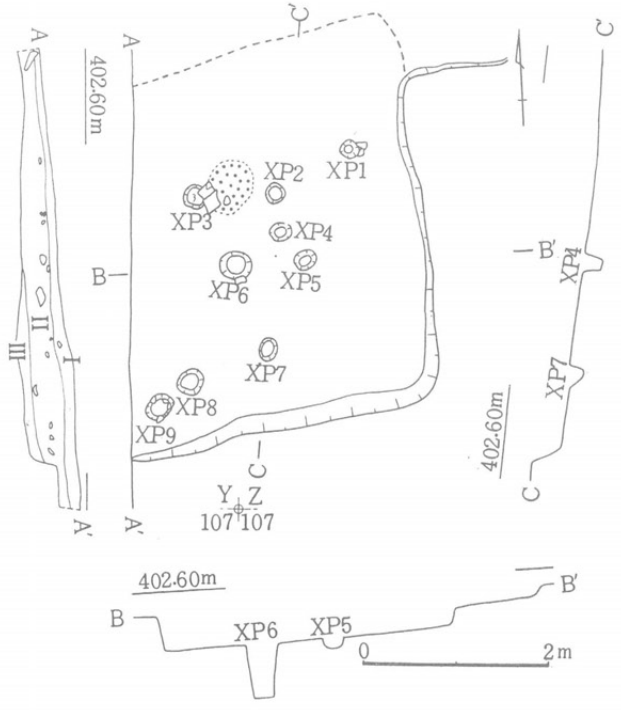


図12　24号住遺構実測図

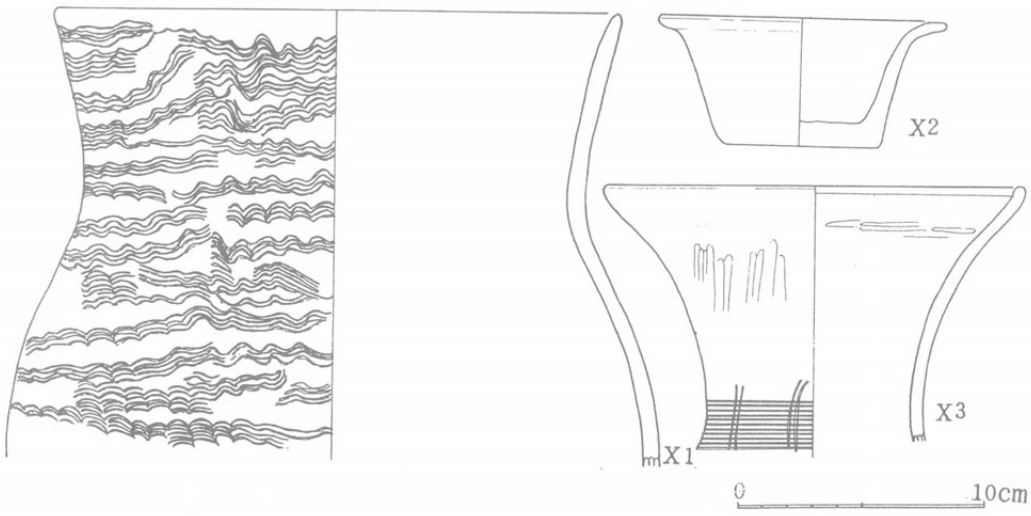


図13　24号住出土土器実測図(1)

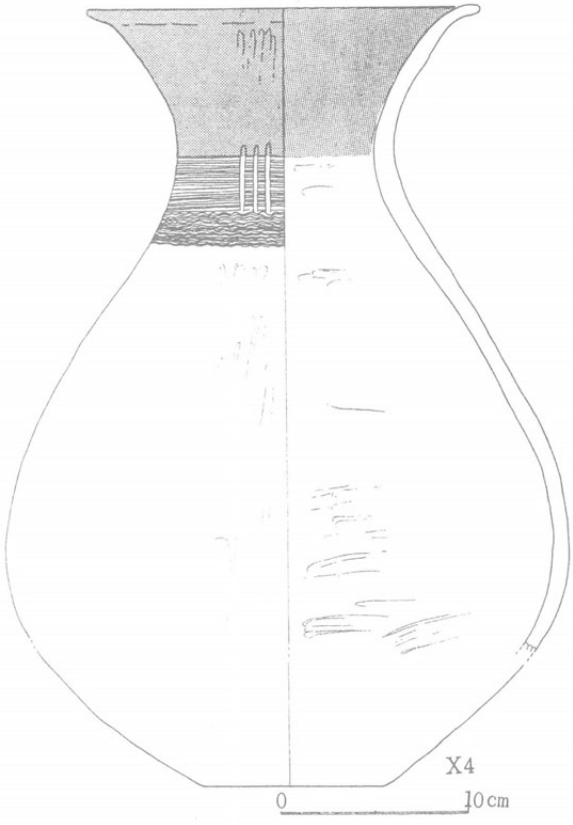
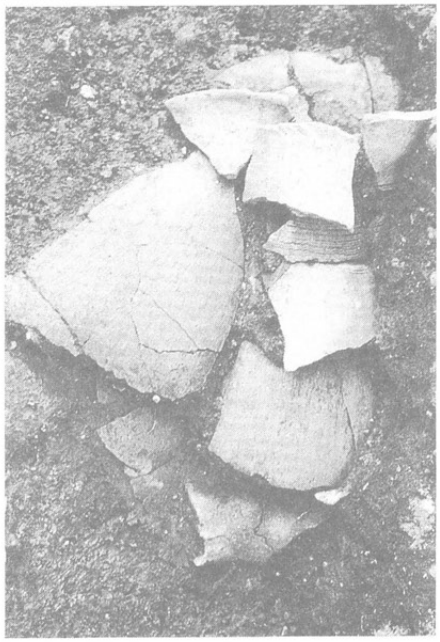


図14　24号住出土土器実測図(2)



↑ 13　吉田式の壷出土

6号住居址　（箱清水式古）

方形で、一辺5.5～6mの間山遺跡とすれば大形の住居址で、角を南側即ち傾斜の上においている。雨水の排水を考慮して、設計されたと考えられる。

床面覆土の上に石礫層があって、この間に、古式土師器が包含されていた。

この住居址の床面には、多くの土器があり、図示した土器の内、F1・2・3・8を除いたものが該当する。また、ブルーのガラス小玉1、アメリカ式石鏃2などが、床上5cmの位置から検出された。

西より柱穴EP6とEP7の間に地床炉があり、EP1と未掘の柱穴が主柱になると思われる

アメリカ式石鏃は、中野市では新発見で、大阪府でも発見されたと言われるが、多くは新潟県から日本海側の地方と、東北南部の弥生式遺跡から出土が知られている。鋭く尖った形式に属するこの石鏃の分布圏や所属時期などの究明は、今後に残されている。

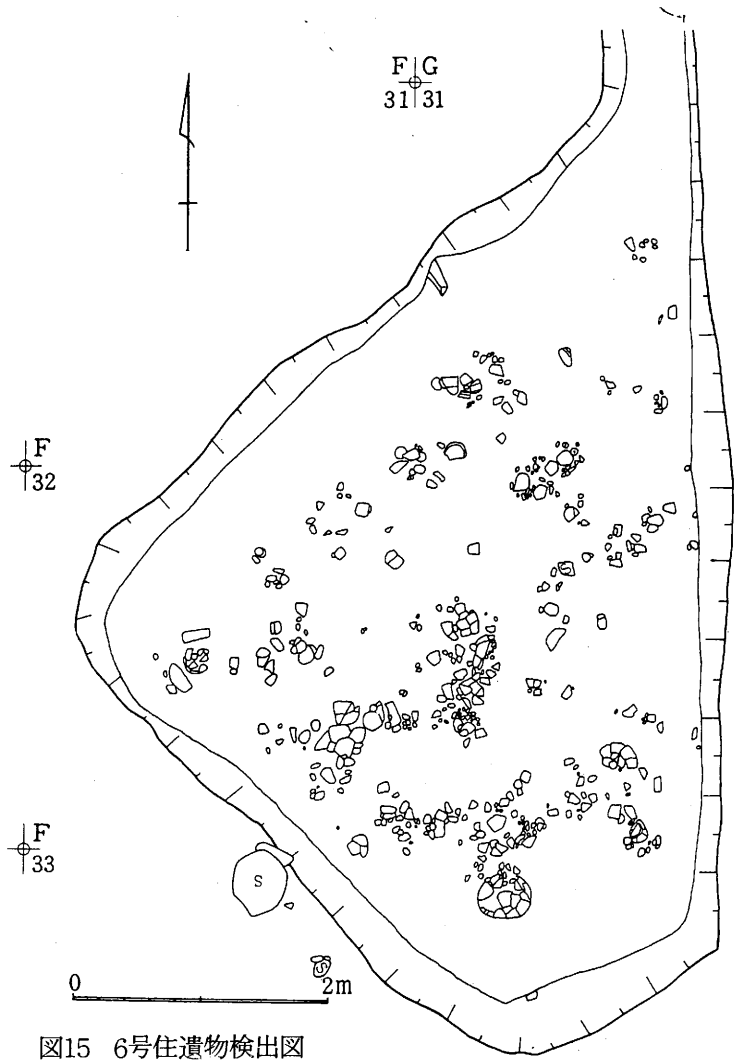


図15　6号住遺物検出図

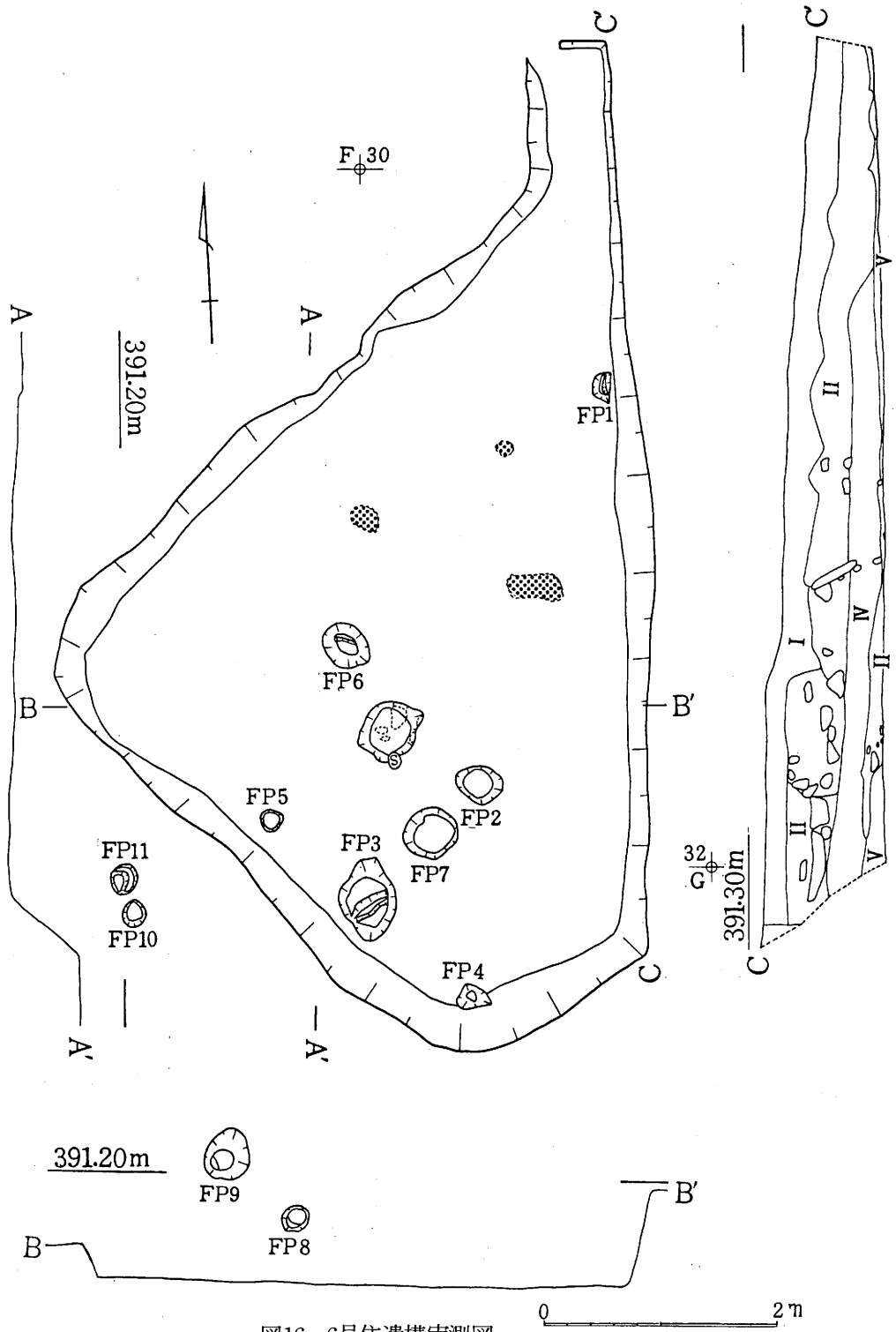


図16　6号住遺構実測図

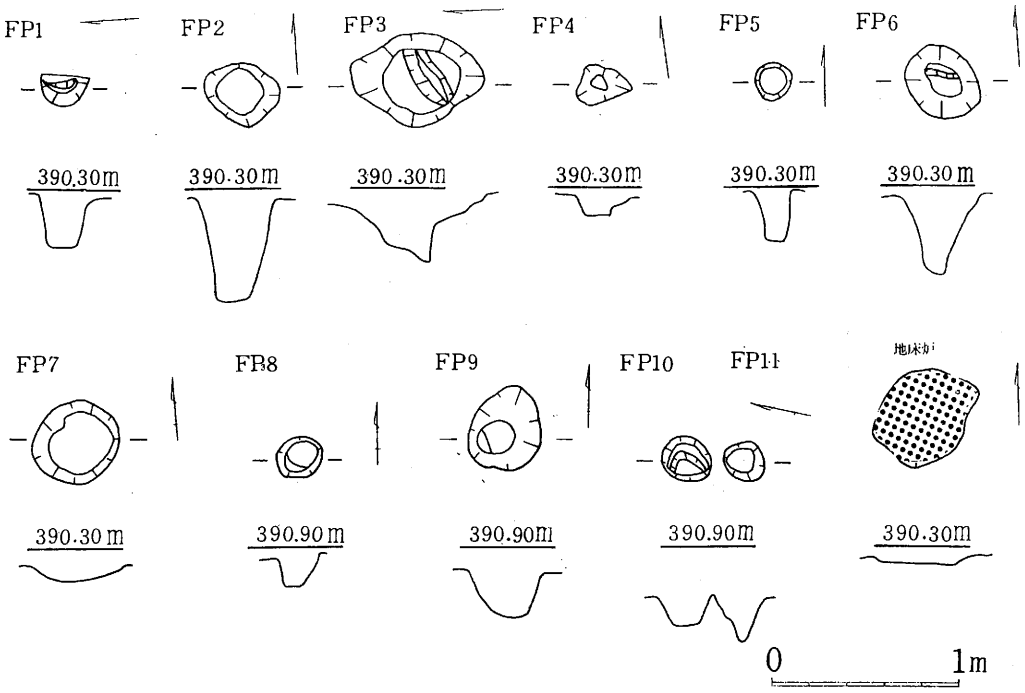


図17　6号住柱穴・地床炉実測図

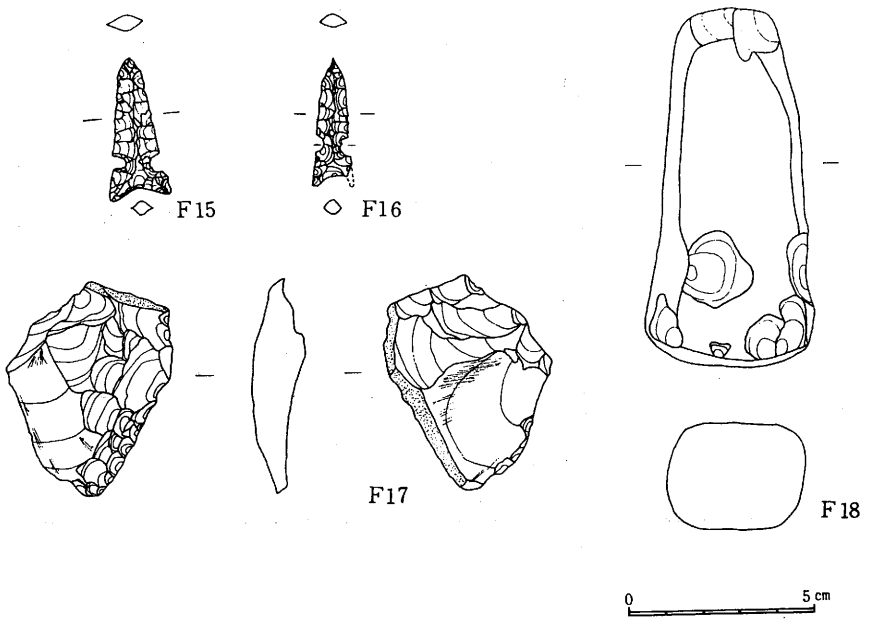
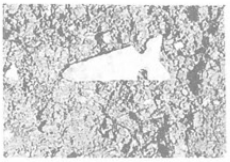


図18　6号住出土石器実測図

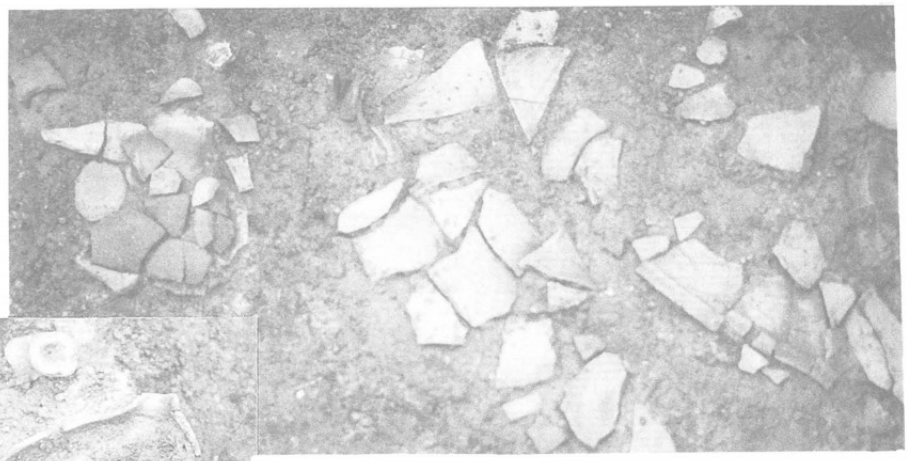
↑ 14　6号住床面の土器



←
15　同　アメリカ式石鏃の出土

↑ 16　同壷などの出土

→ 17
同　甕出土



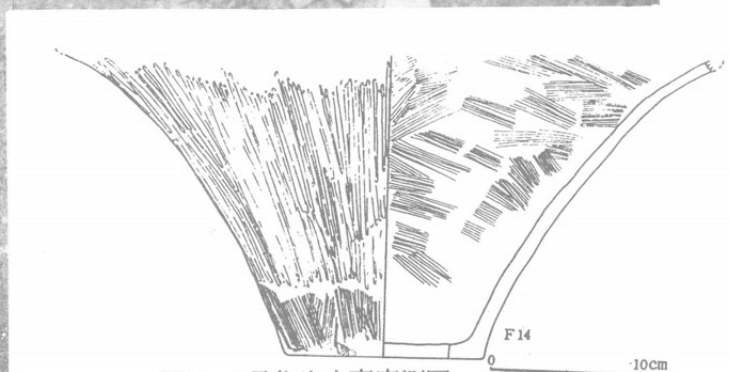


図19　6号住出土壷実測図

↑ 18　同
注口土器
の出土

↑ 19　西から見た6号住

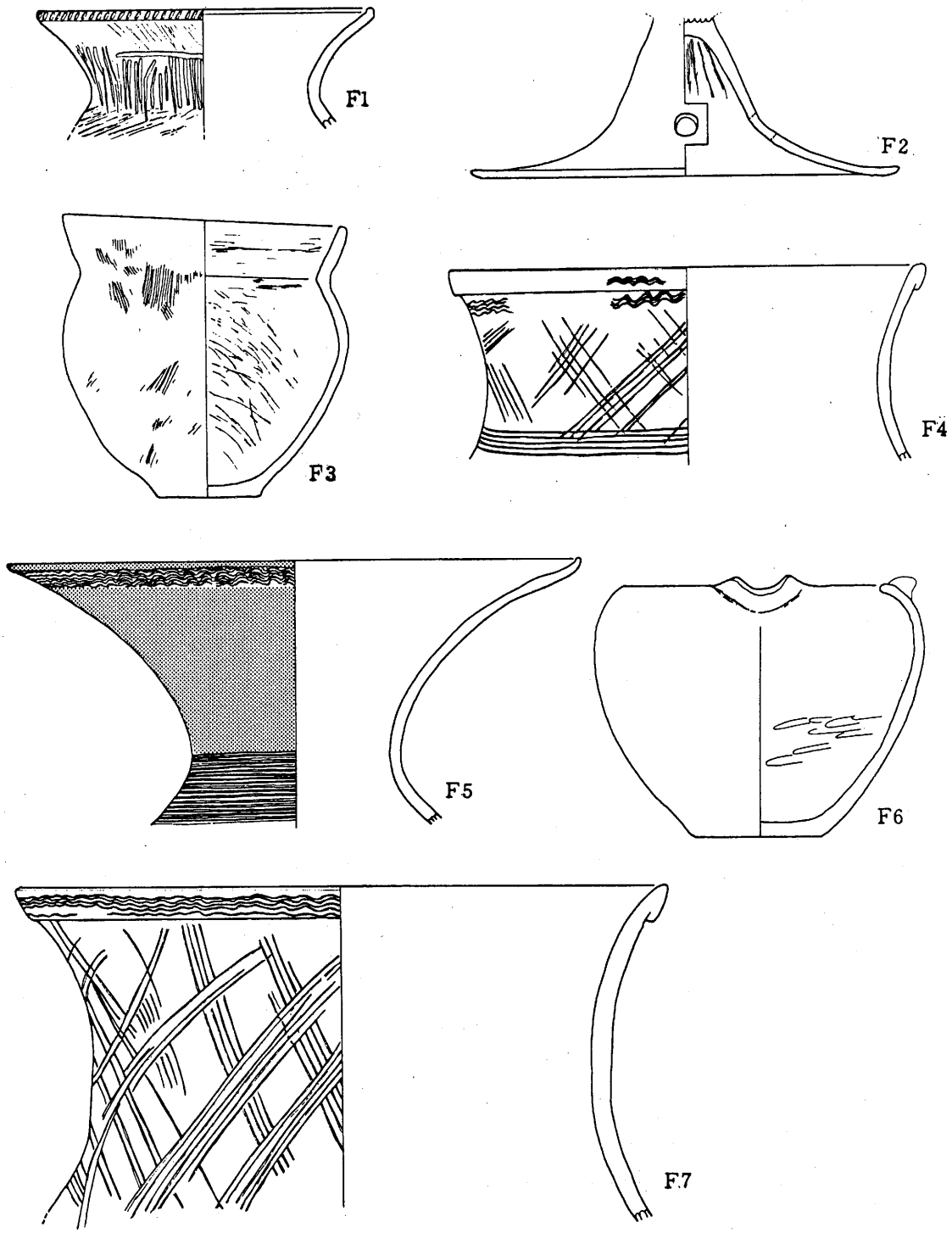


図20　6号住出土土器実測図(1)

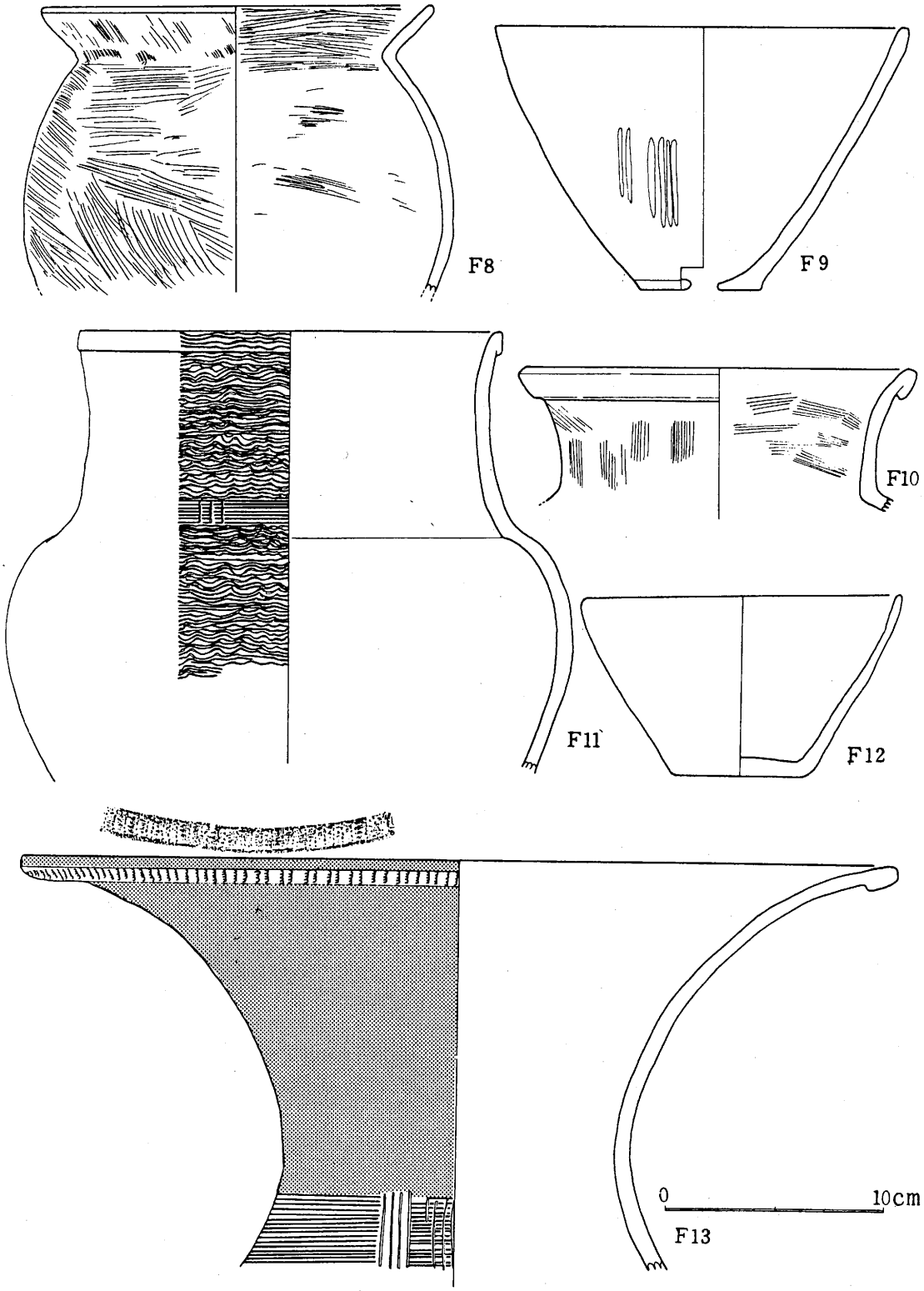


図21　6号住出土土器実測図(2)

10号住居址（箱清水式古）

10号住居址は、新設道路の起点にあって小字津島に通じる道のため、西方は調査できなかった。土器は破片のみで、呈示していない。中央の東西に溝跡がありその南に焼土部分があった。溝は土塁状遺構の北にあり、後に報告するように、住居址の後に作られたと考えられる。

↑ 20　西から見た10号住と中世の道、8・11号住、土取り跡、溝

↑ 21　東から見た10号住・手前は中世の道、西壁の断面に注目

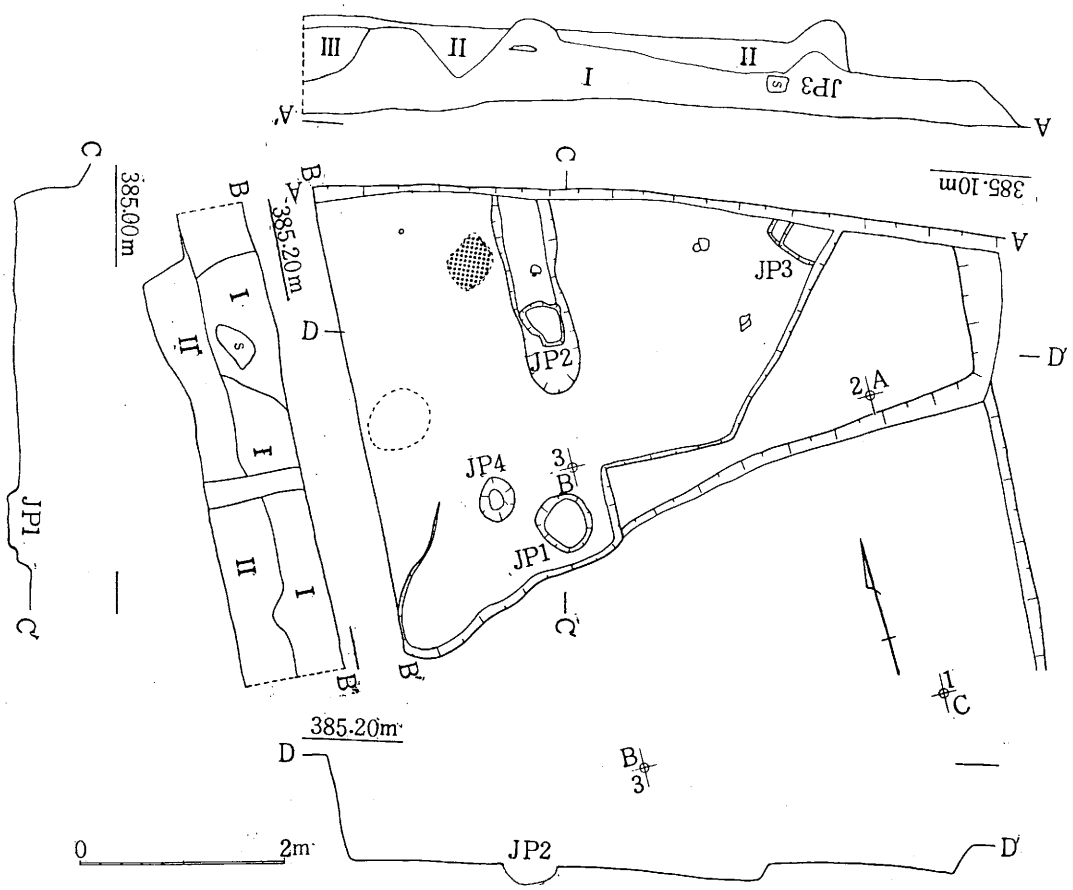


図22　10号住遺構実測図

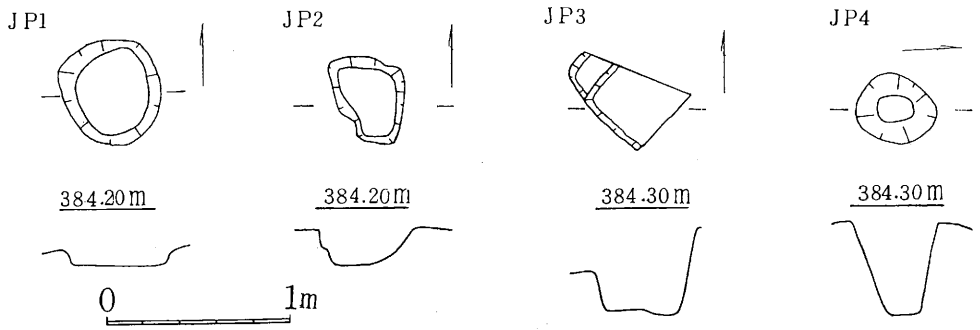


図23　10号住柱穴実測図

22号住居址（箱清水式古）

ＡＺ94～95に位置し、東部分が僅か未調査である。住居址の平面は隅丸方形で、一辺4.5*m*である。主柱穴のうち、ＶＰ2～9の間に、地床炉の焼け土があり、ＶＰ6～8の柱穴と4本組合わされると思われる。

この住居址の遺物のうち、中央部に白色粘土があったこれは、後に報告する4号住址の場合と同じで、近くでは、市内高丘地区にある粘土と同質である。現に1991年の同所の関越高速自動車道上信越線の県埋文センターの発掘調査でも古墳時代に属する粘土採掘坑が発見されている。

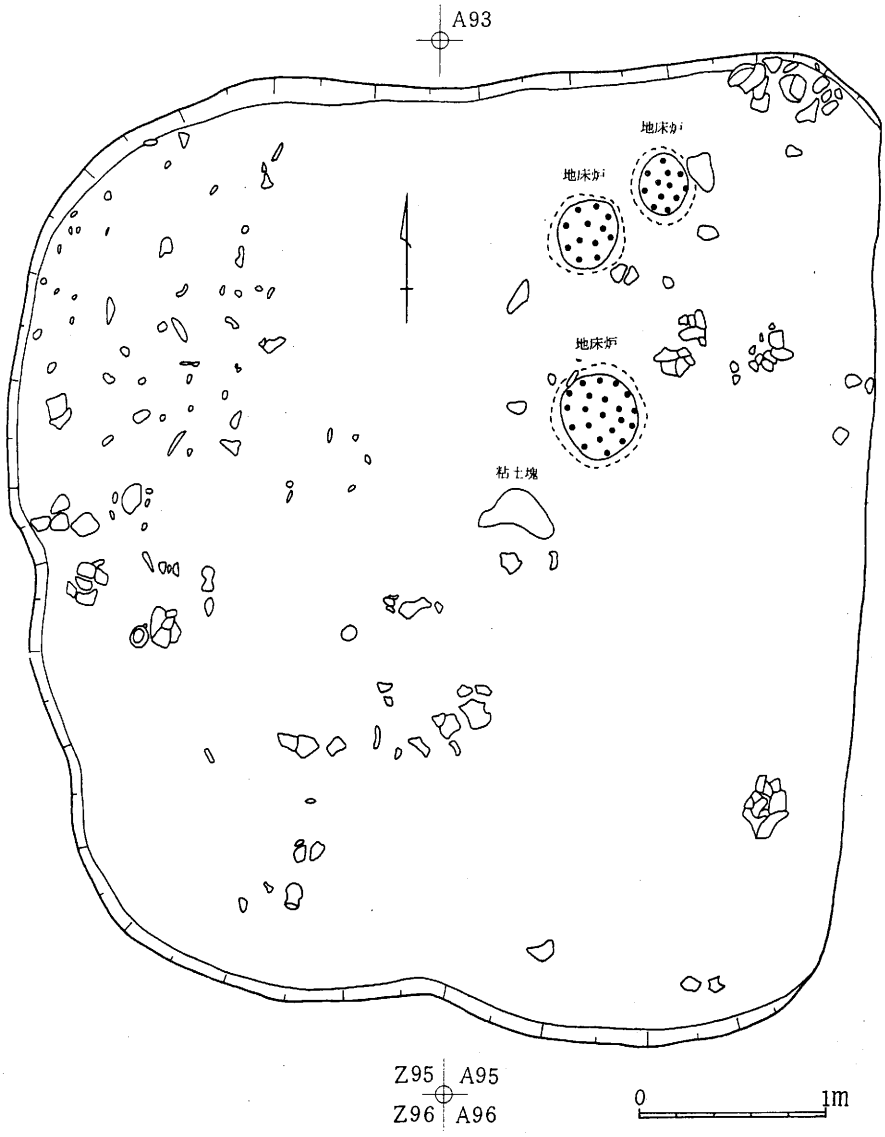
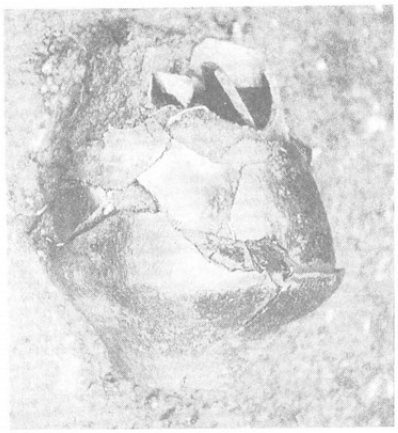


図24　22号住遺物検出図



↑ 22　22号住床面の壷

↑ 23　同　白色粘土と台付甕

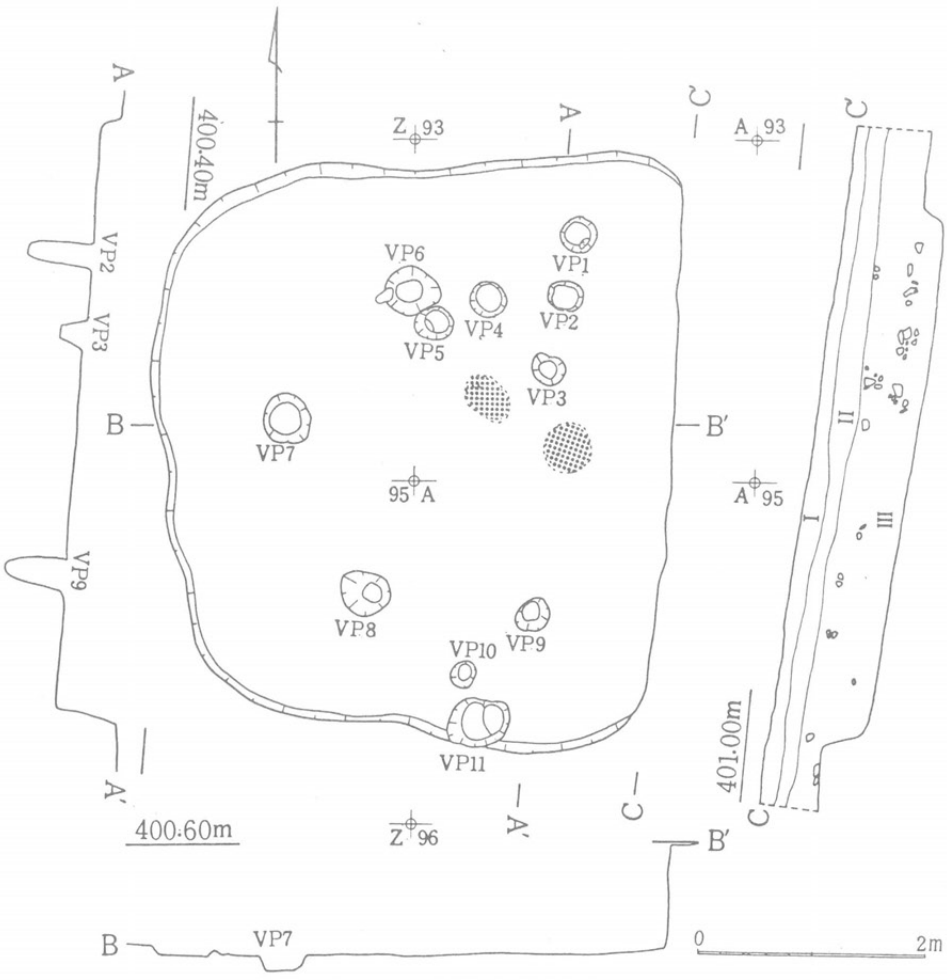


図25　22号住遺構実測図

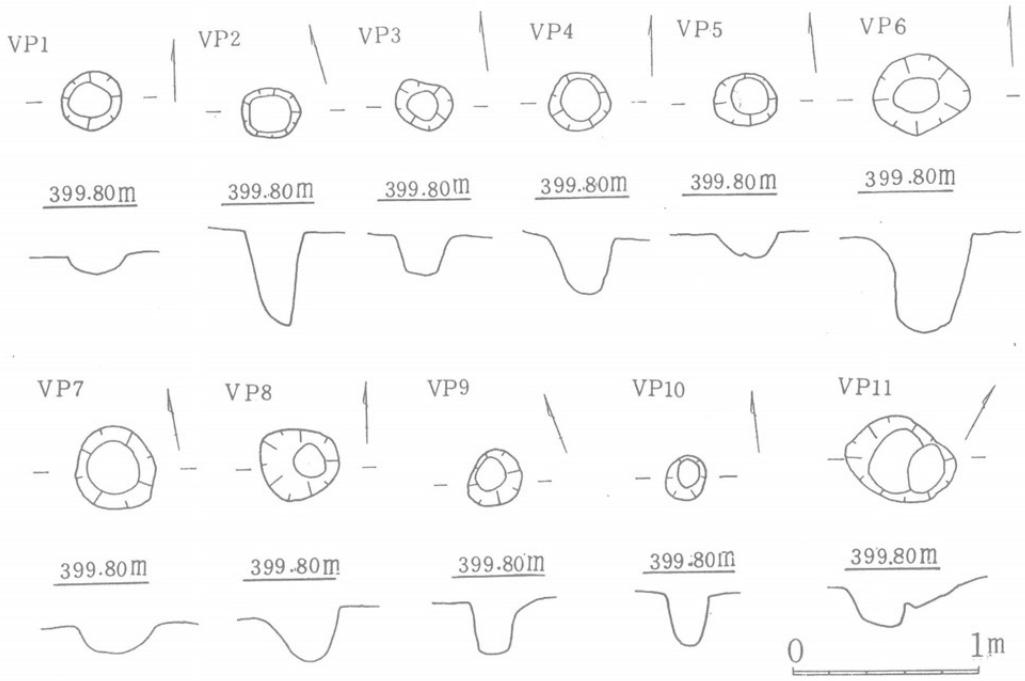


図26　22号住柱穴実測図

↑ 24　北から見た22号住の遺物

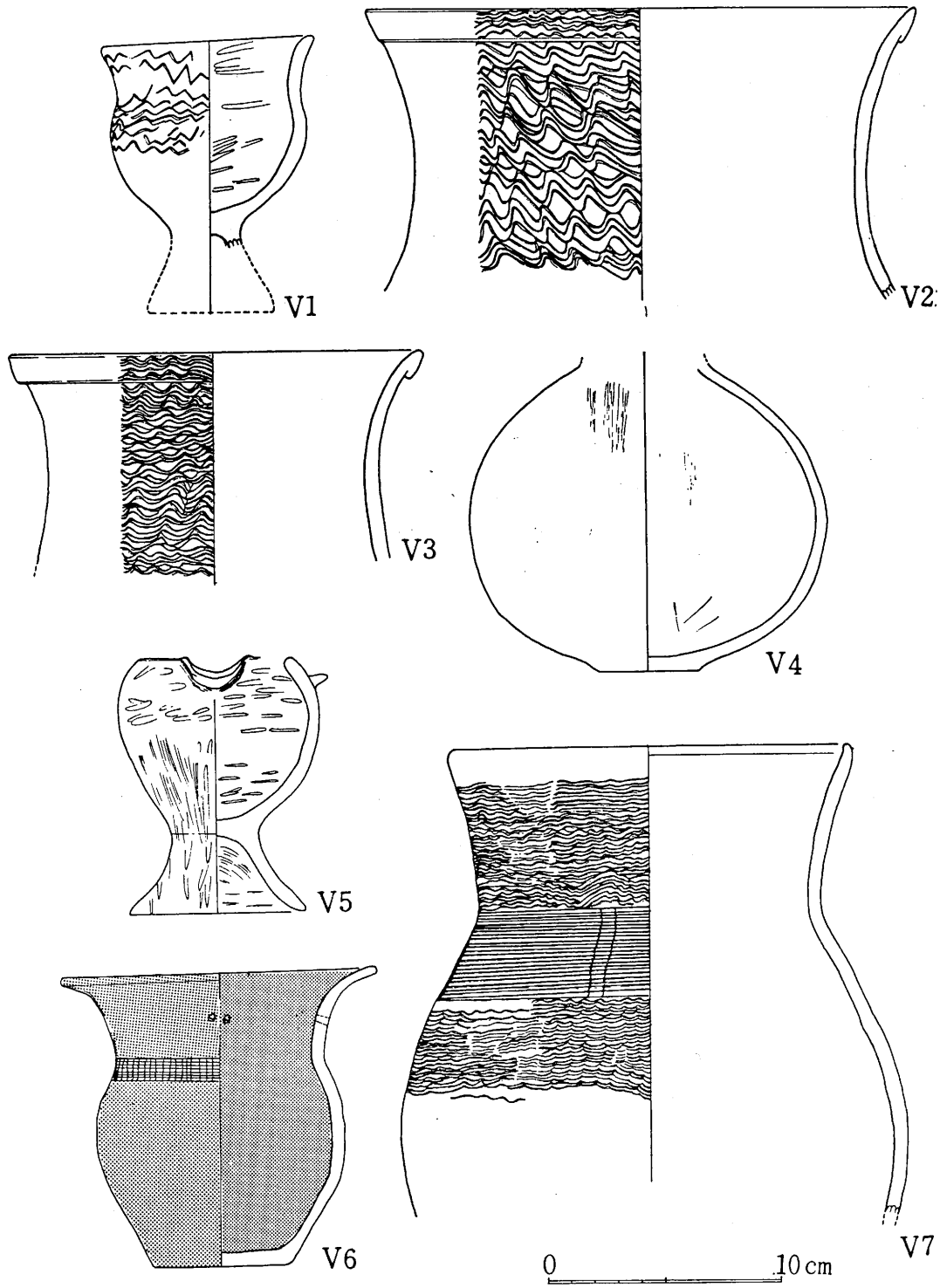
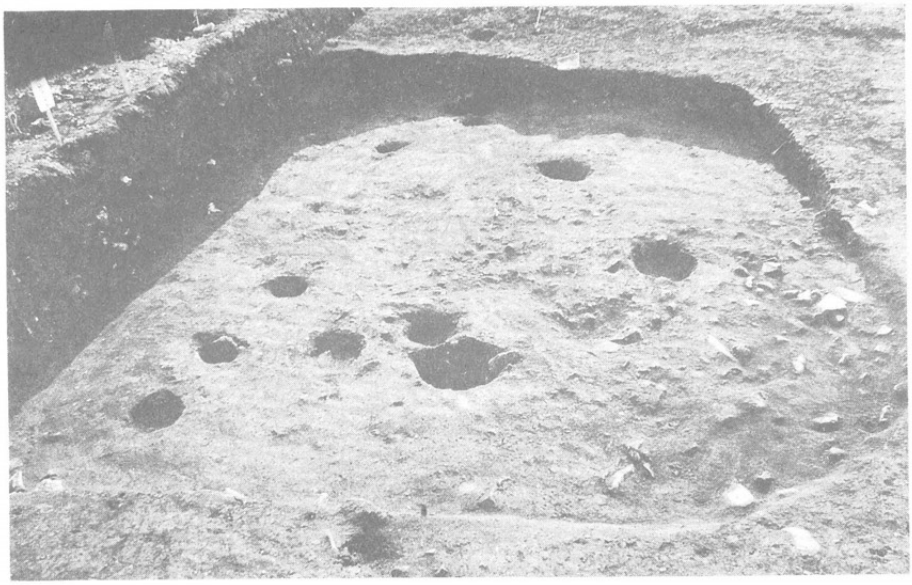


図27　22号住出土土器実測図(1)



↑ 25　北から見た22号住

このように粘土を採掘して遠くから運び同じムラの中で、土器の自給のシステムをとられていたと考えられる。

22号住の床面およびその上層から検出された土器は、壷（図26V8）・赤彩された広口壷（図25V6）・小形壷（同V4）・白色粘土の上にあった台付甕（同V1）・台付注口土器（同V5）・甕上半部（同V2・3・7）などで、壷V8の型式から箱清水式の古い段階の住居址とした。

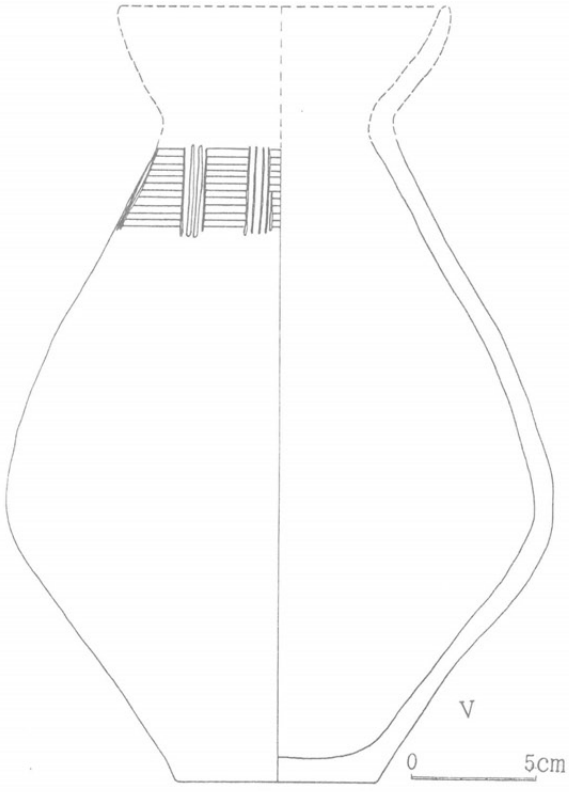


図28　22号住出土土器実測図(2)

1・4号住居址（箱清水式新）

1・4号住はＧＦ16～17の位置にあり、二つは複合している。1号住では、西側の一部、4号住は東側が未掘である。

土器の型式と発掘時の所見から4号住の埋没後、1号住が作られたと思われる。

4号住の東は現地表から床面まで、150cmを数え深く埋まっていた。両方とも隅丸方形で、4号住の方がやや、大きく、実測図では示されていないが一辺が約５ｍの住居址と思われ、１号住これよりは僅か小形である。

4号住では、西よりに焼け土と地床炉があり、ＤＰ10の柱穴が主柱穴の一つと思われる。1号住ではＡＰ1・4・ＤＰ5・11が主柱穴と思われる。

図示した14号住の土器は、折り返し口縁で、櫛描波状文と簾状文を施文した上に櫛描きで、格子目文のみられる小形甕（図31D1)、口縁に山形突起があり、赤彩された広口壷（同D2)と、大形壷の下半部（図32D3)などで、石器では、覆土中から頁

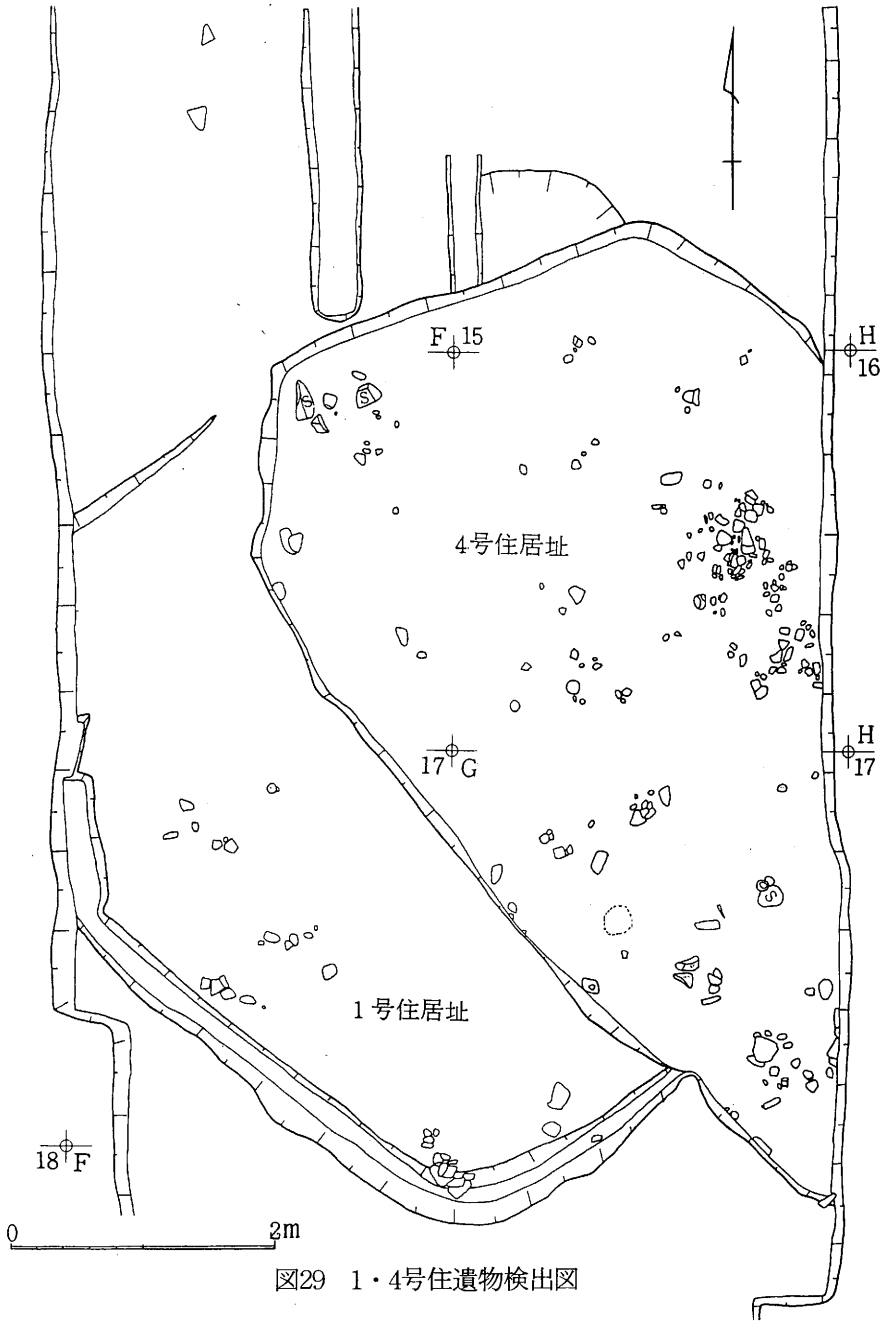


図29　1・4号住遺物検出図

岩製の石槍（図34D9）・小型磨石斧（同じD8）；石鏃（同D4～7）などである。

また、この住居址の床面に、やや黄色の粘土が、南よりにあった。

1号住の図示した土器は、赤彩され櫛描横線文、縦線文が肩部に施文された壷の上半部(図33 A2)、内部の底に成型痕の顕著な壷下半部（同A1）や口縁に屈折のある壷などで、箱清水式の末葉段階から古墳時代初頭の土器と推定される。

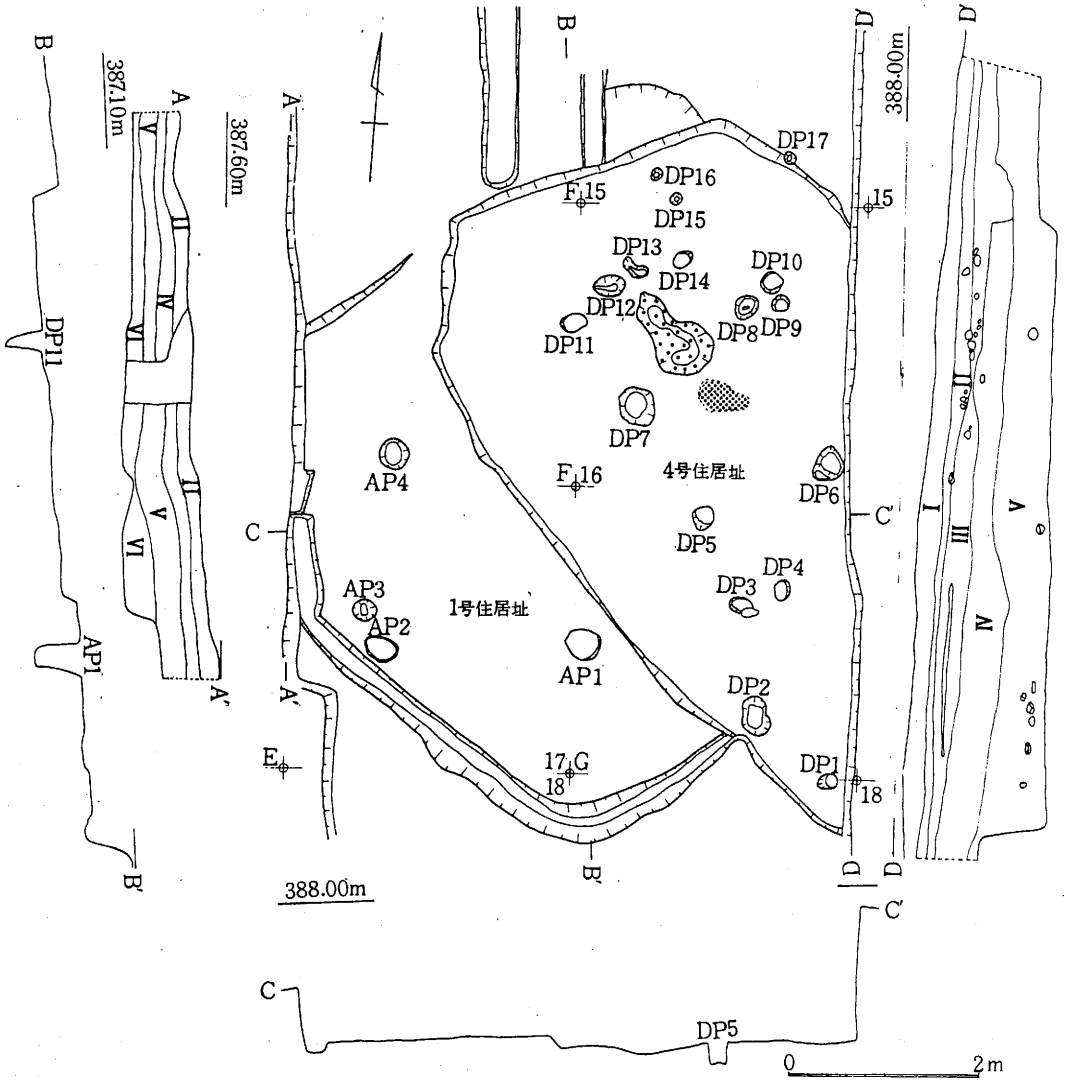


図30　1・4号住遺構実測図

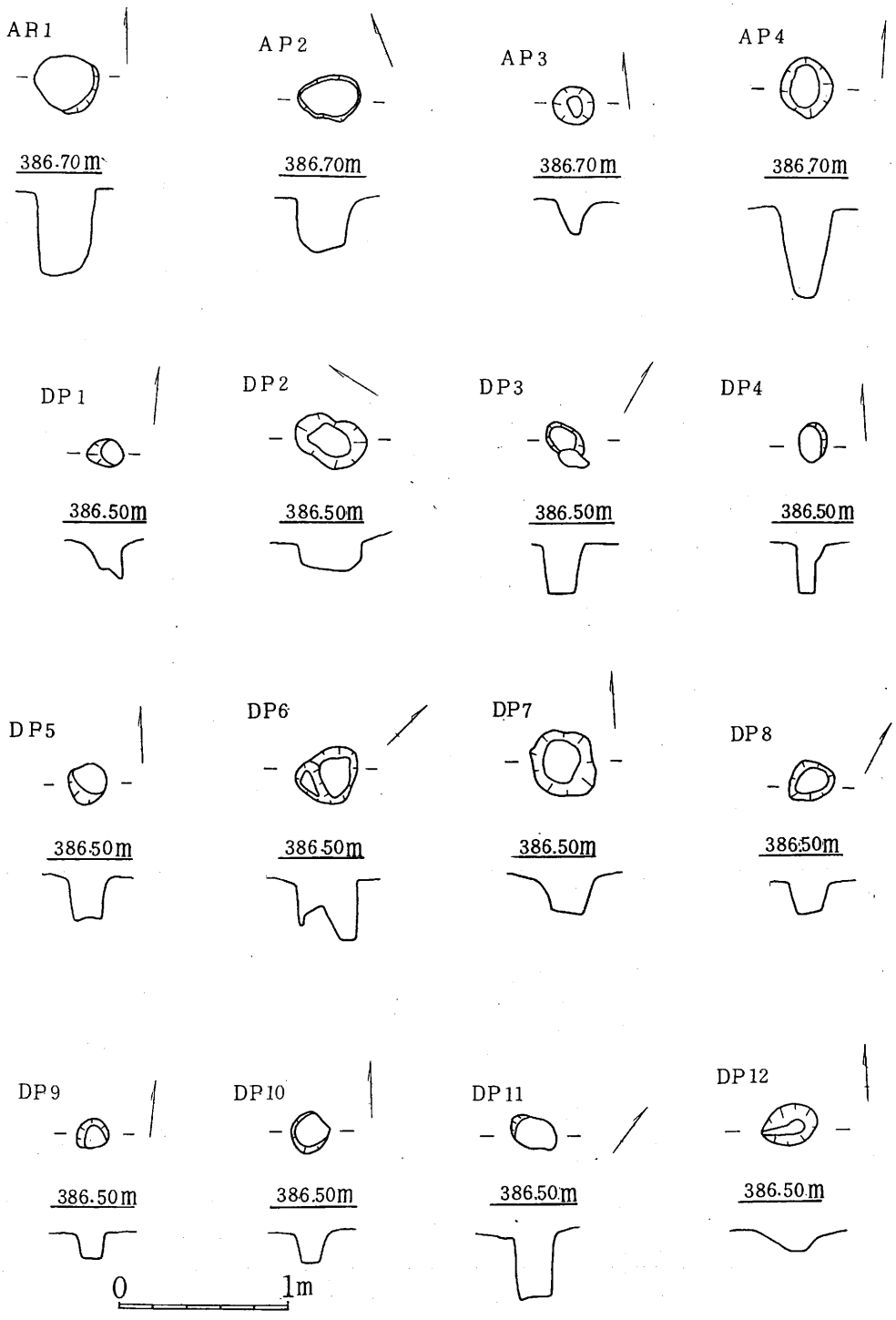


図31　1・4号柱穴実測図(1)

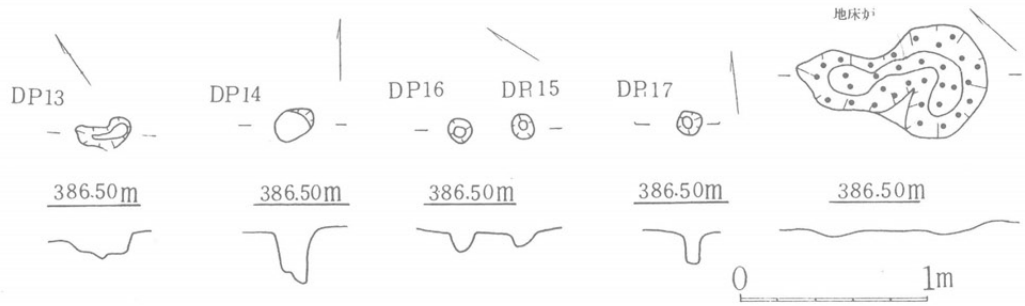


図32　1・4号住柱穴実測図(2)地床炉実測図

← 26　北から見た1・4号住

→ 27　北から見た1・4号住り遺物

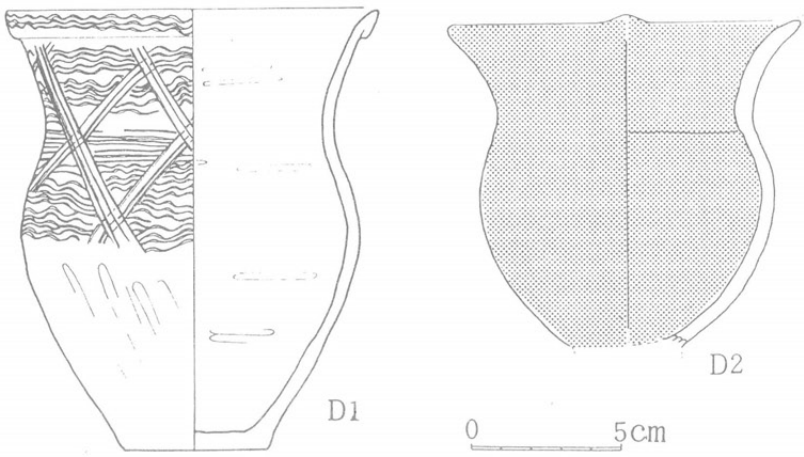


図33　4号住出土土器実測図(1)

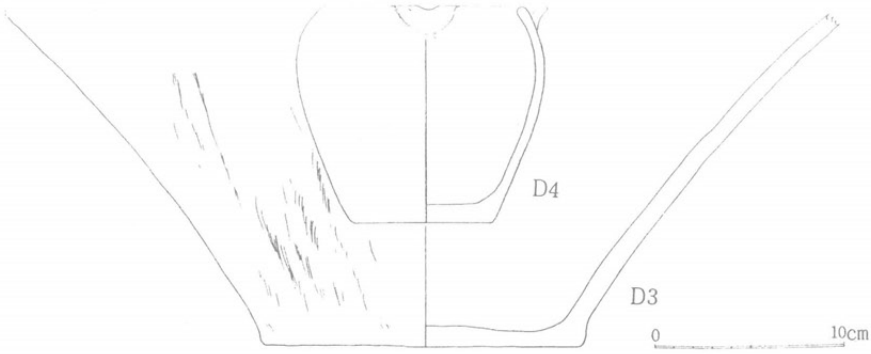
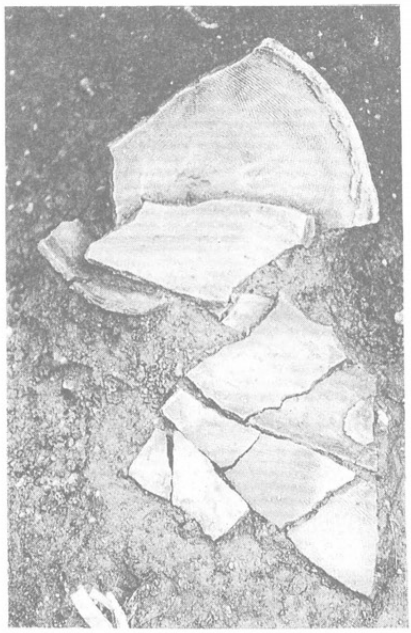


図34　4号住出土土器実測図(2)



↑ 29　1号住出土の壷A1

↑ 28　北から見た4号住の地床炉

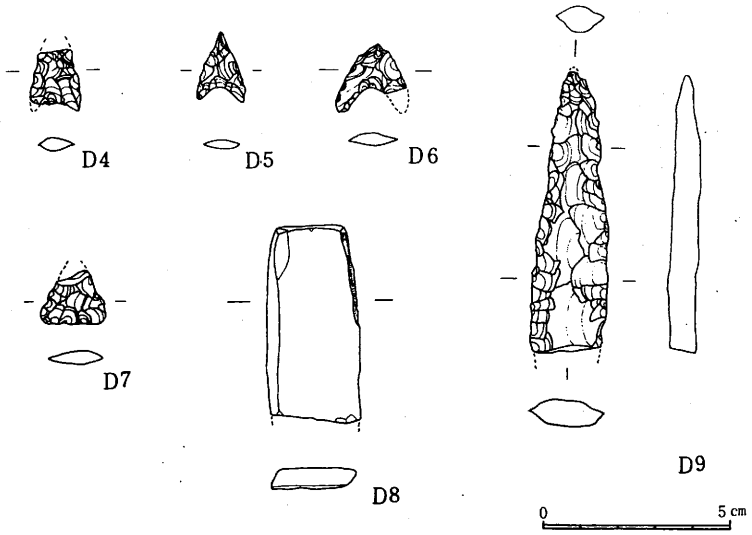


図35　4号住覆土出土石器実測図

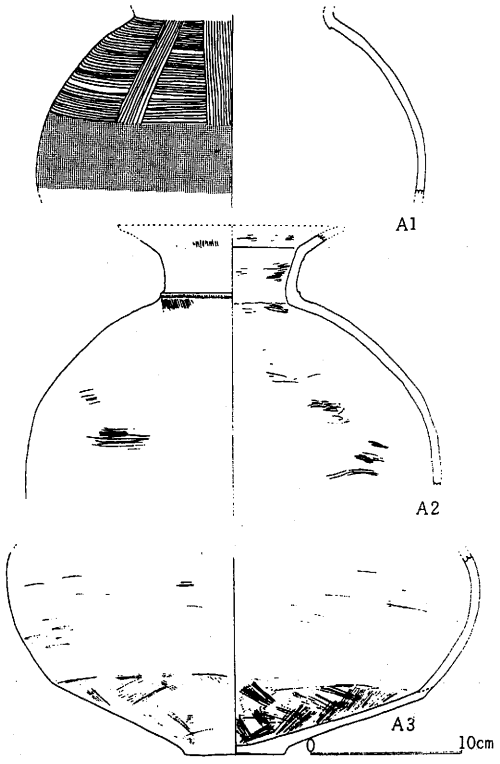


図36　1号住出土土器実測図

2・3号住居址（箱清水式新）

F19・20に位置し、2号住を3号住が切っている。2号住は北西の部分、3号住は西側部分が未調査である。2号住は一辺4mの方形の住居址で、南面にBP1・BP2の柱穴があり、南壁近くに凹石（図37）があり、規模・形態から縄文住居址ではないかと疑問をもって、調査したが床面から検出された土器は、箱清水式に属するものであった。

3号住は2号住の床面から30cmの段差で、北側にあり、隅丸方形で、一辺4m強の規模の住居址である。

南側壁近くに小型甕形土器があり、その他は破片ばかりであった。

2号住の所は耕土が浅く35cm位で、東側に中世の道と溝があったが、道の部分は壊されていた。

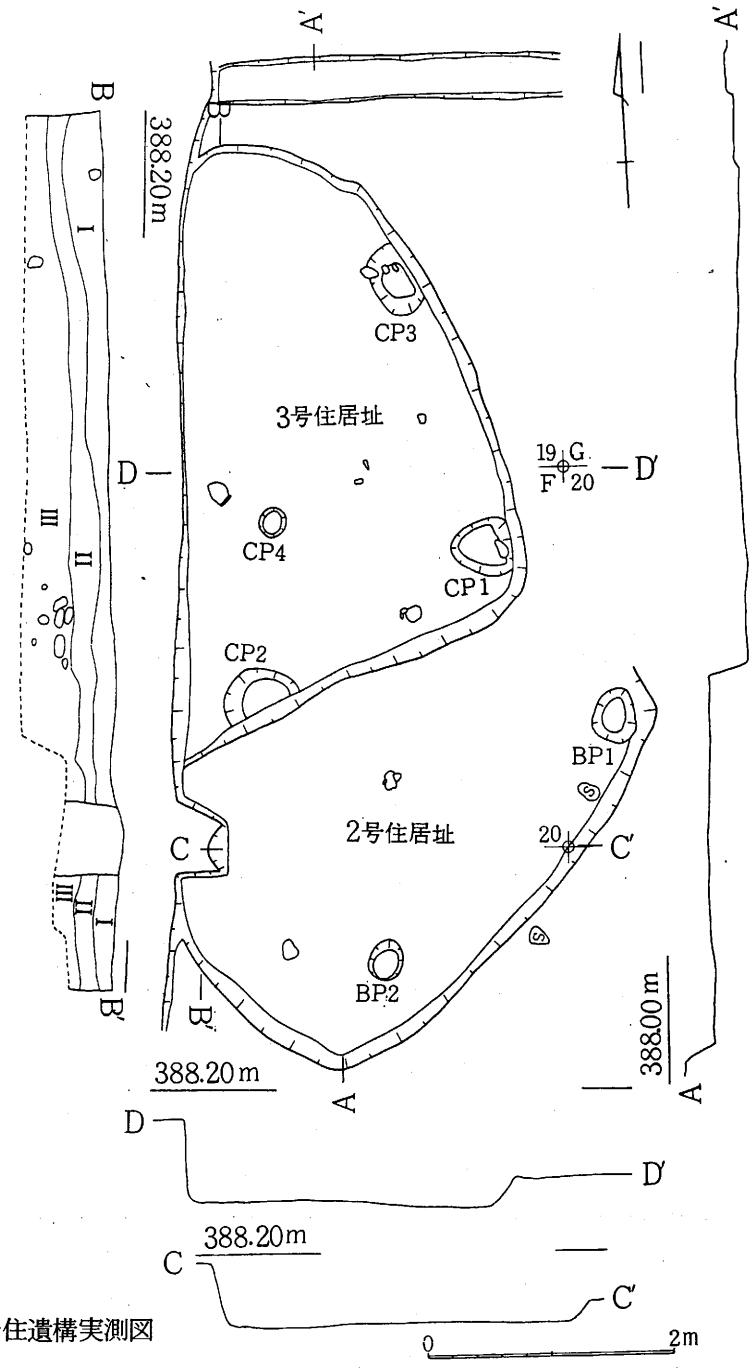


図37　2・3号住遺構実測図

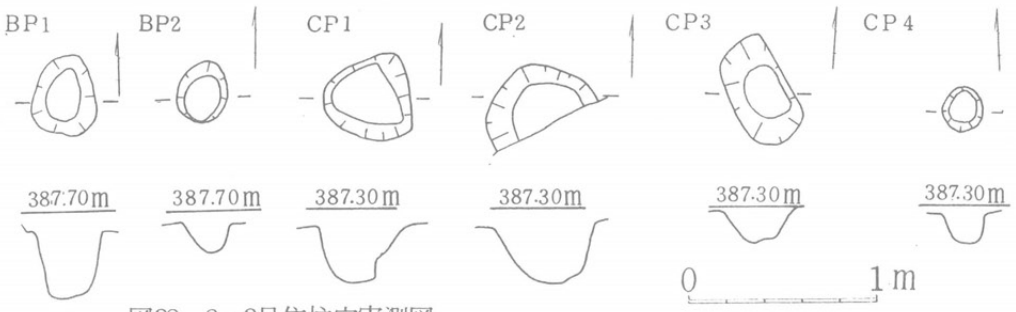
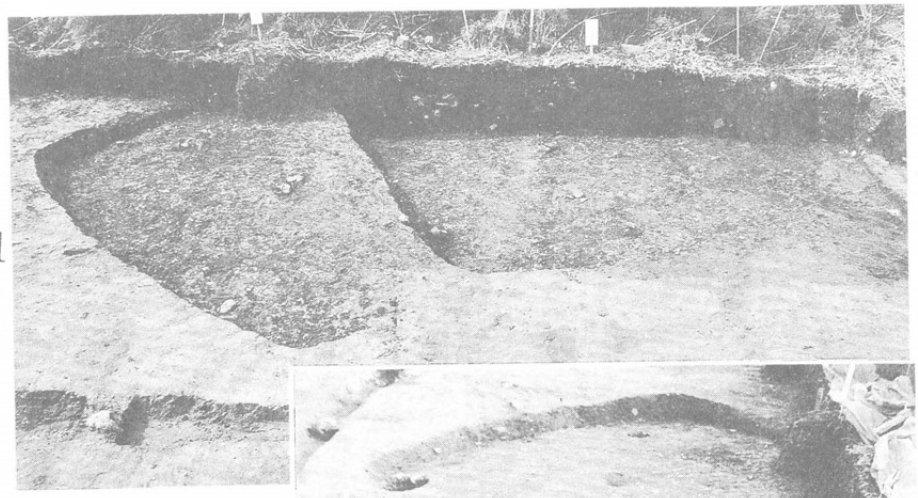


図38　2・3号住柱穴実測図

図39
3号住床面出土
石鏃実測図



30　東から見た2・3号住 ↑
→ 31　北から　同

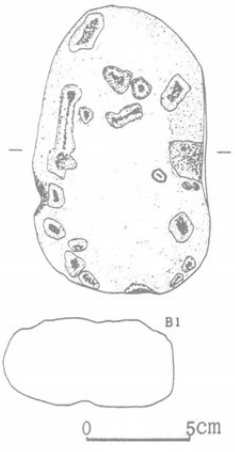


図40　2号住出土凹石実測図

8・11号住居址（箱清水式新）

ＤＦ１・2の位置にあって、北側部分は未調査である。また、11号住は一部分の検出であって、床面は8号住より30*cm*近く低いが詳細は不明である。

西側には黄色土を採集された坑があり、畑から拾い集められたと思われる石礫が埋められていた。

上層からは諸磯Ｃ式平行の口縁に貝殻状貼付のある土器（図4）や、図42のＨ1の土器を除いた土器が検出された。

床面の南西に小形甕、小形台付甕（写真38）があり、高坏・甑・壷破片などが検出された。

↑ 32　北から見た8号住の遺物

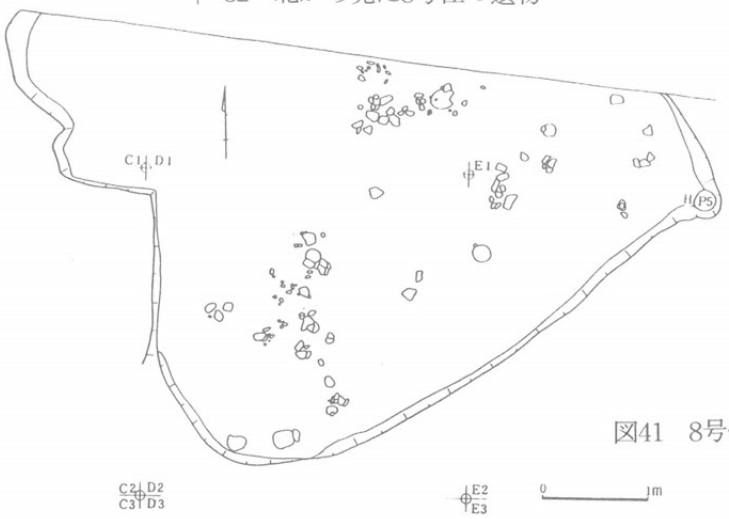


図41　8号住遺物検出図

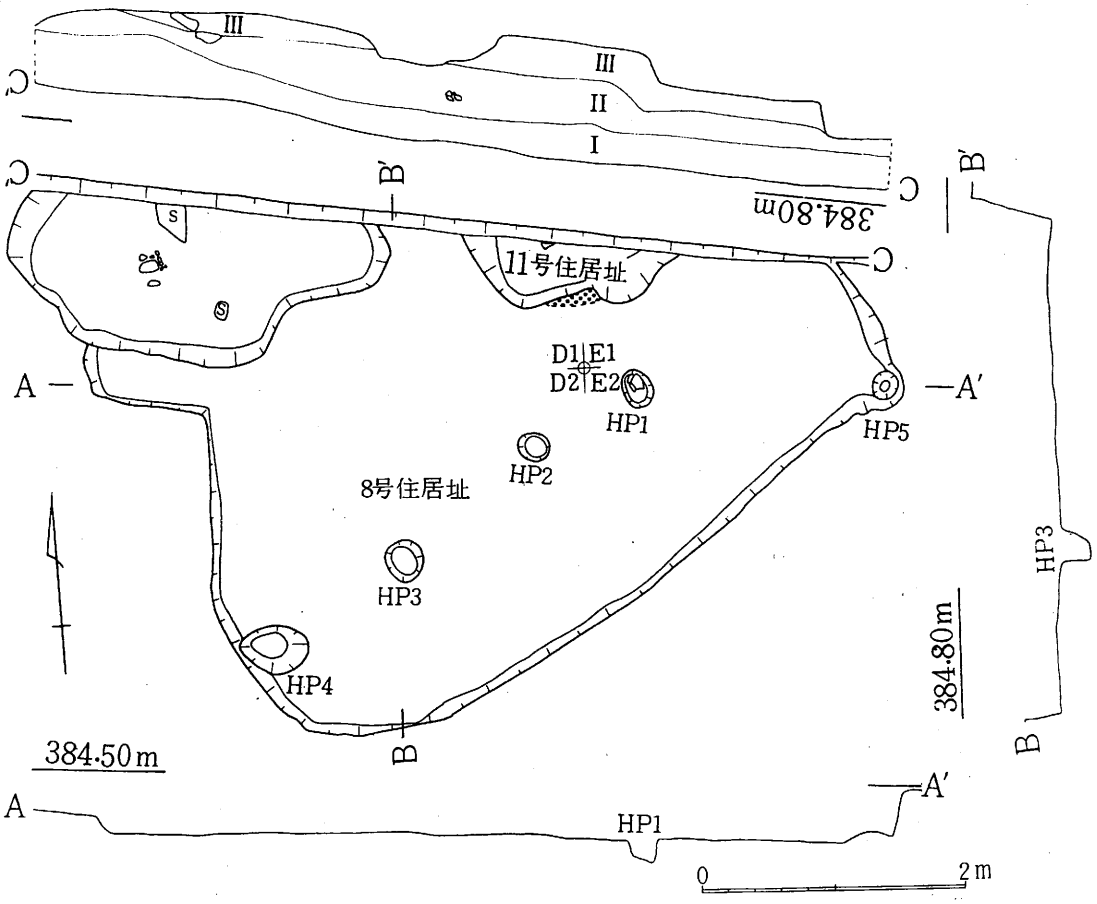


図42　8・11号住遺構実測図

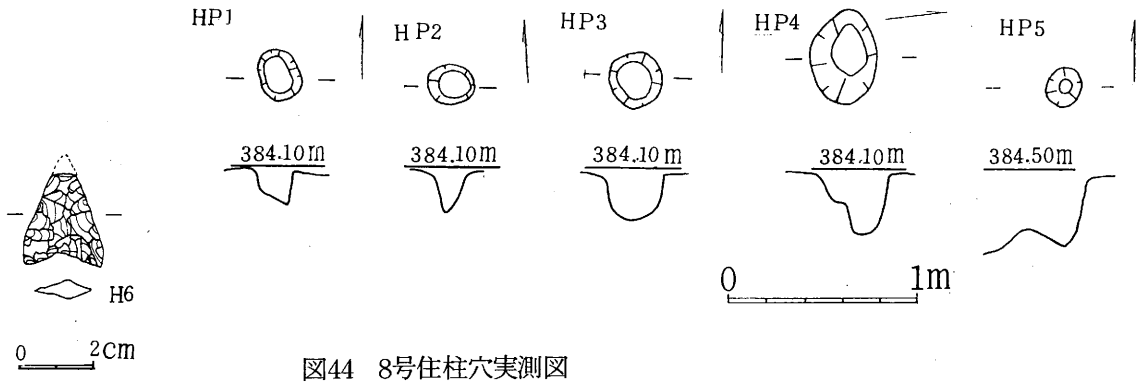


図44　8号住柱穴実測図

図43　石鏃実測図

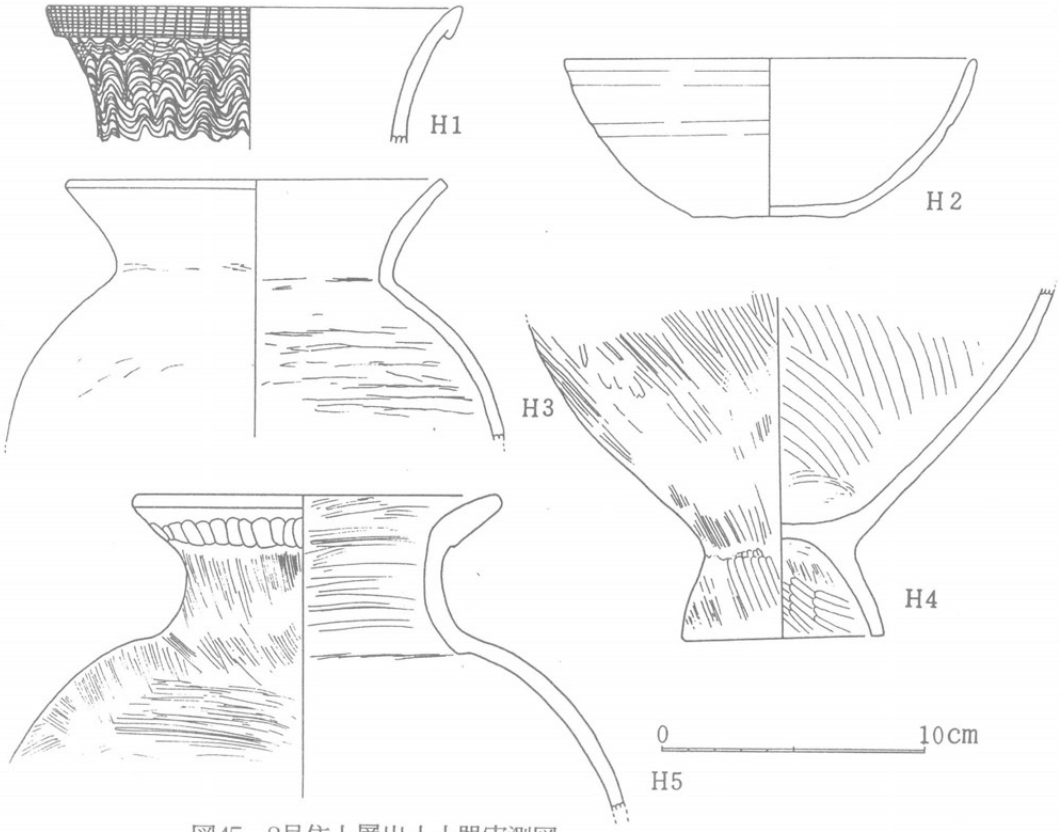
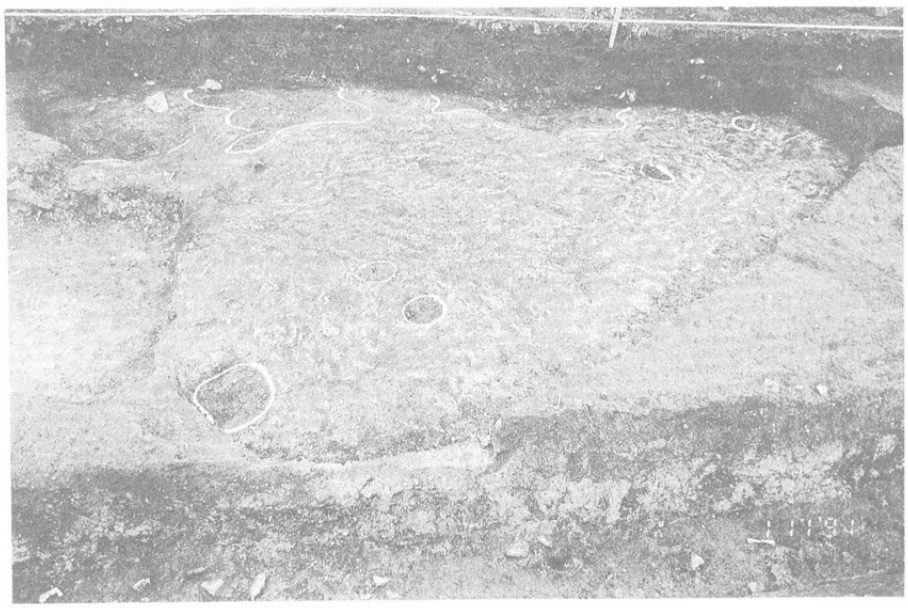
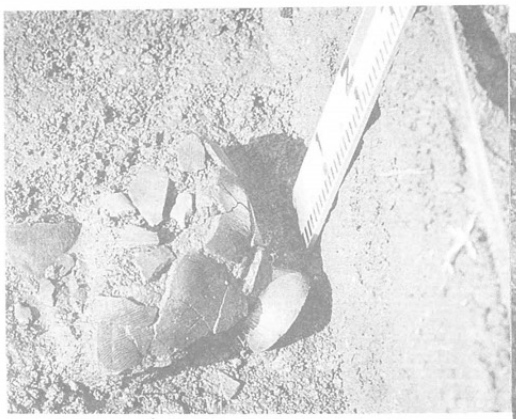


図45　8号住上層出土土器実測図



↑ 33　南から見た8号住

↓35　同　壷と高坏



↑ 34　8号住上層の台付甕

↑ 36　8号住の確認

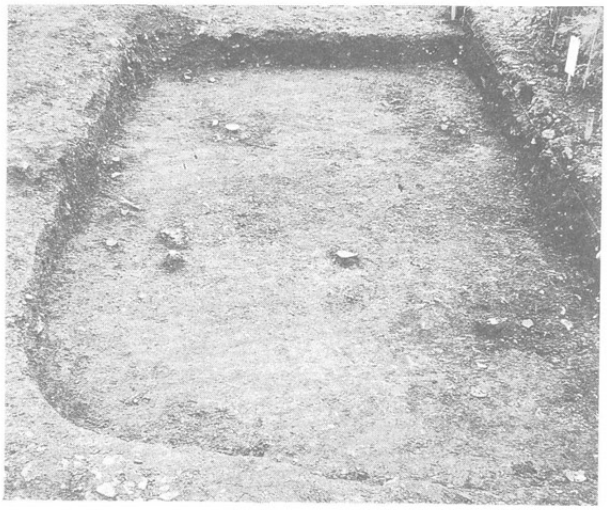
↑ 37　同上層の諸磯式土器

↑ 38　同床面の甕と台付甕

12号住居址（箱清水式）

E66・67の位置にあって、西側の半分は未調査である。東側上層に中世の道が通っていた。

隅丸方形のプランで、一辺は5mで、柱穴はＬＰ2・ＬＰ5が東の主柱穴と思われる。ここの土器の出土は少なく図示は、赤彩の高坏（図46）一点のみで、構築された時期の決定に不安を残している。



↑ 39　北から見た12号住の遺物

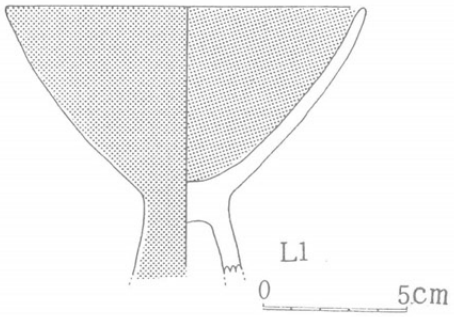


図46　12号住出土土器実測図

↑ 40　北から見た12号住

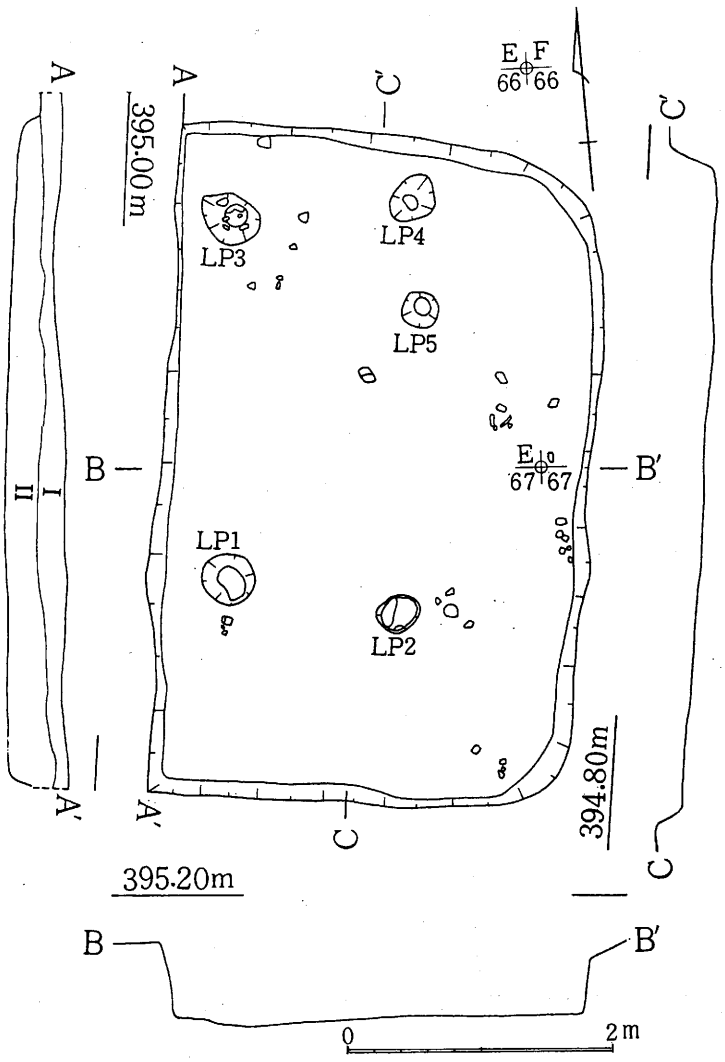


図47　12号住遺構実測図

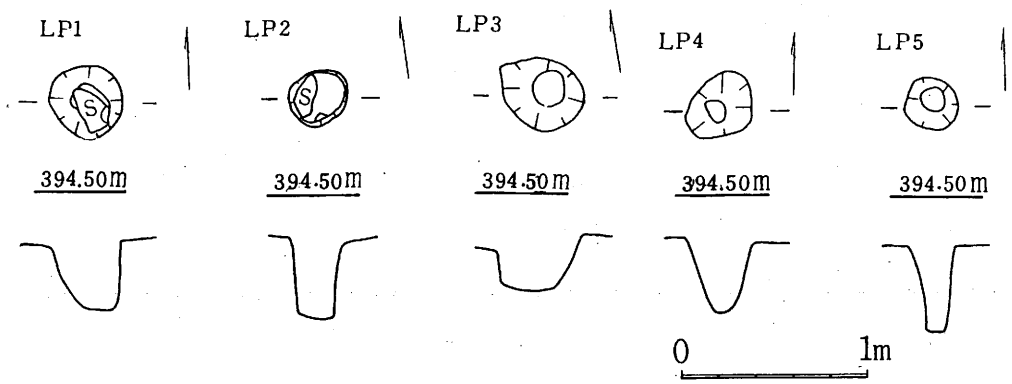


図48　12号住柱穴実測図

18号住居址（箱清水式新）

ＧＦ47・48の位置にあって、ここの北側の作場道の交差点の下に、畑から出たと思われる石礫が大量に埋まっていた。

住居址の南北中央断面で、地表から床面まで80*cm*の深さで、ここにもかなり大きな石が埋まっていた。プランは6×5*m*の隅丸方形の住居址である。主柱穴はＲＰ1・2・3・4と考えられ、西側の一部を除いて完掘した。

図49のＲ1・2の器台は上層覆土の出土で、他の土器は床面から検出されたものである。

南西隅に土器が集中しており、大型壷・小形壷2・高坏坏部などがあり、壷の胴部は内部が黒く煤けていた。

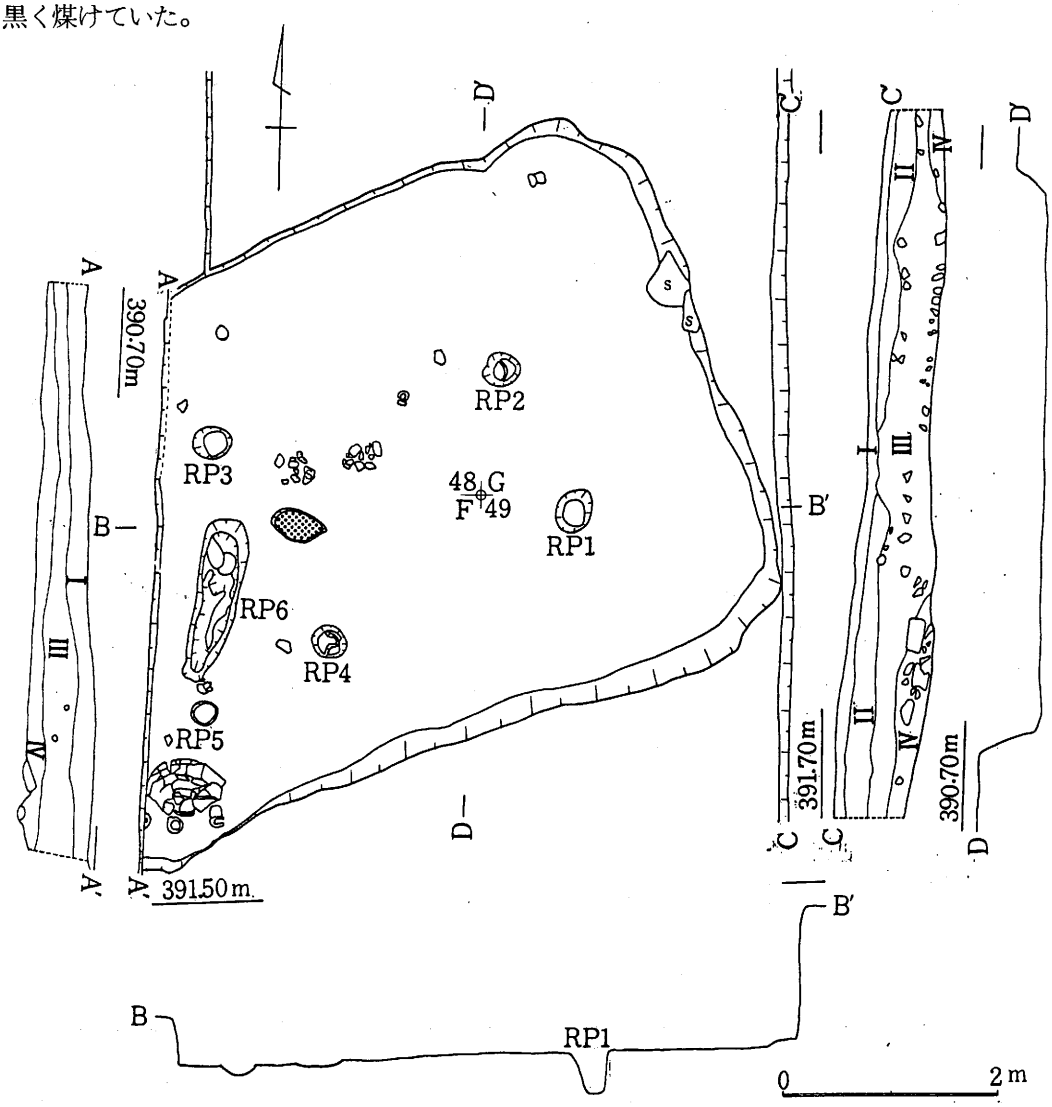


図49　18号住遺構実測図

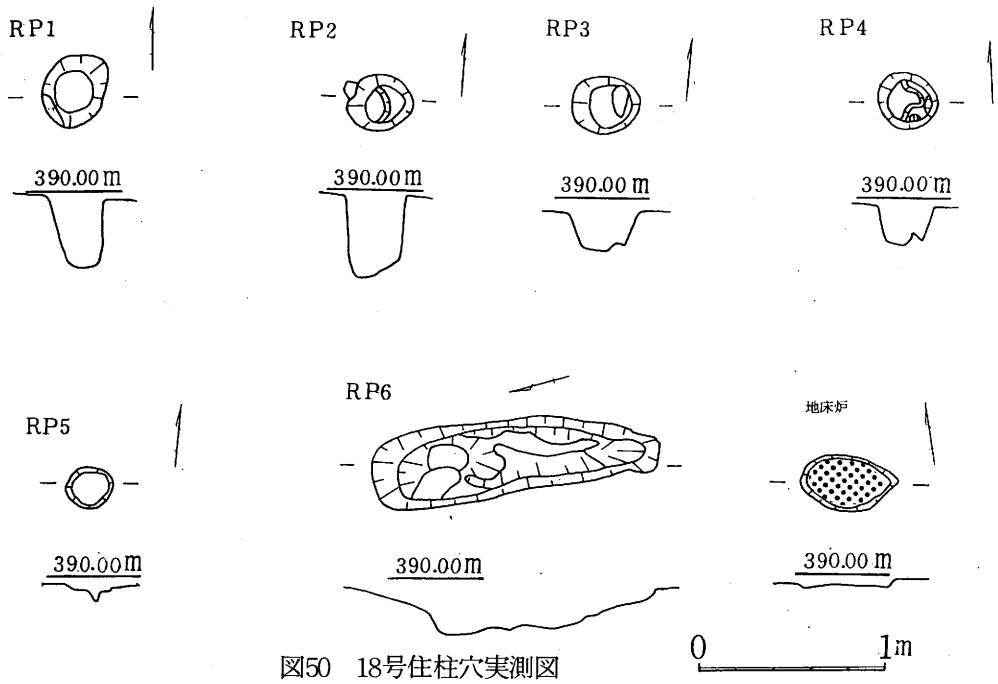


図50　18号住柱穴実測図

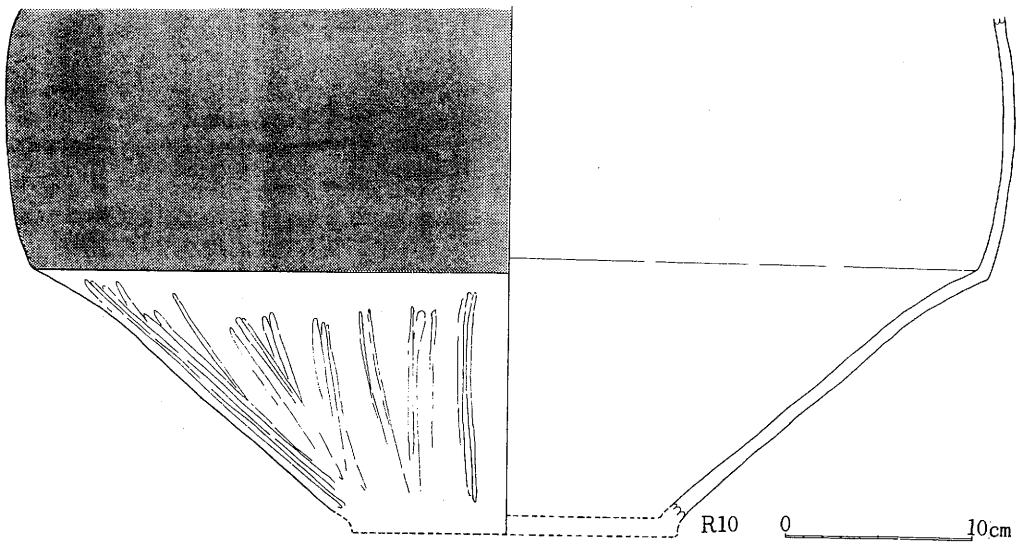


図51　12号住出土土器実測図(1)

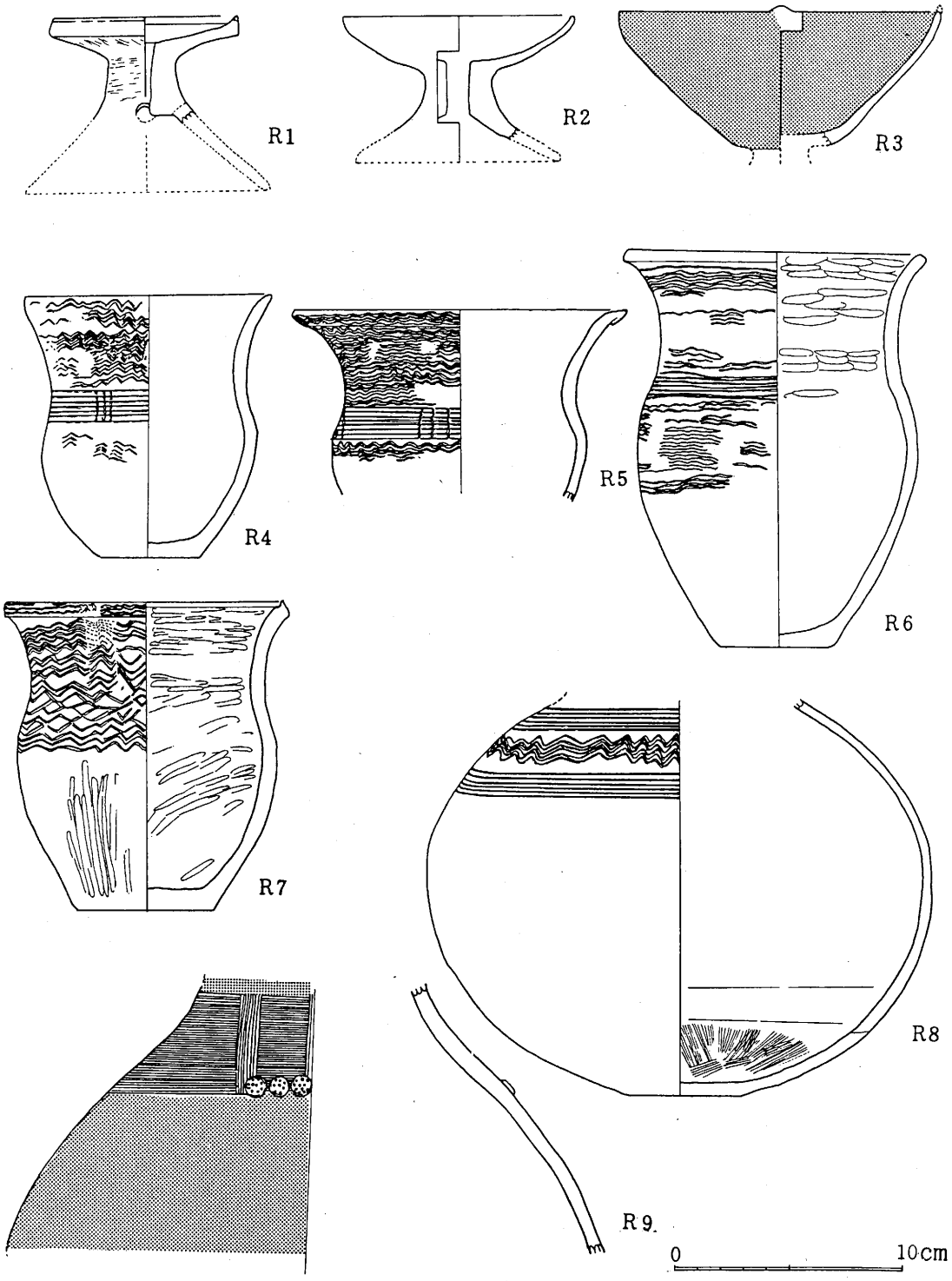


図52　12号住出土土器実測図(2)

↑ 41　東から見た18号住

→ 42　南西隅の出土土器

↓ 43　北から見た18号住

19号住居址（箱清水式新）

19号住は、ＣＤＥ78・79・80の位置にあって、ほぼ完掘できた。ここは西に傾斜しているが、東側は住居址の床面まで、約1ｍの覆土がある。

隅丸方形のプランで、5.5×4.8ｍを計測し、南の角を傾斜の上面においている。南より中央に炭化材がみられたので、焼失家屋と思われる。

東側壁に壷破片、その西に大形高坏があり、その他の土器が8個体以上床面にあった。

主柱穴はＳＰ1～4で、中心部によって位置している。ＳＰ6・9～14は個柱の柱穴と考えられる。

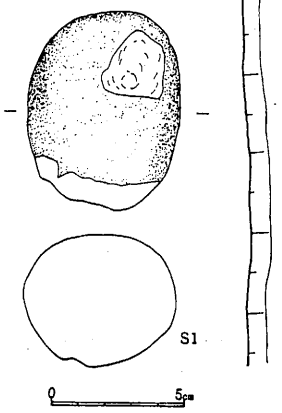


図53　19号住出土鼓打石器実測図

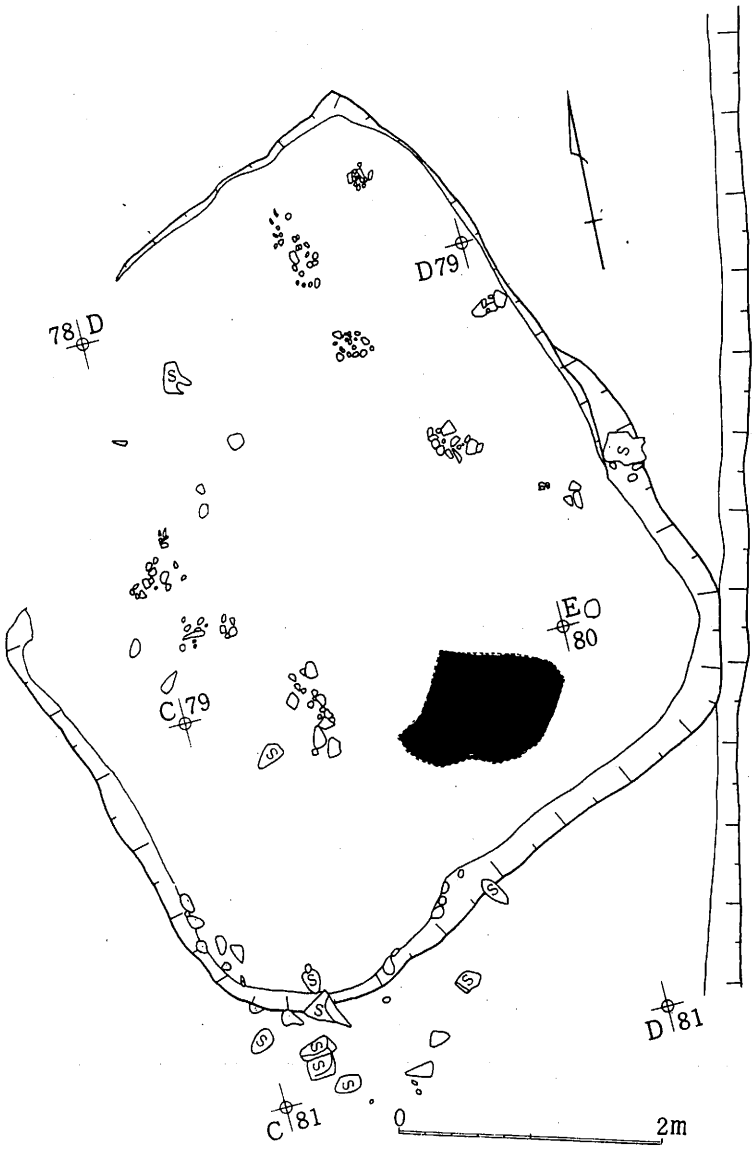
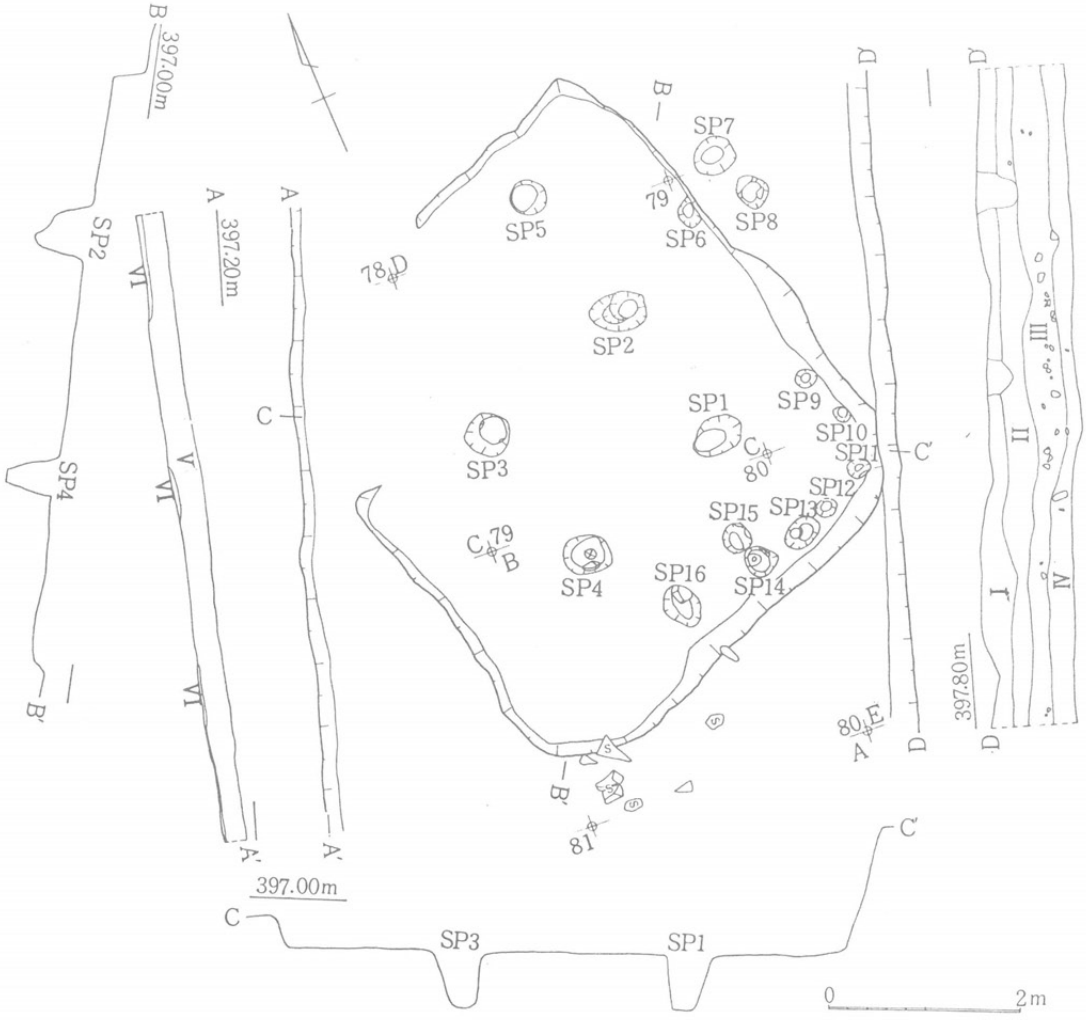


図54　19号住遺物検出図

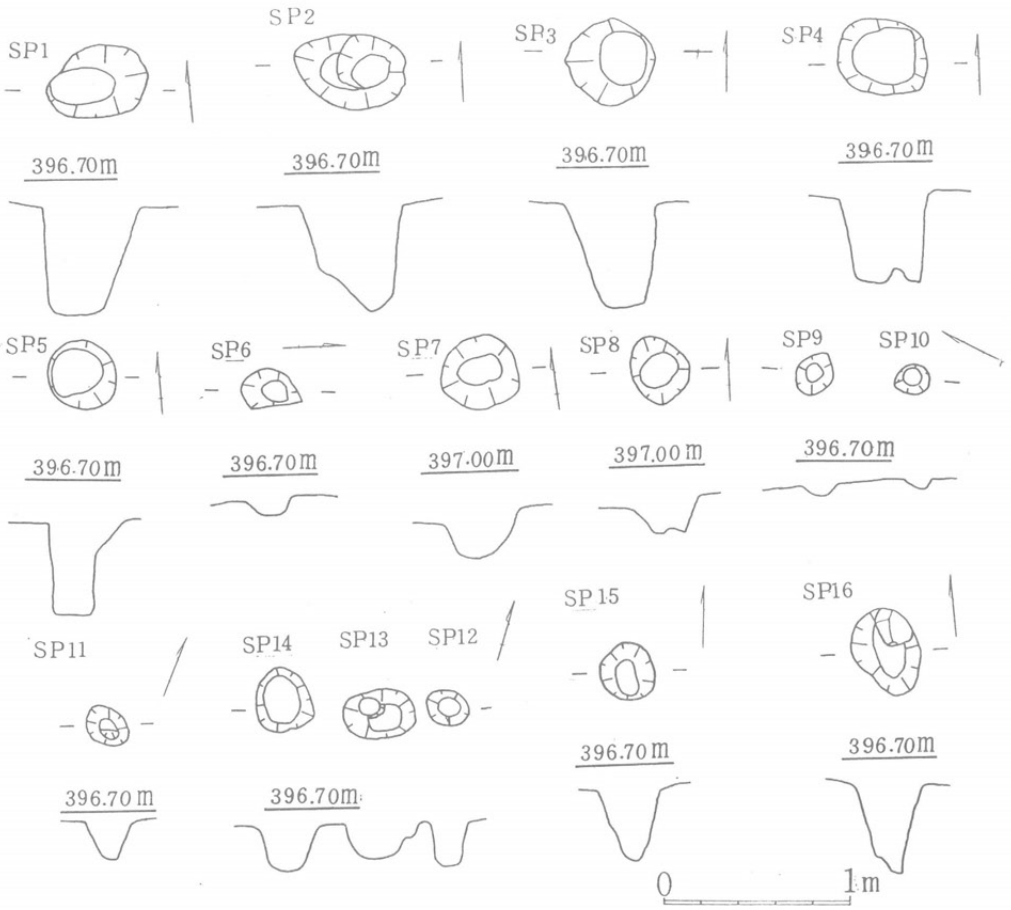
→ 44　19号住の高坏出土

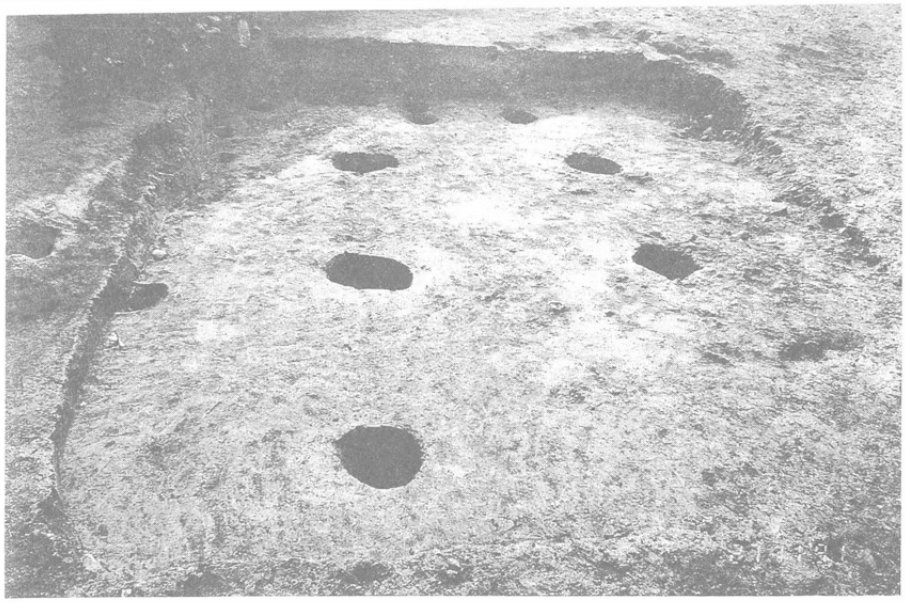
↓ 図55　19号住遺構
実測図



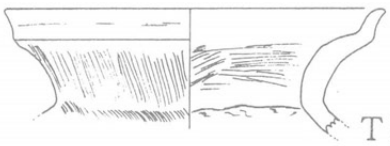
→ 45　北から見た19号住の遺物

↓ 図56　19号住柱穴実測図

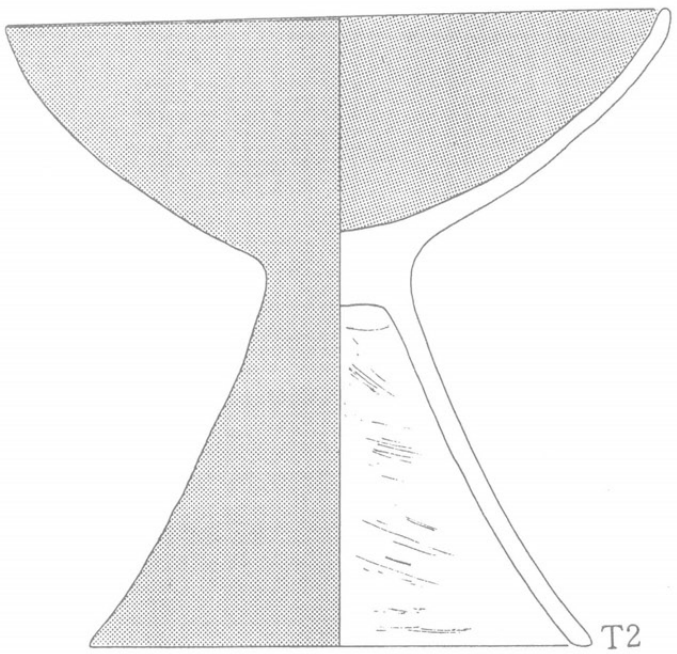




↑ 46　北から見た19号住



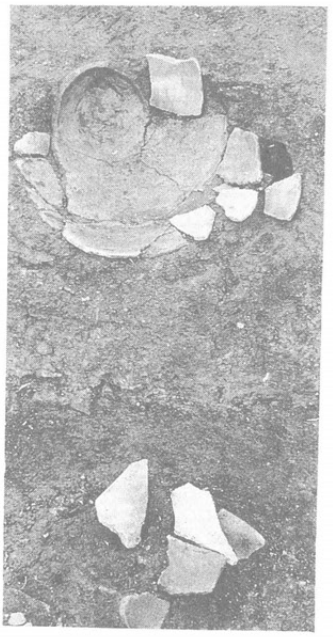
T1



T2

図57　19号住遺物実測図

0　10cm



↑ 47　19号住東壁の
壷出土

図58のT1は上層出土

21号住居址（箱清水式）

21号住はDC85・86の位置にあって、プランは方形に近く、一辺4,5mの規模を有する。20号住の南に位置し、1.5mしか離れていない。

住居址の約半分を検出し、東側に未調査部分を残している。床面上に箱清水式の壷や、高坏(図59U2) などが見られた。

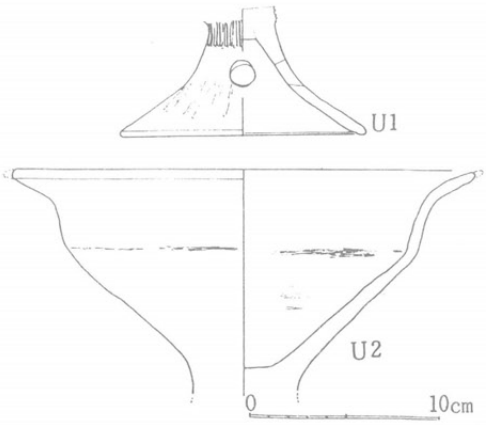
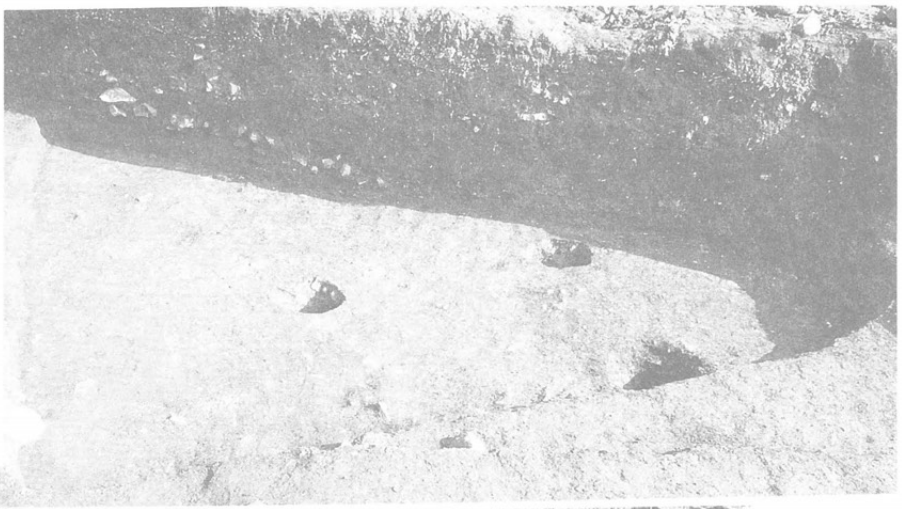


図58　21号出土土器実測図

→ 48
西から
見た21
号住の
遺物



← 49
西から見た
21号住

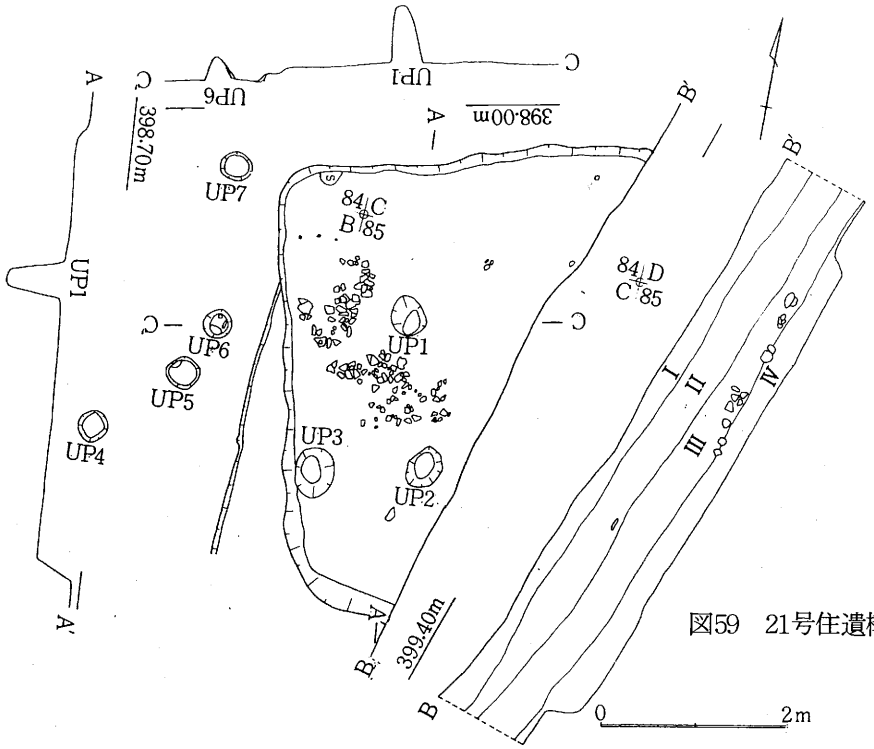


図59　21号住遺構実測図

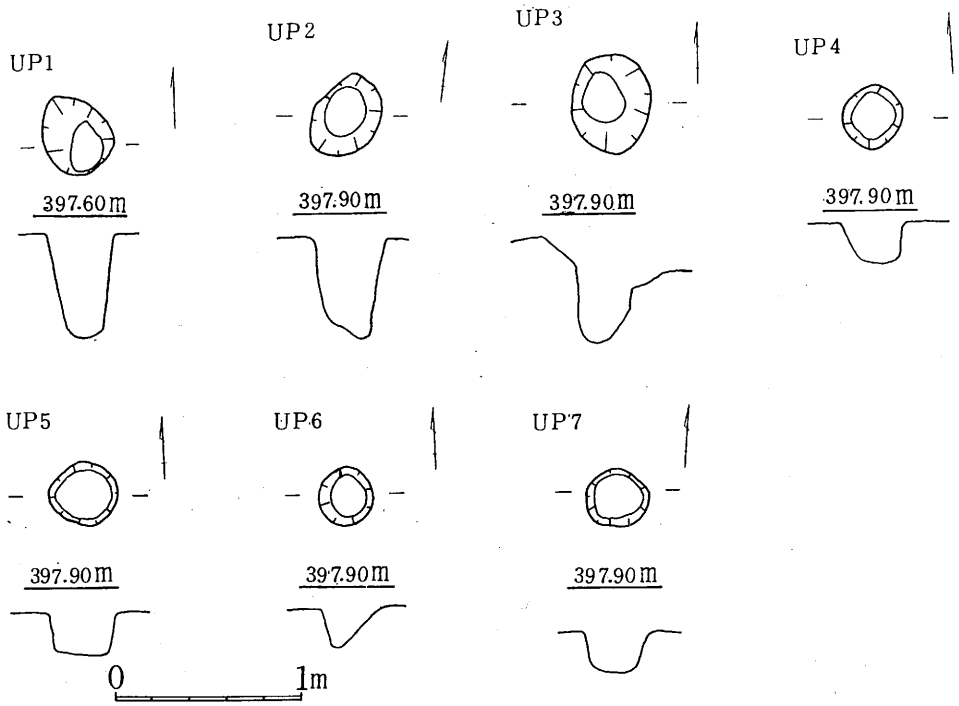


図60　21号住柱穴実測図

23号住居址（箱清水式）

23号住はZ91・92に位置し、隅丸方形のプランをもち、一辺3.5mの小さな住居址で、主住居建物の付属建物的な用途をもつものと考えられる。

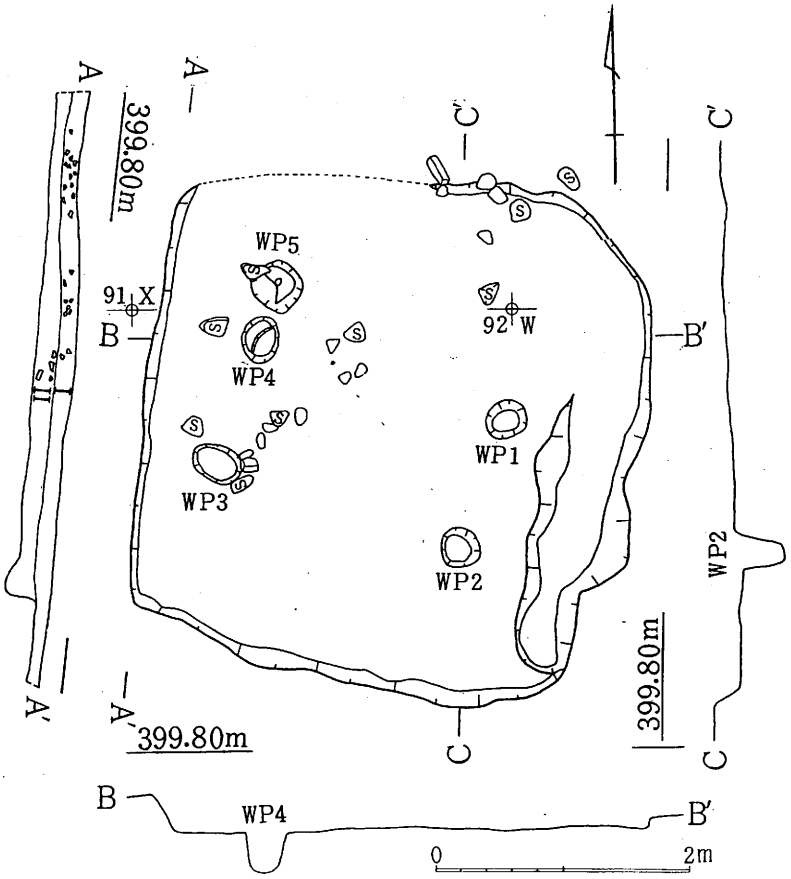


図61　23号住遺構実測図

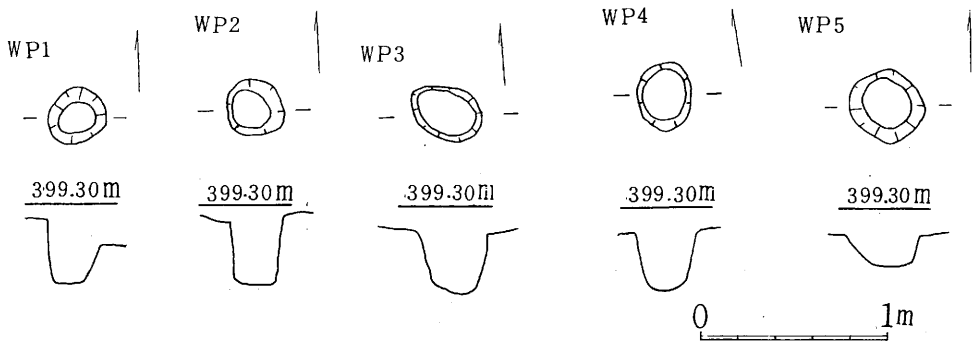


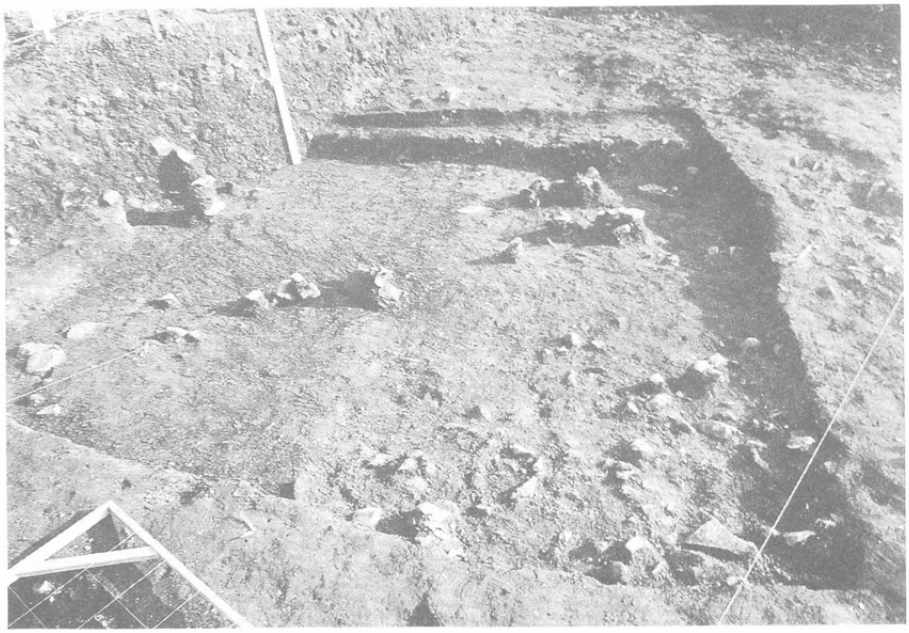
図62　23号住柱穴実測図

主柱穴はＷＰ1～4であり、ここからはまとまった土器の出土はなく、図示はしていない。

↑ 50　北から見た23号住

25号住居址（箱清水式）

25号住はＡＺ106～108の位置にあって、今回の調査では、上の終点の手前にあたっている。東側の一部を除いて完掘できた。隅丸方形のプランで一辺4ｍの規模の住居址で、南に段があり、これも屋内の可能性があり、これを含めると南北4.8ｍとなる。



↑ 51　北から見た25号住の遺物

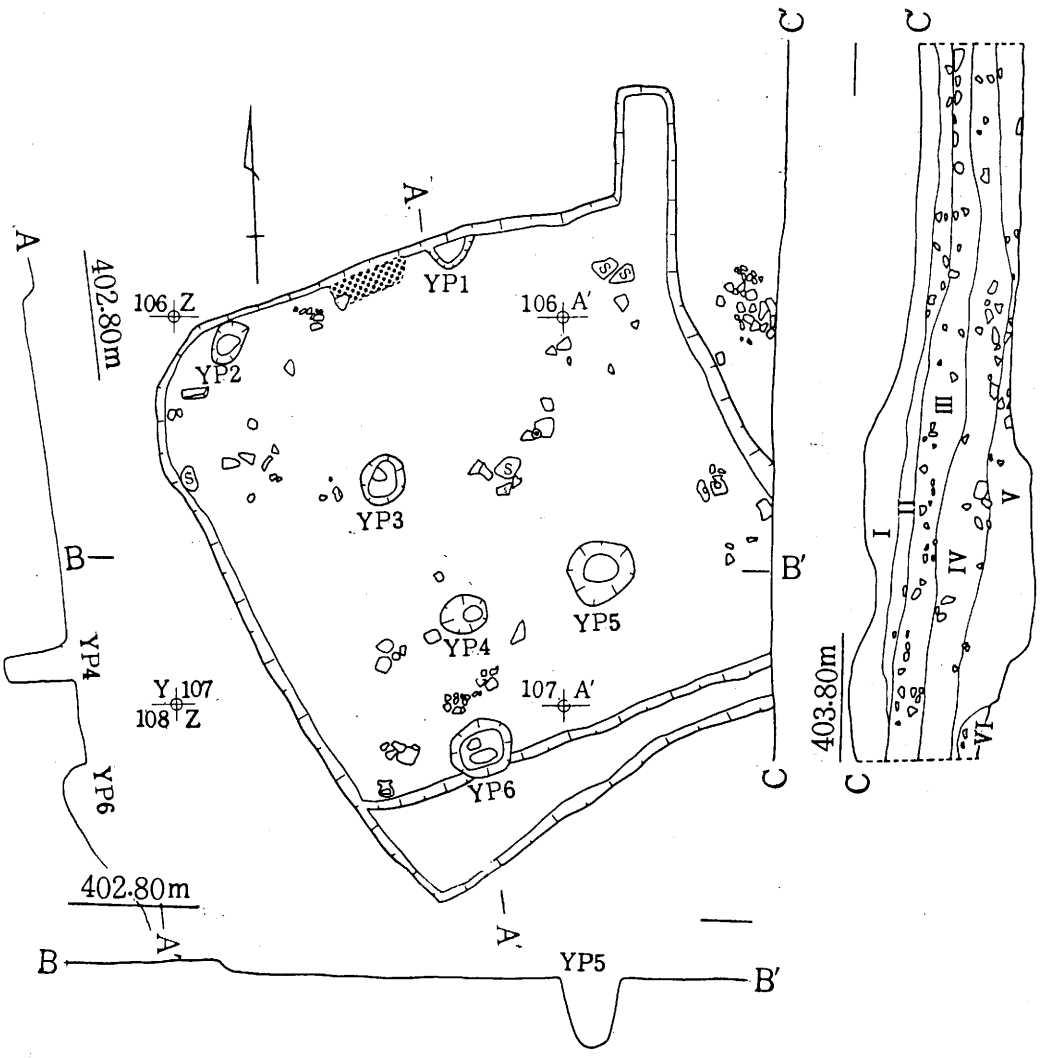


図63　25号住遺構実測図

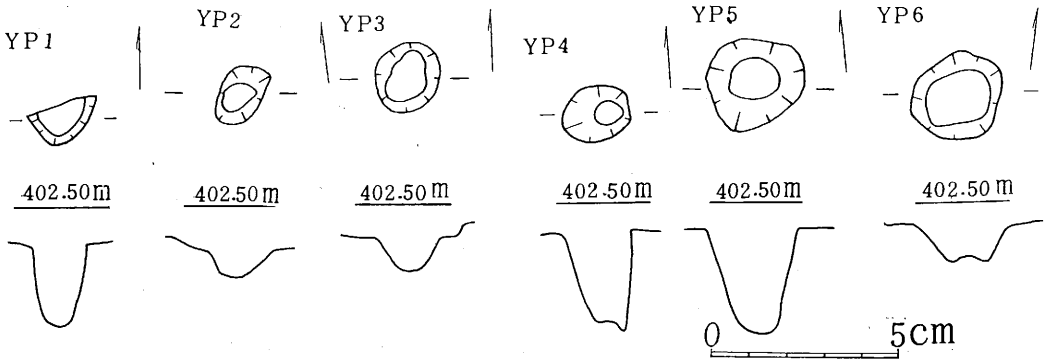


図64　25号住柱穴実測図

この南の外に図64の断面図Ⅵに見られるように、ベルト状に土盛りが見られる。住居の回りに何らかの施設があったと思われる。

北傾斜のため、北側壁が不明で、柱穴ＹＰ1～2の間に地床炉がある。南側の柱穴はＹＰ5はよいが、ＹＰ4は適当な位置ではない。

土器は南西の隅に坏部が椀状の赤彩された高坏（図66Y1）があり、その北に甕（同Y2）があって、東外側に甕（同3）などがあった。

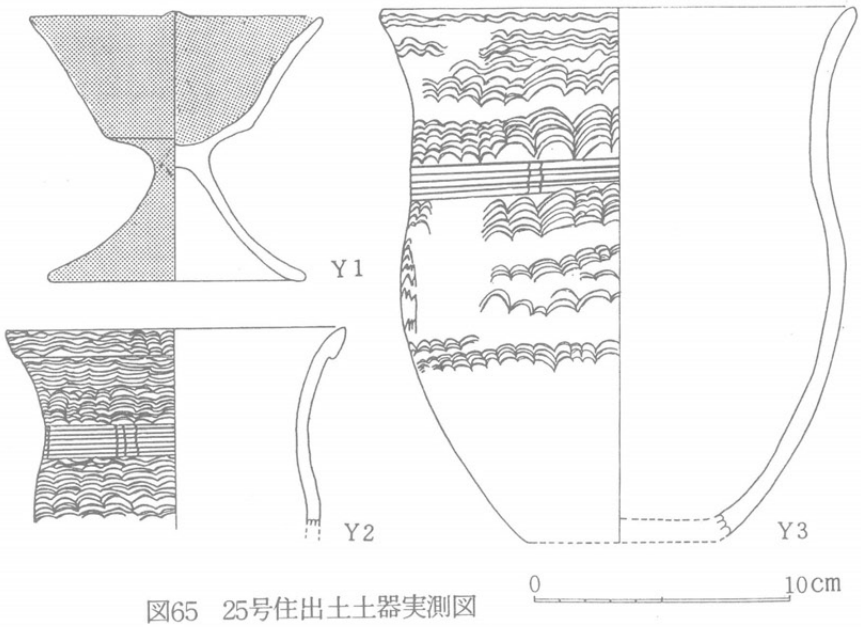


図65　25号住出土土器実測図

↑ 52　25号住出土の高坏

↑ 53　25号住東外側出土土器

26号住居址

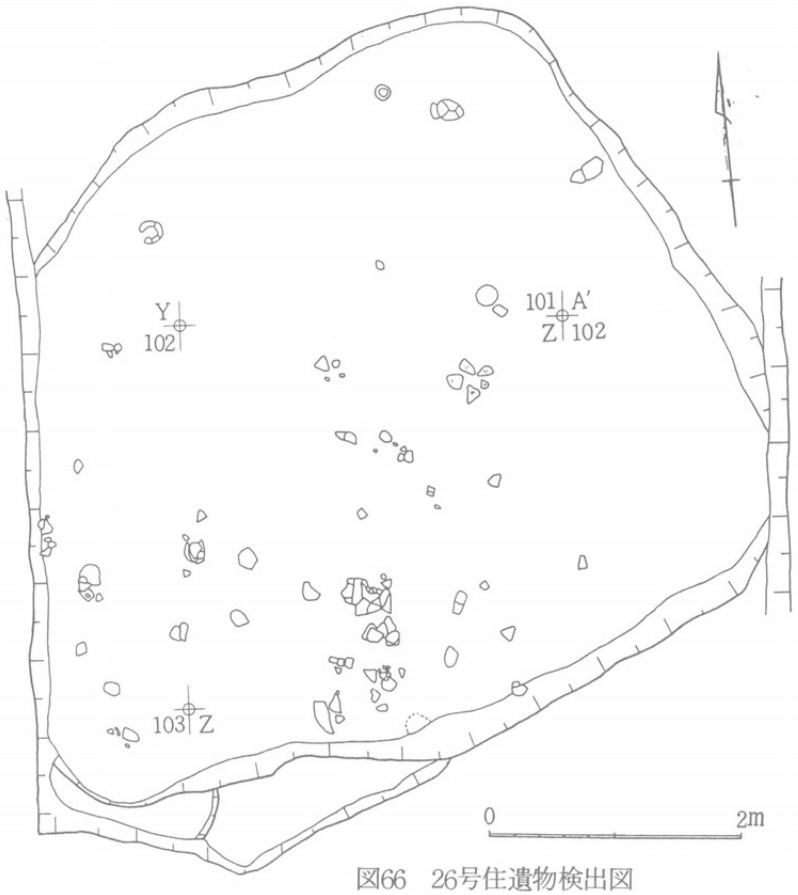
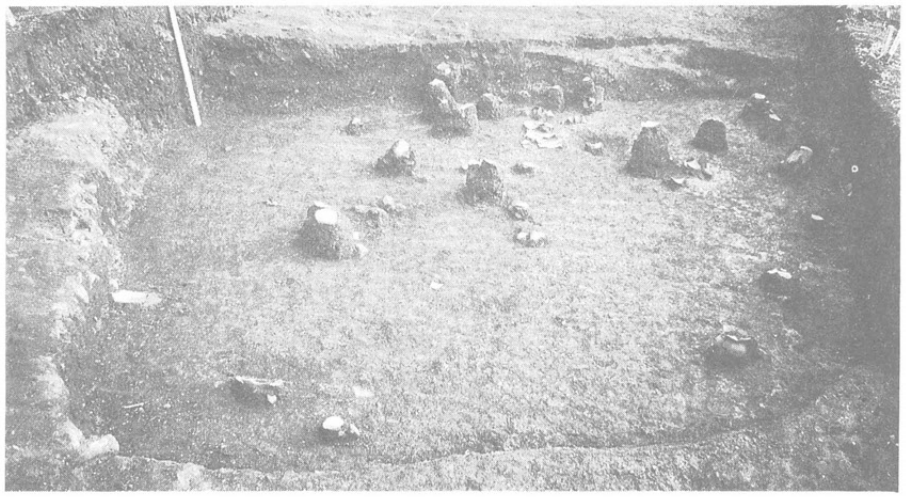


図66　26号住遺物検出図



↑ 54　北から見た26号住の遺物

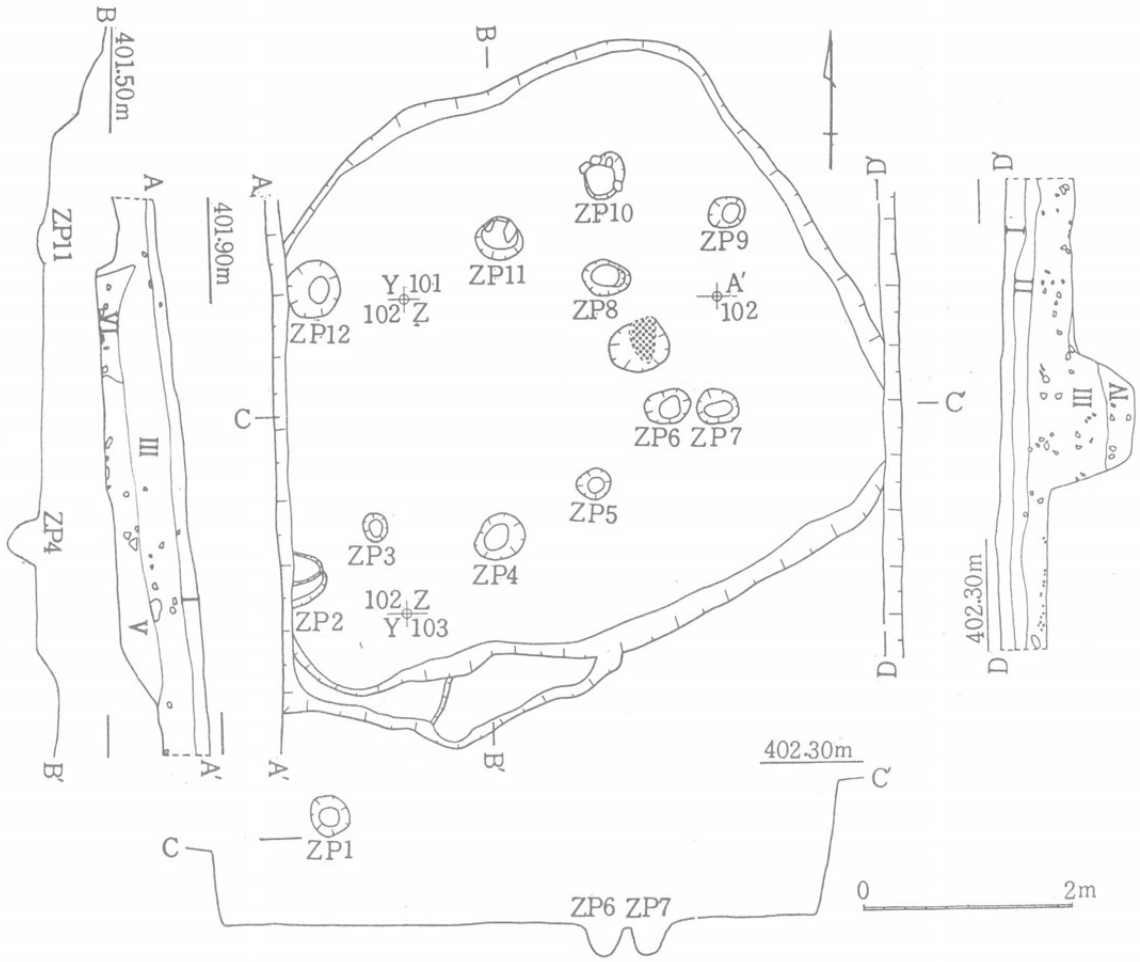


図67　26号住遺構実測図

↑ 55　北から見た26号

26号住居址（箱清水式）

26号住は、ＡＺＹ101～103に位置し、隅丸方形のプランをもち、西側の一部が調査できなかったが、5.5m×6mの規模をもち、今回の調査では弥生時代の内では大形の住居址である。

主柱穴はＺＰ4・7・10・12と推定される。特に東のＺＰ6とＺＰ8の柱穴の間に、地床炉（写真56）あり、東側半分が赤く焼けて固まって高くなっていた。柱間に地床炉がみられる形式は、前回の調査でも確認されたが、このように二重構造になっているのは注目される。

土器は南側に多くあり、赤彩の鉢、大形の壷、甕などで、北側に広口壷、粘土塊があった。

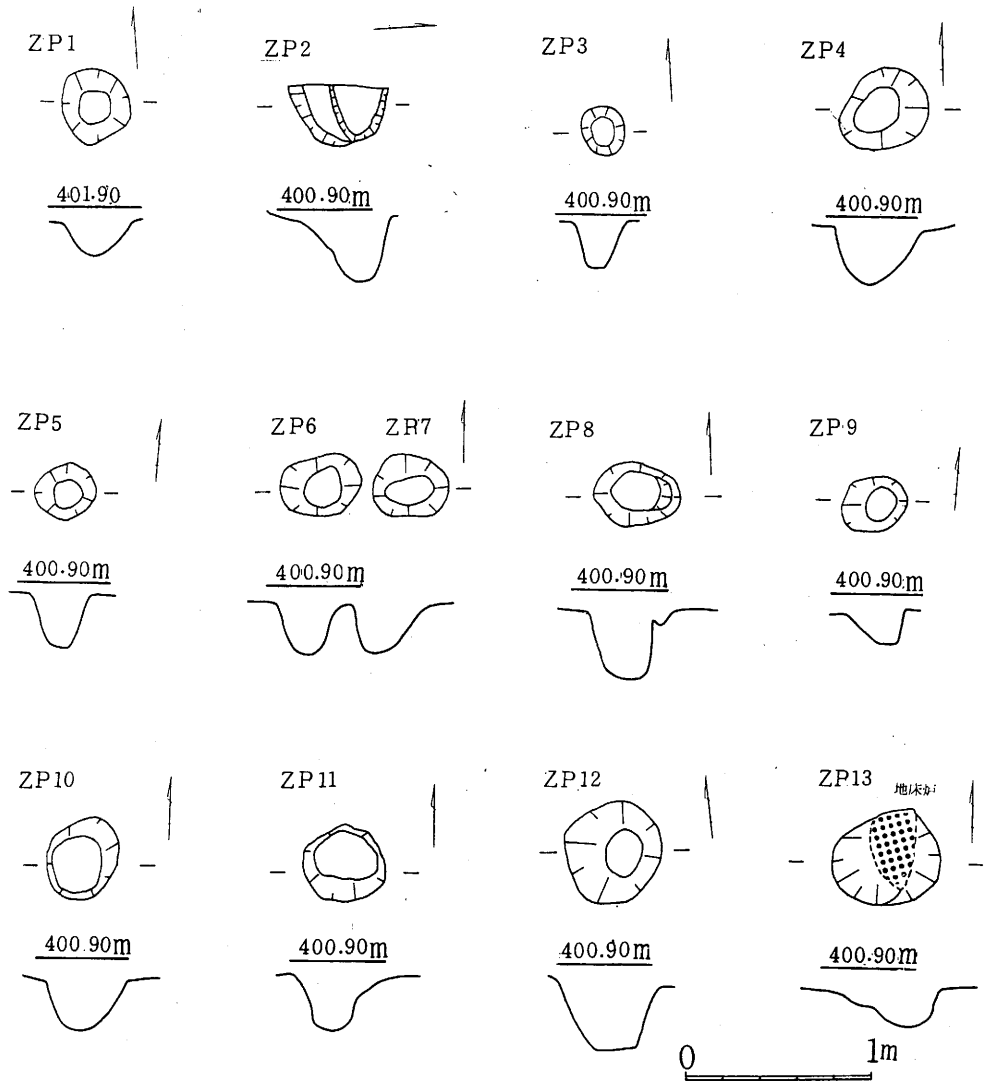
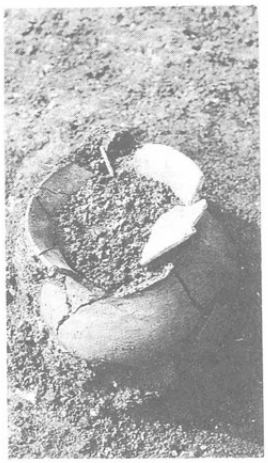


図68　26号住柱穴実測図



↑ 56　広口壷の出土

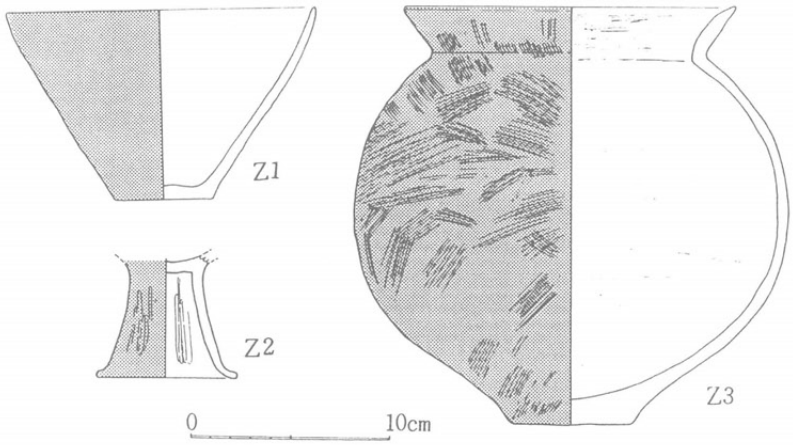
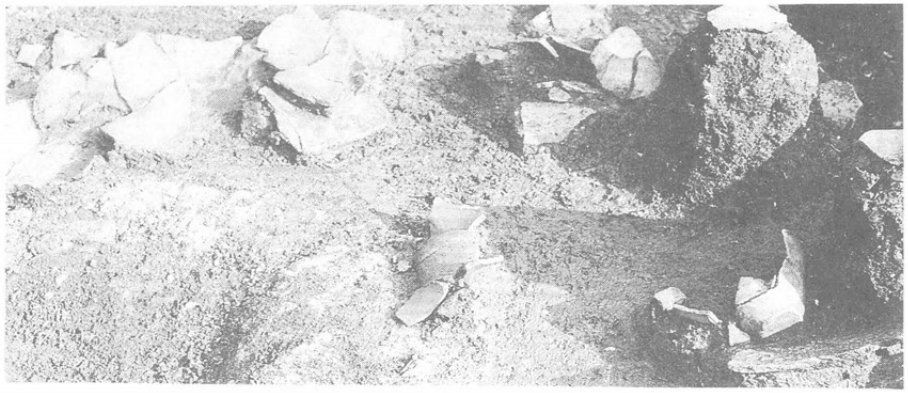


図69　26号出土土器実測図

→
57　西から見た地床炉



↑ 58　南側付近の土器出土

あ と が き

以上は本年度の調査の間山遺跡の弥生時代の遺構の遺物の略報告ですが、間山遺跡の古墳時代については、今まで住居址などの資料が得られていなかった。今回の調査で、市内安源寺遺跡の内容に似た、古墳時代前期に属する住居址が8軒検出され、それ以降の土器も発見されている。

在地の古式土師器に混じって、東海系のS字口縁甕、所謂パレススタイルの元屋敷式系の壷（松本弘法山古墳出土壷A）と同じ口縁内部に櫛状施文具で、羽状刺突文の土器と、胴部に、連続山形文の見られる土器などの破片が検出されている。

それに併せて北陸系の月影式の高坏脚部、口縁部に凹線のもった甕・壷・器台などが、発見されている。

さらに7号住居址のように焼失した、一辺7.5mの大形住居址で、屋根に土が載っていたと、推定されるものもある。

また、この住居址の西方に溝が2条あり、この間には土塁が築かれていたと推定している。この東西の線は、間山地籍では畑の土手の境界線、西方では間山と新野の大字境の道となっており、溝か土塁か今後の検証が望まれる所である。

中世の道が見つかったのも、地域の歴史を知る基礎資料となろう。この道は、小石が敷かれ、石の上は摩滅しており、起点の東から未調査の畑を横切り、発掘地点としばらく平行して進み、間山豊富神社に真っすぐ向かっていたので、調査地の上方では、はずれて未調査であった。

この道からは珠洲焼の摺鉢片、古銭3枚、内耳土器片などが見つかっている。

以上の内容はこの報告書には都合によって、掲載することができず、来年度も引き続いて間山遺跡の発掘調査が行われる予定になっているので、次の報告書で、合わせて報告する予定になっている。

今回の調査にあたり、労力提供、土地関係の問題など地元の農道委員会の役員をはじめ、多くの方々のお世話になった。御芳名は、次の報告書に掲載する予定です。

間山遺跡
発掘調査報告書　II

印刷　平成４年３月10日
発行　平成４年３月20日

編集
発行　中野市教育委員会

印刷　中野市中央2－2－2
カナイ美術印刷